

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財報告書第226集

本宮熊堂B遺跡第1次発掘調査報告書

盛南開発事業関連遺跡発掘調査

盛岡市

（財）岩手県文化振興事業団
埋蔵文化財センター

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財報告書第226集

本宮熊堂B遺跡第1次発掘調査報告書

盛南開発事業関連遺跡発掘調査

序

本県には縄文時代の遺跡をはじめとする数多くの埋蔵文化財包蔵地があり、7,600ヵ所に及ぶ遺跡が確認されています。これら先人の残した文化財を保存し、後世に伝えていくことは県民に課せられた責務であります。

一方、地域開発にともなう社会資本の充実も重要な施策であり、特に近年進行しつつある県都盛岡市の急速な都市化に対応する再開発事業はもっとも急がれるところであります。

このような埋蔵文化財の保護・保存と開発との調和も今日的課題であり、当岩手県文化振興事業団は、埋蔵文化財センターの創設以来、岩手県教育委員会の指導と調整の下に開発事業によって止むを得ず消滅する遺跡の発掘調査を行い、記録保存する措置をとってまいりました。

本報告書は、盛南開発事業による区画整理に先立ち、平成5年度に盛岡市からの委託を受け発掘調査した本宮熊堂B遺跡第1次発掘調査の結果をまとめたものです。本宮熊堂B遺跡は磐石川が形成した沖積平野上に立地し、調査の結果、奈良・平安時代の竪穴住居跡などが発見されています。

この報告書が広く活用され、新学の研究のみならず、埋蔵文化財に対する理解の一助となれば幸いです。

最後になりましたが、これまでの発掘調査および報告書作成にご協力、ご援助を賜りました地権者の方々をはじめ、盛岡市、岩手県土地開発公社、地域振興整備公団、盛岡市教育委員会などの関係各位に衷心より謝意を表します。

平成6年12月

財団法人 岩手県文化振興事業団
理 事 長 高 橋 令 則

例 言

1. 本報告書は岩手県盛岡市本宮字稻荷3-20・4-2他に所在する本宮熊堂B遺跡の発掘調査結果を収録したものである。
2. 本遺跡の調査は、盛南開発事業による区画整理に伴って遺跡の一部が消滅するために、記録保存を目的として実施した緊急発掘調査である。調査は岩手県教育委員会、盛岡市教育委員会、盛岡市の協議を経て、財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが実施した。
3. 本遺跡の岩手県遺跡台帳の遺跡番号および遺跡調査略号は次の通りである。
遺跡番号・略号 LE 16-2118・OKO-01
4. 調査面積は14,400㎡である。野外調査は平成5年4月7日から8月12日にわたって実施した。調査資料の整理作業は平成5年11月1日から平成6年3月31日まで実施した。
5. 発掘調査は伊東格・金子昭彦が担当した。室内整理作業および報告書の作成は伊東格が担当した。
6. 各種鑑定にあたっては下記の方をお願いした。
須恵器の胎土分析・火山灰の蛍光X線分析……三辻利一（奈良教育大学）
7. 野外調査にあたっては、盛岡市教育委員会および地元の方々の御協力をいただいた。
8. 本遺跡から出土した遺物および調査資料は、岩手県立埋蔵文化財センターに保管している。

目 次

序

例言

本 文

I. 調査にいたる経過	2	2. 掘立柱建物跡	46
II. 立地と環境	3	3. 柱穴列	49
1. 遺跡の立地と地形	3	4. 土坑	51
2. 遺跡の位置と環境	3	5. 溝跡	73
3. 基本層序	7	6. 遺構外の出土遺物	84
4. 周辺の遺跡	8	V. まとめと考察	89
III. 調査と室内整理の方法	11	付編. 分析・鑑定の結果	102
1. 調査方法	11	1. 本宮熊堂B遺跡出土火山灰の	
2. 室内整理方法	13	蛍光X線分析	102
IV. 調査の結果	17	2. 本宮熊堂B遺跡出土須恵器の	
1. 竪穴住居跡	17	蛍光X線分析	104

図 版 目 次

第1図 遺跡位置図	1
第2図 地形分類図	4
第3図 遺跡周辺の地形図	5・6
第4図 基本層序	7
第5図 周辺の遺跡	9・10
第6図 遺跡範囲・グリッド配置図	12
第7図 遺構配置図	15・16
第8図 RA 01 竪穴住居跡	18
第9図 RA 01 竪穴住居跡・出土遺物—1 (1～9)	19
第10図 RA 01 竪穴住居跡・出土遺物—2 (10～24)	20
第11図 RA 01 竪穴住居跡・出土遺物—3 (25～32)	21
第12図 RA 01 竪穴住居跡・出土遺物—4 (33～35)	22
第13図 RA 02 竪穴住居跡	24
第14図 RA 02 竪穴住居跡・出土遺物—1 (36～41)	25

第15圖	RA 02 竪穴住居跡・出土遺物—2 (42~56)	26
第16圖	RA 02 竪穴住居跡・出土遺物—3 (57~68)	27
第17圖	RA 02 竪穴住居跡・出土遺物—4 (69~78)	28
第18圖	RA 02 竪穴住居跡・出土遺物—5 (79~87)	29
第19圖	RA 03 竪穴住居跡	31
第20圖	RA 03 竪穴住居跡・出土遺物 (88~92)	32
第21圖	RA 04 竪穴住居跡	33
第22圖	RA 04 竪穴住居跡・出土遺物 (93, 94)	34
第23圖	RA 05 竪穴住居跡	35
第24圖	RA 05 竪穴住居跡・出土遺物—1 (95~102)	36
第25圖	RA 05 竪穴住居跡・出土遺物—2 (103~107)	37
第26圖	RA 05 竪穴住居跡・出土遺物—3 (108~110)	38
第27圖	RA 06 竪穴住居跡	39
第28圖	RA 06 竪穴住居跡・出土遺物—1 (111~122)	40
第29圖	RA 06 竪穴住居跡・出土遺物—2 (123~128)	41
第30圖	RA 07 竪穴住居跡	42
第31圖	RA 07 竪穴住居跡・出土遺物—3 (129~136)	43
第32圖	RA 08 竪穴住居跡	44
第33圖	RA 09 竪穴住居跡平面・埋土断面	45
第34圖	RB 01 掘立柱建物跡平面・埋土断面	47
第35圖	RB 02 掘立柱建物跡平面・埋土断面	48
第36圖	RC 01 柱穴列平面・埋土断面	49
第37圖	RC 02・RC 03 柱穴列平面・埋土断面	50
第38圖	RD 01 土坑平面・埋土断面	52
第39圖	RD 02 土坑・平面・埋土断面・出土遺物 (137~138)	53
第40圖	RD 03・04 土坑・出土遺物 (139~141)	55
第41圖	RD 05・06 土坑・平面・埋土断面・出土遺物 (142~144)	57
第42圖	RD 07 土坑平面・埋土断面・出土遺物 (145~149)	59
第43圖	RD 08・09・10・11 土坑・平面・埋土断面	60
第44圖	RD 12・13・14・15・16・17 土坑	63
第45圖	RD 18・19・20・21・22・23 土坑・平面・埋土断面	66
第46圖	RD 24・25・26・27 土坑・平面・埋土断面	68

第47図	RD 28・29・30 土坑・平面・埋土断面	70
第48図	RD 31・32・33 土坑・平面・埋土断面	72
第49図	RG 01・02・03 溝跡平面・埋土断面	74
第50図	RG 04 溝跡平面・埋土断面	75
第51図	RG 05・06 溝跡平面・埋土断面	77
第52図	RG 07・08・09・10 溝跡平面・埋土断面	80
第53図	RG 11・12 溝跡平面・埋土断面	81
第54図	RG 05・08 溝跡・出土遺物 (151~161)	82
第55図	RG 09・12 溝跡・出土遺物 (162~168)	83
第56図	遺構外出土遺物-1 (169~180)	85
第57図	遺構外出土遺物-2 (181~191)	86
第58図	遺構外出土遺物-3 (192~205)	87
第59図	遺構外出土遺物-4 (206~213)	88
第60図	竪穴住居跡の分類	93

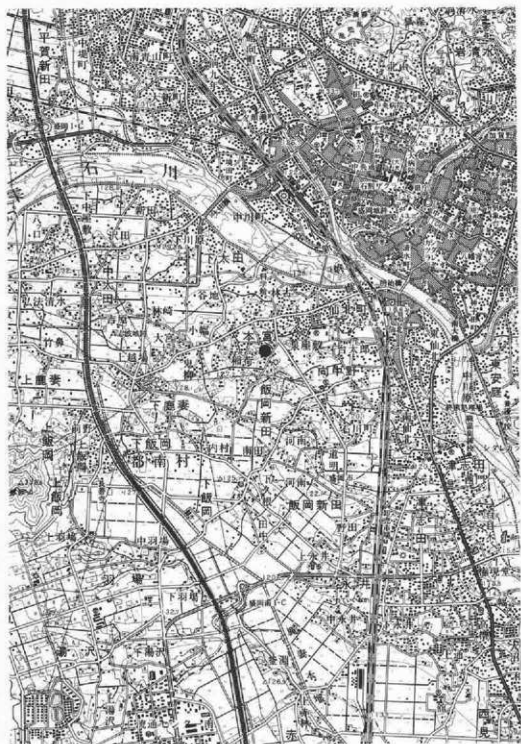
写真図版目次

写真図版 1	遺跡全景 (空中写真)	107
写真図版 2	基本層序 1, 2, 3	108
写真図版 3	RA 01 竪穴住居跡	109
写真図版 4	RA 02 竪穴住居跡	110
写真図版 5	RA 03 竪穴住居跡	111
写真図版 6	RA 04 竪穴住居跡	112
写真図版 7	RA 05 竪穴住居跡	113
写真図版 8	RA 06 竪穴住居跡	114
写真図版 9	RA 07 竪穴住居跡	115
写真図版 10	RA 08・09 竪穴住居跡	116
写真図版 11	RB 01 掘立柱建物跡	117
写真図版 12	RB 02 掘立柱建物跡	118
写真図版 13	RC 01・02 柱穴列	119
写真図版 14	RC 03 柱穴列, RD 01・02 土坑	120
写真図版 15	RD 03・04・05・06 土坑	121
写真図版 16	RD 07・08・09・10 土坑	122

写真図版17	RD 11・12・13・14 土坑	123
写真図版18	RD 15・16・17・18 土坑	124
写真図版19	RD 19・20・21・22 土坑	125
写真図版20	RD 23・24・25・26 土坑	126
写真図版21	RD 27・28・29・30 土坑	127
写真図版22	RD 31・32・33 土坑	128
写真図版23	RG 01・02・03・04 溝跡	129
写真図版24	RG 05・06・07・08 溝跡	130
写真図版25	RG 07・08・09・10 溝跡	131
写真図版26	RG 08・09・11・12 溝跡	132
写真図版27	遺構内出土遺物—1 (1~20)	133
写真図版28	遺構内出土遺物—2 (21~35)	134
写真図版29	遺構内出土遺物—3 (36~56)	135
写真図版30	遺構内出土遺物—4 (57~75)	136
写真図版31	遺構内出土遺物—5 (76~87)	137
写真図版32	遺構内出土遺物—6 (88~105)	138
写真図版33	遺構内出土遺物—7 (106~110)	139
写真図版34	遺構内出土遺物—8 (111~128)	140
写真図版35	遺構内出土遺物—9 (129~141)	141
写真図版36	遺構内出土遺物—10 (142~153)	142
写真図版37	遺構内出土遺物—11 (154~168)	143
写真図版38	遺構外出土遺物—1 (169~188)	144
写真図版39	遺構外出土遺物—2 (189~205)	145
写真図版40	遺構外出土遺物—3 (206~213)	146

表 目 次

第1表	周辺の遺跡一覧	8
第2表	本宮熊堂B遺跡出土環形土器観察表	96・97・98・99
第3表	本宮熊堂B遺跡出土壺形土器観察表	99・100・101
第4表	本宮熊堂B遺跡出土土製品観察表	101
第5表	本宮熊堂B遺跡出土鉄製品観察表	101
第6表	本宮熊堂B遺跡出土古銭観察表	101



1 : 50,000 盛岡・日誌

第1圖 遺跡位置図

I. 調査に至る経過

盛岡市新都市開発整備事業は、盛岡市がきたるべき21世紀に向けて、経済・文化などに対する各機能を兼ね備えた北東北の拠点都市を目指して、盛岡市の既成市街地の他に盛岡市南部地域を新市街地として開発し、両者が有機的に結びついた軸状都心を形成するために策定された土地区画整理事業である。

この事業は、岩手県、盛岡市、都南村（現盛岡市）の3者で地域振興整備公団に対し平成2年9月に事業要請され、事業要請を受けた地域振興整備公団は事業実施基本計画を作成し、平成3年12月に建設大臣と国土庁長官から認可され、平成3年度から平成17年度までの15年間で事業予定期間として、面積約320haを対象とした土地区画整理事業が実施されることとなった。

事業の対象地域に係る埋蔵文化財の取扱に付いては協議を重ねられ、その結果、本調査に先立って盛岡市教育委員会が試掘調査を行って、本調査を必要とする範囲を確定することとし、本調査は財団法人岩手県文化振興事業団の受託事業とすることとなった。

当遺跡に付いては、岩手県教育委員会が盛岡市と協議の結果、平成5年度の事業として確定した。それを受けて、平成5年4月1日付けの契約によって当文化振興事業団の受託事業として本調査を実施することとした。

II. 立 地 と 環 境

1. 遺跡の立地と地形

本遺跡の所在する盛岡市は岩手県を南北に貫いて流れる北上川の中流域の北端に位置し、北は滝沢村・玉山村、東は岩泉町、川井村、南は矢巾町、紫波町、大迫町、西は雫石町と境を接している。北上川は全長249km、流域面積10,150km²の東北一の大河で、岩手県岩手郡御堂にその源を発するが、盛岡で雫石川と中津川を合わせて大河となる。北上川は中流域の右岸においては新第三紀層の砂岩、凝灰岩を基盤とする台地、扇状地の末端に浸食崖を形成する。同川は盛岡市仙北町で奥羽山脈の横岳に源を発する雫石川と合流し、北上盆地を形成する。北上盆地は北上川と雫石川をはじめとするその支流が開折したものであり、雫石川も、南川、諸葛川などを支流とする全長33.2kmの一級河川である。

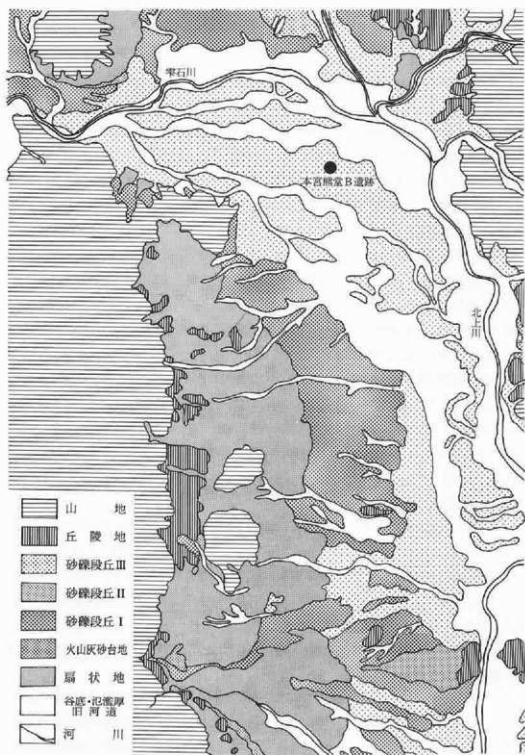
北上川に注ぐ支流のうち、大きな河川はほとんどが奥羽山脈に源を持つことから、奥羽山脈支流から運び込まれる砂礫量は、北上山脈支流から運ばれるそれに比べて著しく多く、北上川の西では大小の段丘や扇状地、河岸平野および起伏量の小さい丘陵地が互に入り組む構造となって、古来から人々に生活の場を提供してきた。

この北上盆地の持つ特徴は盛岡市周辺でもそのまま現れ、北上山地支流である中津川や梁川は開折平野をその流域にほとんど作り出していないが、奥羽山脈支流である雫石川は太田地区から飯岡地区にかけて扇状地状の広い平坦地を作り出している。これらの平坦地の大部分は扇状地や旧河床が段丘化したものであり、中川久夫氏は高位の石鳥谷段丘、中位の二枚橋段丘、低位の花巻段丘・都南段丘に区別している。本遺跡の立地する本宮地区も雫石川の右岸に形成された沖積段丘上にある。

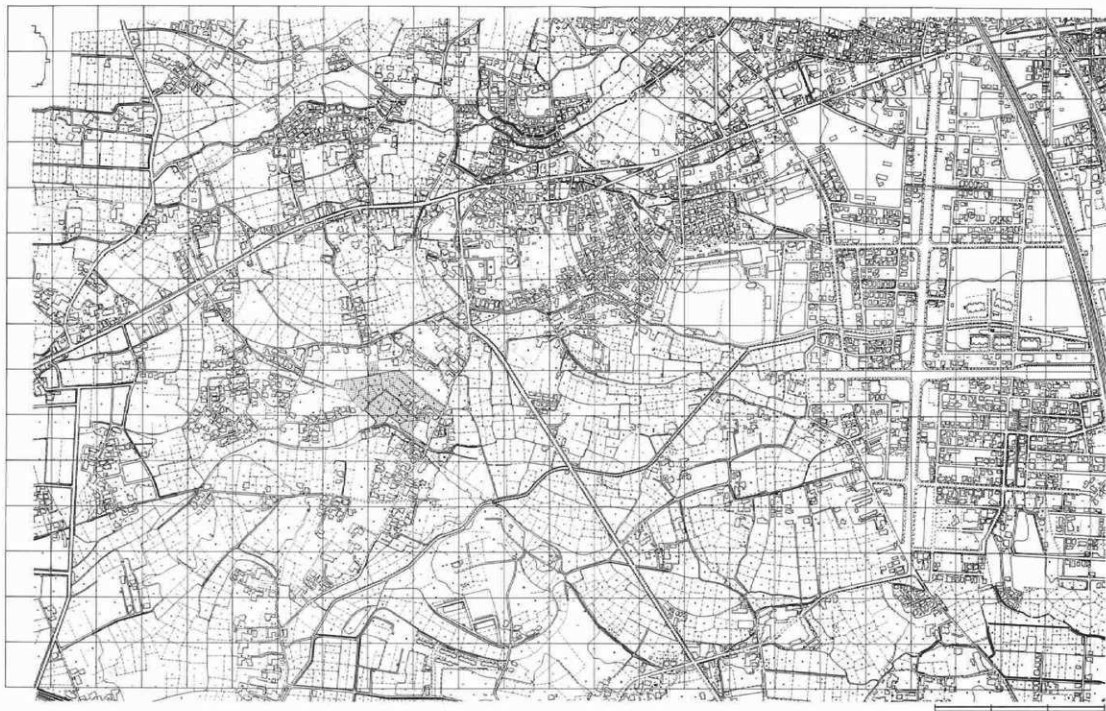
この沖積段丘は雫石川が周辺から供給した砂礫やシルト質土で被覆され、雫石川により下刻や堆積が繰り返して行われてきており、常に河川の影響を受けた不安定な地形である。不安定な流路の変遷は、現在でも自然堤防への集落の立地や、水田・畦畔の配置状況から読み取ることができる。本遺跡はこのような旧河道の沿辺に形成された自然堤防とみられる河岸段丘上に立地している。

2. 遺跡の位置と環境

本遺跡は東日本旅客鉄道東北本線仙北町駅の西約1.7kmに位置し、雫石川右岸の河岸段丘上に立地している。一帯の地目は水田・畑地・宅地・果樹園などである。第1次調査の範囲は周囲を用水路・道路に囲まれた水田・畑地を中心とし、調査面積は14,400m²、調査区の標高は約124mである。同地点は北緯39度16分、東経141度4分付近である。



第2図 地形分類図(盛岡市教育委員会「志波城跡Ⅰ」1981を参考に作成)

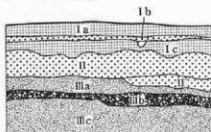


第3図 遺跡周辺の地形図

3. 基本層序

遺跡の層序は前述のように現況が水田であることから比較的均一な状況を示す。I層は黒褐色シルト層であるが、中に水田の鋤床である赤褐色の酸化鉄層(Ib)を含む。これより上位(Ia層)は水田耕作に起因する植物遺体の混入が多く、下位(Ic層)は耕作による攪乱の影響をほとんど受けない。部分的に遷移層として黒色シルトと暗褐色シルトとの混合であるII層が存在する。遺構の検出面はIII層で、褐色から黄褐色の砂質シルトあるいは粘質シルト層であるが、部分的にこぶし大から人頭大の礫の混じる層が存在する。この層は平面的には帯状に分布しており、旧河道の変遷に起因するものと思われる。地域によってIII層の細分は様相を異にする。

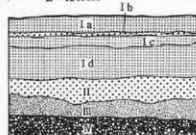
— L=124.400 —



基本土層-1 遺構面中区7N-7P

- Ia 10Y R 3/3 暗褐色シルト 耕作土 水田耕作に起因する植物遺体の混入が多い
- Ib 10Y R 3/3 暗褐色シルトと赤褐色の酸化鉄の混合
きわめて硬く、水の透過性小 水田の鋤床
- Ic 10Y R 3/3 暗褐色シルト
- IIa 10Y R 2/2 黒褐色シルトと10Y R 4/6 褐色シルトの混合 I層～II層の遷移層
- IIb 10Y R 2/2 黒褐色シルトと10Y R 4/6 褐色シルトの混合
IIa層より後者の比率が高くなる。I層～II層の遷移層
- IIIa 10Y R 4/6 褐色砂質シルト IIIa層より粒径がやや大きい
- IIIb 10Y R 4/6 褐色砂質シルト こぶし大から人頭大の礫が多量に混じる
- IIIc 10Y R 4/6 褐色砂質シルト ほとんど小礫が混じる

— L=124.400 —



基本土層-2

- Ia 10Y R 2/2 黒褐色シルト 耕作土 水田耕作に起因する植物遺体の混入が多い
- Ib 10Y R 2/2 黒褐色シルトと赤褐色の酸化鉄の混合
きわめて硬く、水の透過性小 水田の鋤床
- Ic 10Y R 4/6 黒褐色シルト Ia層とは同様であるが、植物遺体を含まない
- Id 10Y R 2/2 黒褐色シルト 耕作土
- II 10Y R 2/2 黒褐色シルトと10Y R 3/3 暗褐色シルトの混合 I層～II層の遷移層
- III 10Y R 5/5 黄褐色砂質シルト
- IV 10Y R 5/5 黄褐色砂質シルト

— L=124.400 —



基本土層-3

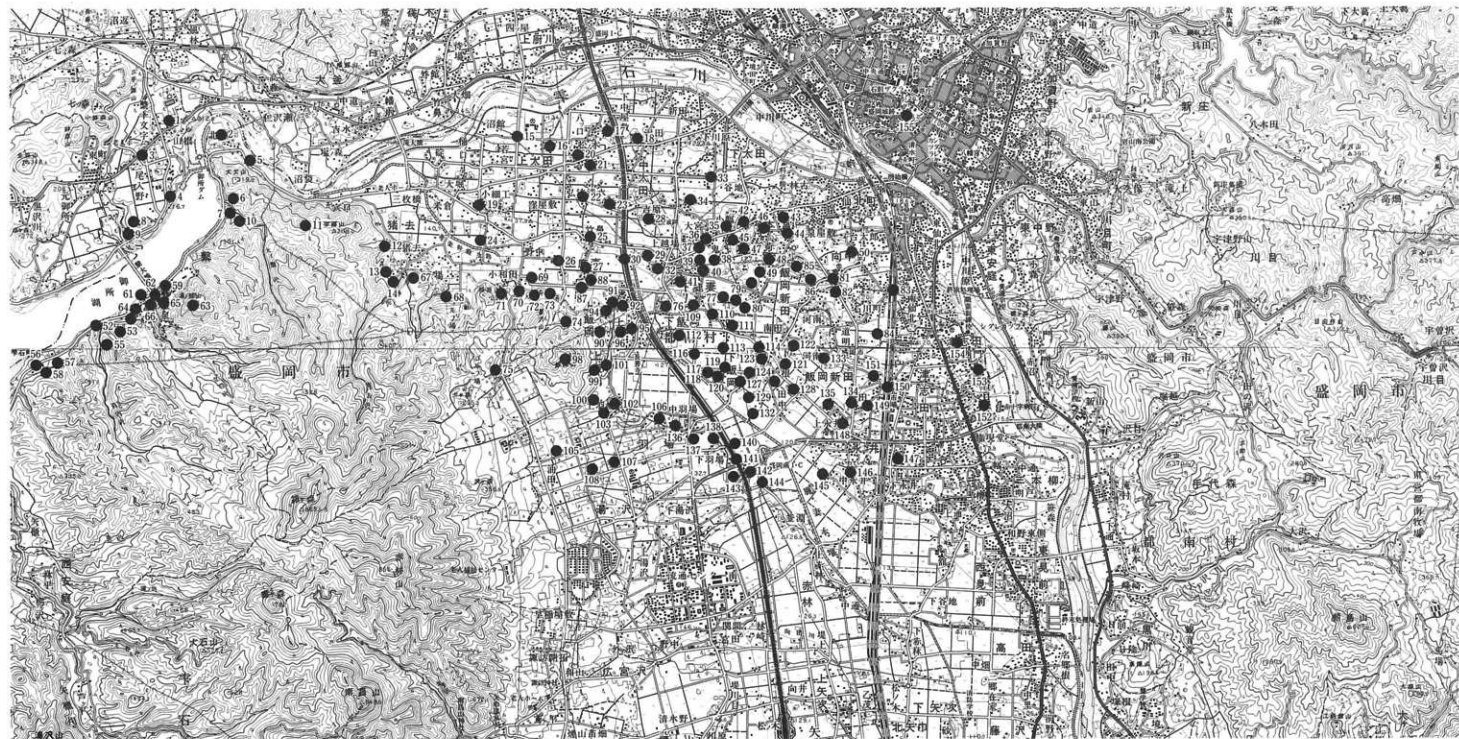
- Ia 10Y R 2/2 黒褐色シルト 耕作土 水田耕作に起因する植物遺体の混入が多い
- Ib 10Y R 2/2 黒褐色シルトと赤褐色の酸化鉄の混合
きわめて硬く、水の透過性小 水田の鋤床
- Ic 10Y R 4/6 黒褐色シルト Ia層とは同様であるが、植物遺体を含まない
- IIIa 10Y R 5/5 黄褐色砂質シルト 径10mm程度の小礫が混じる 水の透過性大
- IIIc 10Y R 5/5 黄褐色砂質シルト

第4図 基本層序

4. 周辺の遺跡

盛岡市とその周辺の遺跡は、岩手県の遺跡台帳に登録されているだけでも283(昭和61年度現在)がある。本遺跡からは奈良・平安時代の住居跡が確認されたので、奈良・平安時代を中心に歴史時代の遺跡について、また、地形のまとまりとの関連上、雫石川以南を中心とする範囲について以下に表を示し、その位置を図に示す。

№	遺跡名	種別	時代	所在地	№	遺跡名	種別	時代	所在地
1	板橋Ⅱ	散布地	縄文・古代	雫石山根	79	西庭Ⅱ	高麗跡	古代	下飯塚下田
2	赤ノ鼻	散布地	縄文・古代	雫石ノ鼻	80	清田	高麗跡	古代	下飯塚下田
3	板橋Ⅰ	散布地	縄文・古代	雫石城入野	81	内中野Ⅱ	高麗跡	中世	内中野字久田
4	入野Ⅱ	散布地	縄文	雫石城入野	82	板橋Ⅱ	高麗跡	古代	内中野字板橋、神楽
5	入野Ⅰ	高麗跡	縄文・古代	雫石ノ鼻	83	青森Ⅱ	高麗跡、高麗跡	縄文・古代	内中野字青森、神楽
6	下飯塚Ⅱ	散布地	縄文・中世	雫石ノ鼻	84	内中野Ⅱ	高麗跡	古代	内中野字久田
7	下飯塚Ⅰ	散布地	縄文	雫石ノ鼻	85	板橋Ⅱ	高麗跡	古代	内中野字久田
8	赤ノ鼻	高麗跡	縄文	雫石ノ鼻	86	板橋Ⅱ	高麗跡	古代	内中野字久田
9	新飯塚	散布地・城跡	縄文・中世	雫石ノ鼻	87	中野	高麗跡	平安	上飯塚字中野
10	下飯塚Ⅱ	散布地	縄文	雫石ノ鼻	88	月山	散布地	縄文・古代	上飯塚字山中
11	板橋Ⅱ	城跡	中世・近世	雫石ノ鼻	89	山中	高麗跡	縄文・古代	上飯塚字山中
12	田中Ⅱ	散布地	縄文・古代	雫石田中Ⅱ	90	板橋Ⅱ	高麗跡	中世	上飯塚字山中
13	田中Ⅰ	城跡	中世	雫石田中Ⅱ	91	田中	高麗跡	縄文・古代	上飯塚字山中
14	上飯塚	高麗跡	縄文・古代	雫石上飯塚	92	高麗Ⅱ	高麗跡	中世	上飯塚字山中
15	板橋Ⅱ	散布地	平安時代	上飯塚田中Ⅱ	93	高麗Ⅱ	高麗跡	平安	上飯塚字山中
16	板橋Ⅱ	散布地	平安時代	上飯塚田中Ⅱ	94	高麗Ⅱ	高麗跡	平安	上飯塚字山中
17	ハツロ	散布地	古代	上飯塚ハツロ	95	大田Ⅱ	高麗跡	古代	上飯塚字大田
18	八戸	散布地	平安時代	中八戸八戸	96	大田Ⅱ	高麗跡	古代	上飯塚字大田
19	上飯塚内山古墳群	古墳	平安時代	上飯塚内山	97	板橋Ⅱ	高麗跡	中世	上飯塚字大田
20	上飯塚	高麗跡	平安時代	上飯塚内山	98	板橋Ⅱ	高麗跡	中世	上飯塚字大田
21	上飯塚	高麗跡	平安時代	上飯塚内山	99	板橋Ⅱ	高麗跡	中世	上飯塚字大田
22	上飯塚	高麗跡	平安時代	上飯塚内山	100	いたこ	高麗跡	平安	上飯塚字大田
23	上飯塚	高麗跡	平安時代	上飯塚内山	101	板橋Ⅱ	高麗跡	平安	上飯塚字大田
24	一本木	高麗跡	平安時代	上飯塚一本木	102	板橋Ⅱ	高麗跡	平安	上飯塚字大田
25	片山内山古墳群	古墳	平安時代	上飯塚片山内山	103	板橋Ⅱ	高麗跡	平安	上飯塚字大田
26	片山	高麗跡	平安時代	上飯塚片山	104	板橋Ⅱ	高麗跡	平安	上飯塚字大田
27	片山	高麗跡	平安時代	上飯塚片山	105	板橋Ⅱ	高麗跡	平安	上飯塚字大田
28	片山	高麗跡	平安時代	上飯塚片山	106	板橋Ⅱ	高麗跡	平安	上飯塚字大田
29	片山	高麗跡	平安時代	上飯塚片山	107	板橋Ⅱ	高麗跡	平安	上飯塚字大田
30	片山	高麗跡	平安時代	上飯塚片山	108	板橋Ⅱ	高麗跡	平安	上飯塚字大田
31	片山	高麗跡	平安時代	上飯塚片山	109	板橋Ⅱ	高麗跡	平安	上飯塚字大田
32	片山	高麗跡	平安時代	上飯塚片山	110	板橋Ⅱ	高麗跡	平安	上飯塚字大田
33	片山	高麗跡	平安時代	上飯塚片山	111	板橋Ⅱ	高麗跡	平安	上飯塚字大田
34	片山	高麗跡	平安時代	上飯塚片山	112	板橋Ⅱ	高麗跡	平安	上飯塚字大田
35	片山	高麗跡	平安時代	上飯塚片山	113	板橋Ⅱ	高麗跡	平安	上飯塚字大田
36	片山	高麗跡	平安時代	上飯塚片山	114	板橋Ⅱ	高麗跡	平安	上飯塚字大田
37	片山	高麗跡	平安時代	上飯塚片山	115	板橋Ⅱ	高麗跡	平安	上飯塚字大田
38	片山	高麗跡	平安時代	上飯塚片山	116	板橋Ⅱ	高麗跡	平安	上飯塚字大田
39	片山	高麗跡	平安時代	上飯塚片山	117	板橋Ⅱ	高麗跡	平安	上飯塚字大田
40	片山	高麗跡	平安時代	上飯塚片山	118	板橋Ⅱ	高麗跡	平安	上飯塚字大田
41	片山	高麗跡	平安時代	上飯塚片山	119	板橋Ⅱ	高麗跡	平安	上飯塚字大田
42	片山	高麗跡	平安時代	上飯塚片山	120	板橋Ⅱ	高麗跡	平安	上飯塚字大田
43	片山	高麗跡	平安時代	上飯塚片山	121	板橋Ⅱ	高麗跡	平安	上飯塚字大田
44	片山	高麗跡	平安時代	上飯塚片山	122	板橋Ⅱ	高麗跡	平安	上飯塚字大田
45	片山	高麗跡	平安時代	上飯塚片山	123	板橋Ⅱ	高麗跡	平安	上飯塚字大田
46	片山	高麗跡	平安時代	上飯塚片山	124	板橋Ⅱ	高麗跡	平安	上飯塚字大田
47	片山	高麗跡	平安時代	上飯塚片山	125	板橋Ⅱ	高麗跡	平安	上飯塚字大田
48	片山	高麗跡	平安時代	上飯塚片山	126	板橋Ⅱ	高麗跡	平安	上飯塚字大田
49	片山	高麗跡	平安時代	上飯塚片山	127	板橋Ⅱ	高麗跡	平安	上飯塚字大田
50	片山	高麗跡	平安時代	上飯塚片山	128	板橋Ⅱ	高麗跡	平安	上飯塚字大田
51	片山	高麗跡	平安時代	上飯塚片山	129	板橋Ⅱ	高麗跡	平安	上飯塚字大田
52	片山	高麗跡	平安時代	上飯塚片山	130	板橋Ⅱ	高麗跡	平安	上飯塚字大田
53	片山	高麗跡	平安時代	上飯塚片山	131	板橋Ⅱ	高麗跡	平安	上飯塚字大田
54	片山	高麗跡	平安時代	上飯塚片山	132	板橋Ⅱ	高麗跡	平安	上飯塚字大田
55	片山	高麗跡	平安時代	上飯塚片山	133	板橋Ⅱ	高麗跡	平安	上飯塚字大田
56	片山	高麗跡	平安時代	上飯塚片山	134	板橋Ⅱ	高麗跡	平安	上飯塚字大田
57	片山	高麗跡	平安時代	上飯塚片山	135	板橋Ⅱ	高麗跡	平安	上飯塚字大田
58	片山	高麗跡	平安時代	上飯塚片山	136	板橋Ⅱ	高麗跡	平安	上飯塚字大田
59	片山	高麗跡	平安時代	上飯塚片山	137	板橋Ⅱ	高麗跡	平安	上飯塚字大田
60	片山	高麗跡	平安時代	上飯塚片山	138	板橋Ⅱ	高麗跡	平安	上飯塚字大田
61	片山	高麗跡	平安時代	上飯塚片山	139	板橋Ⅱ	高麗跡	平安	上飯塚字大田
62	片山	高麗跡	平安時代	上飯塚片山	140	板橋Ⅱ	高麗跡	平安	上飯塚字大田
63	片山	高麗跡	平安時代	上飯塚片山	141	板橋Ⅱ	高麗跡	平安	上飯塚字大田
64	片山	高麗跡	平安時代	上飯塚片山	142	板橋Ⅱ	高麗跡	平安	上飯塚字大田
65	片山	高麗跡	平安時代	上飯塚片山	143	板橋Ⅱ	高麗跡	平安	上飯塚字大田
66	片山	高麗跡	平安時代	上飯塚片山	144	板橋Ⅱ	高麗跡	平安	上飯塚字大田
67	片山	高麗跡	平安時代	上飯塚片山	145	板橋Ⅱ	高麗跡	平安	上飯塚字大田
68	片山	高麗跡	平安時代	上飯塚片山	146	板橋Ⅱ	高麗跡	平安	上飯塚字大田
69	片山	高麗跡	平安時代	上飯塚片山	147	板橋Ⅱ	高麗跡	平安	上飯塚字大田
70	片山	高麗跡	平安時代	上飯塚片山	148	板橋Ⅱ	高麗跡	平安	上飯塚字大田
71	片山	高麗跡	平安時代	上飯塚片山	149	板橋Ⅱ	高麗跡	平安	上飯塚字大田
72	片山	高麗跡	平安時代	上飯塚片山	150	板橋Ⅱ	高麗跡	平安	上飯塚字大田
73	片山	高麗跡	平安時代	上飯塚片山	151	板橋Ⅱ	高麗跡	平安	上飯塚字大田
74	片山	高麗跡	平安時代	上飯塚片山	152	板橋Ⅱ	高麗跡	平安	上飯塚字大田
75	片山	高麗跡	平安時代	上飯塚片山	153	板橋Ⅱ	高麗跡	平安	上飯塚字大田
76	片山	高麗跡	平安時代	上飯塚片山	154	板橋Ⅱ	高麗跡	平安	上飯塚字大田
77	片山	高麗跡	平安時代	上飯塚片山	155	板橋Ⅱ	高麗跡	平安	上飯塚字大田
78	片山	高麗跡	平安時代	上飯塚片山	156	板橋Ⅱ	高麗跡	平安	上飯塚字大田
79	片山	高麗跡	平安時代	上飯塚片山	157	板橋Ⅱ	高麗跡	平安	上飯塚字大田



第5図 周辺の遺跡

Ⅲ. 調査と室内整理の方法

1. 調査方法

(1) 調査区の地区割と遺構の命名

盛南開発事業区域約450万㎡のうち地域公園施行区域約320万㎡には埋蔵文化財包蔵地が約60万㎡あり、長期間にわたる調査が計画されている。本遺跡を含め、これらの包蔵地の性格を统一的に把握するため、グリッドの設定は以下のおこなった。公共座標軸第X系上の1点($X = -35,000.000$, $Y = 25,000.000$)を原点とし、南北、東西に平行する直線で50m毎に区切り、大グリッドとする。この大グリッドをさらに2m毎に区切り、小グリッドとする。グリッドの名称は大グリッドを西から東にA, B, C……、北から南に1, 2, 3……とし、グリッド名を1A, 2B……とする。小グリッドは大グリッドごとに西から東にa, b……Y、北から南に1, 2, 3……25とした。従って、小グリッドの呼称は1A2b区、3C4d区……のようになる。本遺跡はこの大グリッド上の6M～6P、7M～7Q、8N～8Q、9O、9Pに位置する。

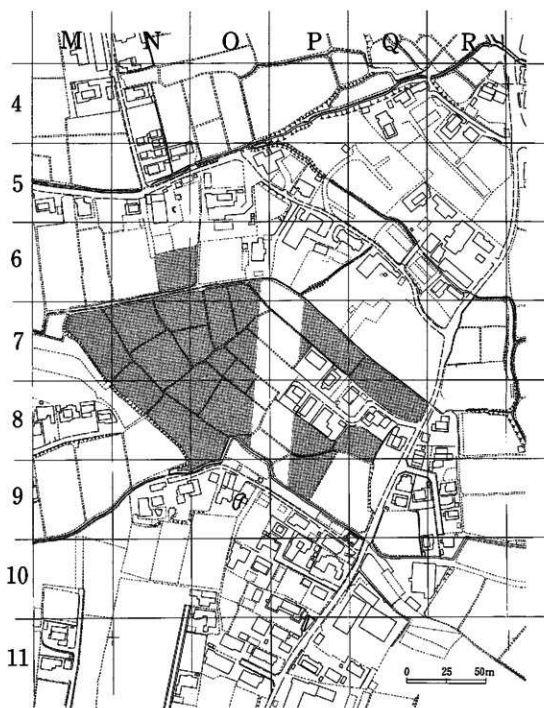
遺構名は検出順に番号を付し、RA01堅穴住居跡、PD01土坑、RG01溝跡のように命名することとした。遺構記号は以下のとおりである。

堅穴住居跡……RA 建物跡……RB 柱列跡……RC 土坑……RD 堅穴……RE
炉跡……RF 溝跡……RG 配石……RH 井戸跡……RI その他……RZ
(2) 粗掘り

調査開始当初、水田の畦に沿う形で2m幅の試掘トレンチを入れ、その試掘トレンチを広げる形で遺構検出を進めた。今回の調査の後、水田を復旧する必要があるため、粗掘りした排土は層ごとに分けた。

(3) 精査と実測

検出した遺構には遺構名を付し、順次、精査を行った。遺構の精査は堅穴住居跡は4分法、土坑は2分法を原則としたが、若干の例外もある。遺構の実測は簡易遺り方測量を原則としたが、溝跡は平板測量で行った。平面図は調査区區画線を基準とした1m間隔の水系を張って、それを測量基線とした。土層断面図は水平水系を張って、それを測量基線とした。遺構のレベルは50cm間隔を原則とし、必要に応じて計測所を設けている。出土遺物は遺構名、層位を記入して取り上げた。



第6図 遺跡範囲・グリッド配置図

(4) 写真撮影

野外調査での写真撮影は6×7cm判1台（モノクロ）と35mm判2台（モノクロ、カラー・リバーサル）のカメラ3台を1組として使用し、検出状況・埋土断面・完掘全景・遺物出土状況などを撮影した。

2. 室内整理方法

室内整理は、遺物の注記からはじめ、次いで接合・復元・石膏入れの作業を行った。これらの作業が終わった段階で、遺物の仕分・登録を行い、報告書掲載分について写真撮影を行った。また、保存処理の必要な鉄製品については外注した。

その後、遺物実測、土器拓本、遺物・遺構トレースの順の作業を進め、最後に図版や写真図版を作成した。以下の作業と並行して、計測・原稿作成を行い、報告書に掲載した。

(1) 遺物の処理と遺物図版の作成

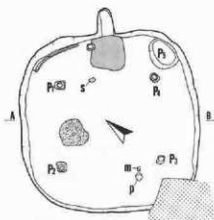
遺物は水洗、注記、接合・復元の順に行い、必要なものについては石膏入れの作業を行った。これらの作業が終わった段階で、遺物の仕分・登録を行い、報告書掲載分について写真撮影を行った。その後、実測、拓本作成、トレースの順に作業を進め、最後に図版を作成した。遺物の縮尺は3分の1を原則としているが、器種の大小によって縮尺を変えたものについては注記してある。なお土師器の器面調整については、次頁のような表現方法を用いた。

(2) 遺構図面の処理と遺構図版の作成

図面は原図の点検後、修正・合成を行い、そののちトレース、遺構図版の作成の順に整理した。遺構の縮尺は竪穴住居跡・掘立柱建物跡・柱穴列は50分の1、土坑は40分の1、溝跡は200分の1、竪穴住居跡のカマド断面図は25分の1であるが、その他は適宜縮尺を変えて掲載した。図中の攪乱箇所・焼土・炭化材の分布範囲には次頁のようなスクリーン・トーンを使用した。また、柱穴の番号についてはP₁・P₂・P₃…、土器についてはPを付した。

(3) 写真図版

遺構写真・遺物写真とも縮尺は不定である。遺物写真の番号は遺物図版の番号と一致している。



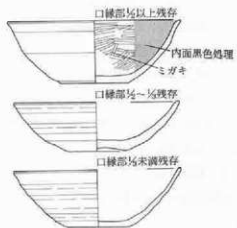
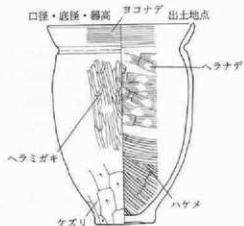
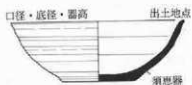
A-B 断面 (土坑は3m)

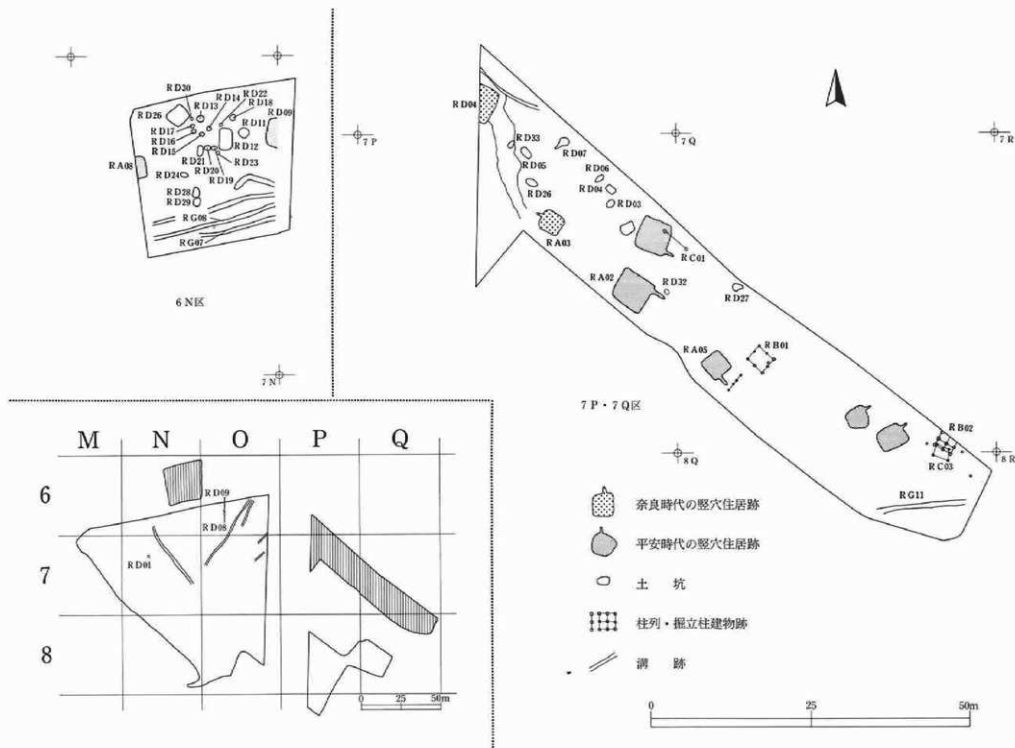
a-b 断面



P1... 土坑・柱穴

	焼土
	炭化物
	別遺構・擾乱
	土器
	石・礎
	金属器





第7図 遺構配置図

IV. 調査の結果

1. 竪穴住居跡

RA 01 竪穴住居跡

遺構(第7, 8図、写真図版3)

〈位置と残存状況〉7P8xほか。RA02竪穴住居跡の北に隣接する。

〈形状と規模〉平面形はほぼ隅丸長方形である。規模は南北4.7m、東西4.9mである。

〈埋土〉12層に細分され黒褐色土主体である。壁隙には崩落した層が、床面には灰白色火山灰がブロック状に堆積する。深さは中央部で約30cmである。

〈壁〉床面から緩やかに外傾して立ち上がる。壁高は東壁で27cm、北壁で30cm、西壁で31cm、南壁で33cmである。

〈床〉II層を掘り込んでいる。比較的深い掘り方を伴い、貼り床である。

〈柱穴・土坑〉遺構に伴う主柱穴はP₁~P₄の4個である。平面形は不整な円形であり、深さは24~38cmである。P₁はカマドの北袖と重複し、これを掘り込んでいる。柱痕跡は確認されなかった。

〈カマド〉東壁の南隅寄りに構築されている。北側袖部にあたる黄褐色シルトのたかまりと南側袖部の芯材となる円礫を検出したが、燃焼部の焼土の形成は不良である。煙道部は掘り込み式で、本体から煙出し部に向かって緩やかに下っており、煙出し部には円礫が充填されている。規模は長さ約260cm、深さは最大で50cmである。

〈遺物の出土〉床面を中心に埋土からも出土している。土器、鉄製品で構成される。

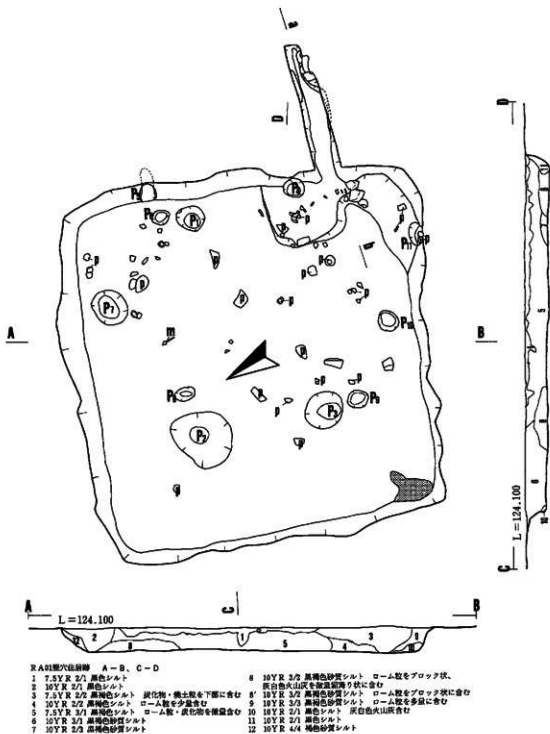
〈時期〉埋土の状況および出土した遺物から平安時代に属する。

遺物(第8~11図、写真図版27, 28)

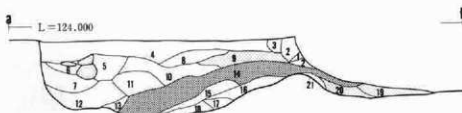
床面を中心に埋土からも出土している。土器、鉄製品で構成される。

〈土器〉1~25は土師器坏形土器である。すべてロクロ成形、底部切り離しは回転糸切りである。2、4、13、15、25は内面へラミガキのち黒色処理を施している。26は比較的大型の土師器坏形土器の底部破片。底部は高さ1.1cmのやや高台状を呈し、内面はへラミガキ調整後、黒色処理を施している。これらの土師器坏形土器のうち、2、7、8には墨書がみられる。2の字種は不明である。7、8の墨書の字種は判読できないが、同一の字種である。27~30は土師器壺形土器である。27、30はロクロ不使用、28、29はロクロ使用である。31は須恵器壺形土器の体部破片、32は須恵器壺形土器の体部破片、33は須恵器壺形土器の口縁部破片である。

〈鉄製品〉34、35はともに床面からの出土である。34は刀子、35は紡錘車である。



第8図 RA01竪穴住居跡

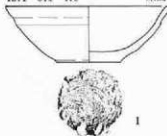


a-b

- | | | |
|---------------------|-------------------------------------|--------------------------------------|
| 1 10Y R 2/2 黒褐色シルト | 8 5Y R 2/2 黒褐色シルト | 16 5Y R 2/2 黒褐色シルト 小砂少量含む |
| 2 10Y R 2/2 黒褐色シルト | 9 5Y R 2/3 暗赤褐色土 構成はごくよい | 17 7.5Y R 3/3 暗褐色シルト 小砂少量含む |
| 3 10Y R 2/4 暗褐色シルト | 10 7.5Y R 2/3 暗褐色シルト | 18 7.5Y R 3/4 暗褐色シルト |
| 4 7.5Y R 2/1 黒色シルト | 11 10Y R 2/2 黒褐色シルト 灰白色火山灰をブロック状に含む | 19 7.5Y R 2/2 黒褐色シルト |
| 5 10Y R 2/2 黒褐色シルト | 12 10Y R 2/2 黒褐色シルト | 20 7.5Y R 2/3 暗褐色土 構成はごくよい 炭化物・小砂を含む |
| 6 7.5Y R 2/2 黒褐色シルト | 13 10Y R 4/4 褐色砂質シルト | 21 7.5Y R 3/4 暗褐色シルト |
| 7 7.5Y R 3/3 暗褐色シルト | 14 5Y R 2/3 暗赤褐色土 構成はよい | |
| | 15 10Y R 2/3 黒褐色シルト | |

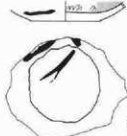
13.1・5.1・4.9

床面



1

—・5.5・— 床面



2

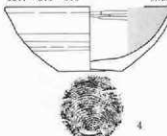
—・5.7・— 床面



3

13.7・5.1・5.3

床面



4

14.8・—・—

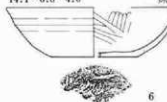
床面



5

14.1・6.8・4.0

床面



6

12.7・4.8・5.3

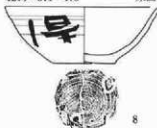
床面



7

12.4・5.1・4.5

床面



8

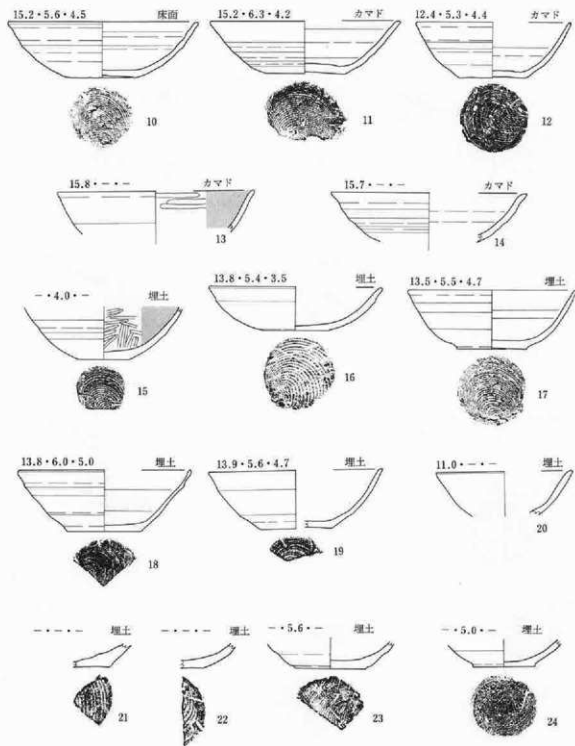
14.7・—・—

床面

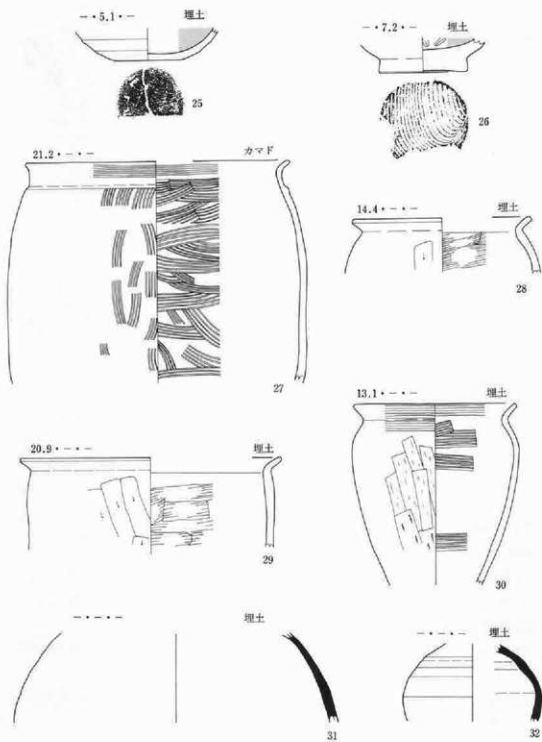


9

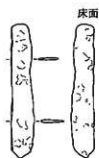
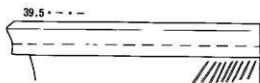
第9図 R A 01 竪穴住居跡・出土遺物 - 1



第10図 R A 01 竪穴住居跡・出土遺物-2



第II図 RAOI竪穴住居跡・出土遺物-3



第12図 R A 01 竪穴住居跡・出土遺物 - 4

R A 02 竪穴住居跡

遺構（第12, 13図、写真図版4）

〈位置と残存状況〉 7 P11x ほか。R A 01 竪穴住居跡に隣接する。

〈形状と規模〉 平面形は南東壁を長辺とする隅丸台形である。規模は南東-北西が5.5m、北東-南西の短辺が4.8m、長辺が5.5mである。

〈埋土〉 9層に細分され、黒褐色土主体である。床面には灰白色火山灰がブロック状に堆積する。

〈壁〉 床面から外傾して立ち上がる。北東壁で41cm、南西壁で30cm、南東壁で33cm、北西壁で32cmである。

〈床〉Ⅱ層を掘り込んでいる。比較的深い掘り方を伴い、貼り床である。

〈柱穴・土坑〉遺構に伴う主柱穴はP₁～P₄の4個である。平面形はほぼ円形で、深さは32～39cmである。P₁はカマドの南東側の袖部と重複し、これを掘り込んでいる。柱痕跡は確認されなかった。P₅は貯蔵穴と思われる。

〈カマド〉南東壁の東隅寄りに構築されている。煙道は掘り込み式で、規模は本体が128×112cm、煙道部の長さ165cm、深さは最大で64cmである。燃焼部から煙道部中央にかけて焼土が形成されており、特に燃焼部は固く焼土が形成されており層厚5cmを測る。煙道部は燃焼部から煙出しまで緩やかに掘り込まれている。両壁面と煙出し部に垂円礫が埋められており、特に煙出し部は底面まで石垣状に垂円礫が積み重ねられている。

〈遺物の出土〉床面を中心に埋土からも出土している。土器、鉄製品で構成される。

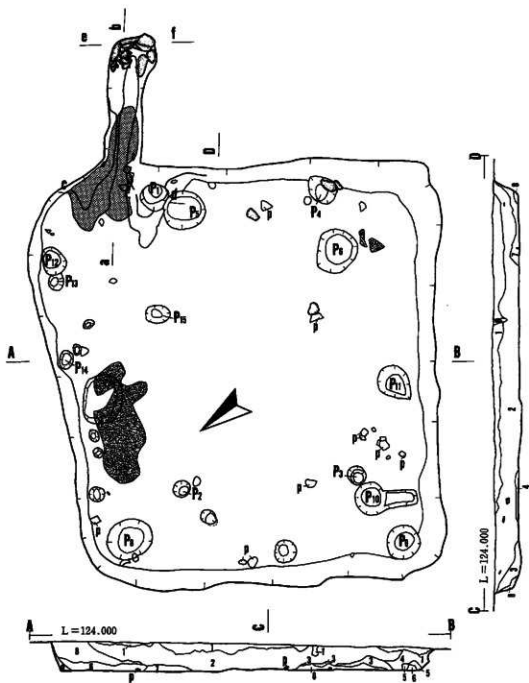
〈時期〉埋土中の火山灰や出土した遺物から平安時代に属する。

遺物（第13～17図、写真図版29～31）

〈土器〉36～66、68は床面からの出土である。36～40、43～59は土師器環形土器である。すべてロクロ成形、底部の切り離しは回転糸切りである。41、42、60～63は土師器高台付環形土器である。64は須恵器変形土器の底部破片、65、66、68は土師器変形土器の破片である。

67はカマド煙出し部から出土した土師器小型変形土器である。口縁部をナデ調整し、体部をヘラナデ調整している。底部には木葉痕が見られる。69～71、73、74はカマドからの出土である。69は須恵器小型変形土器の底部破片である。底面には回転糸切り痕、体部には自然釉がみられる。70は土師器環形土器、内面ミガキのち黒色処理を施している。71、73は土師器変形土器の口縁部破片、74は土師器変形土器の底部破片である。72、75～87は埋土からの出土である。75～78は土師器環形土器である。すべてロクロ成形、底部切り離しは回転糸切りである。77は内面ミガキのち黒色処理を施している。その他は無調整である。79は須恵器環形土器であるが、底径と口径に比べ器高の小さい皿形を呈する。底面には回転糸切り痕が残る。内側底面が磨かれた痕跡があり、転用されて碁として使用された可能性も考えられる。80、81は土師器変形土器の口縁部破片、82、83は土師器変形土器の底部破片である。84、は須恵器大型変形土器の口縁部破片、85は須恵器変形土器の体部破片である。

〈鉄製品〉86、87はともに床面から出土した釘である。



R A 02 竪穴住居跡 A-B、C-D

- | | |
|------------------------|---------------------------------|
| 1 10 Y R 2/2 黒褐色シルト 黄土 | 5 7.5 Y R 2/2 黒褐色シルト |
| 2 10 Y R 2/2 黒褐色シルト | 6 10 Y R 2/2 黒褐色シルト 灰白色火山灰を微量含む |
| 3 10 Y R 2/2 黒褐色シルト | 7 5 Y R 2/2 黒褐色シルト |
| 4 10 Y R 2/2 黒褐色シルト | 8 10 Y R 5/2 黒褐色シルト |
| | 9 10 Y R 4/4 褐色砂質シルト 壁の崩落 |

第13図 R A 02 竪穴住居跡

a L=124.000



a-b, e-f

- 1 7.5Y R 3/2 黄褐色シルト
焼土和炭屑を含む
- 2 7.5Y R 3/2 黄褐色シルト
- 3 5Y R 2/2 黄褐色シルト
- 4 10Y R 2/3 黄褐色シルトと
5Y R 4/2 に近い赤褐色灰の混合
- 5 5Y R 4/2 に近い赤褐色灰の混合
- 6 7.5Y R 3/4 暗褐色シルトと
5Y R 4/2 に近い赤褐色灰の混合
- 7 7.5Y R 3/4 暗褐色シルト
- 8 7.5Y R 3/4 暗褐色シルトと
10Y R 4/4 暗褐色シルトの混合
- 9 7.5Y R 3/4 暗褐色シルト
焼土粒を多量に含む
- 10 5Y R 3/4 暗褐色焼土
焼成よく、堅い
- 11 7.5Y R 2/3 暗褐色焼土
焼成よく、堅い
- 12 7.5Y R 3/2 黄褐色シルト
- 13 7.5Y R 2/3 暗褐色シルト
焼土粒を多量に含む
- 14 7.5Y R 3/2 暗褐色焼土
焼成よく、堅い
- 15 7.5Y R 3/2 黄褐色シルト
- 16 7.5Y R 3/2 黄褐色シルト
焼成よく、堅い
- 17 7.5Y R 3/2 暗褐色シルト
- 18 10Y R 3/4 暗褐色シルト



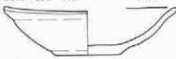
c-d

- 1 7.5Y R 4/4 黄褐色シルト きわめて堅い 焼土粒・炭化屑を含む
- 2 7.5Y R 3/4 暗褐色シルト 焼土粒を含む
- 3 7.5Y R 3/2 黄褐色シルト 土層を含む

RA02カマド

14.0・5.3・4.0

床面



36

14.2・6.8・4.9

床面



37

13.8・6・5

床面



38

14.0・6・4.9

床面



39

15.2・3.5・4.7

床面



40

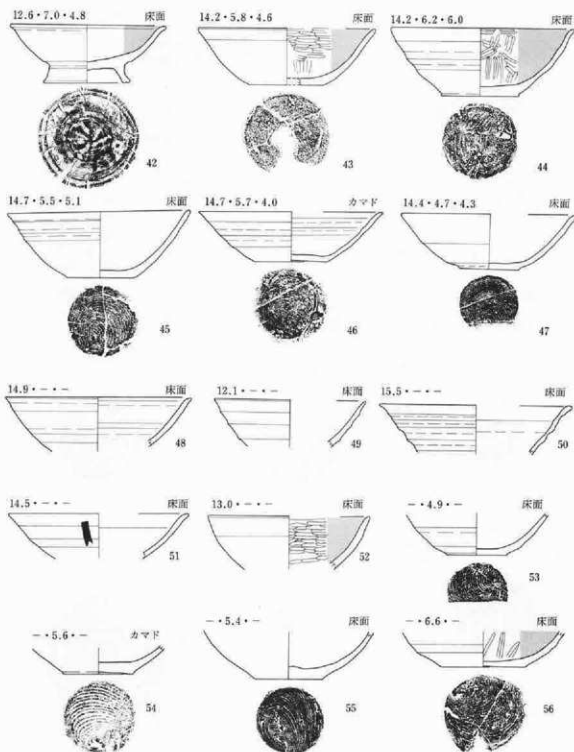
15.2・6.1・6.1

床面

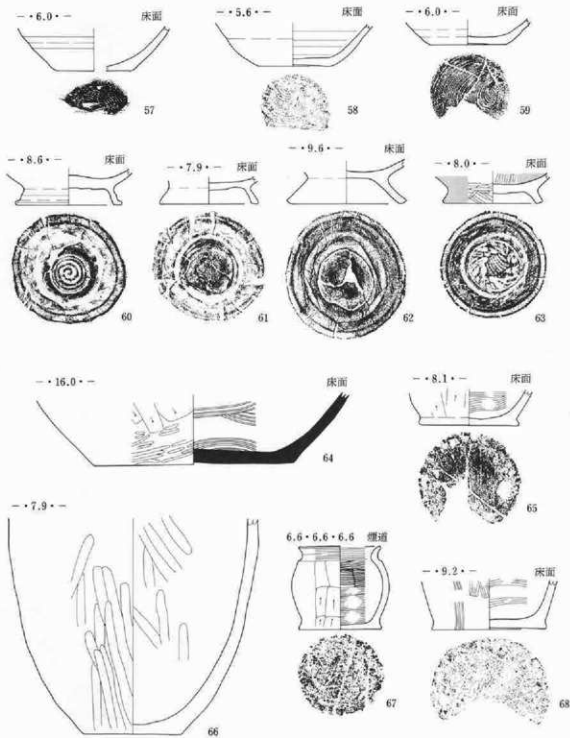


41

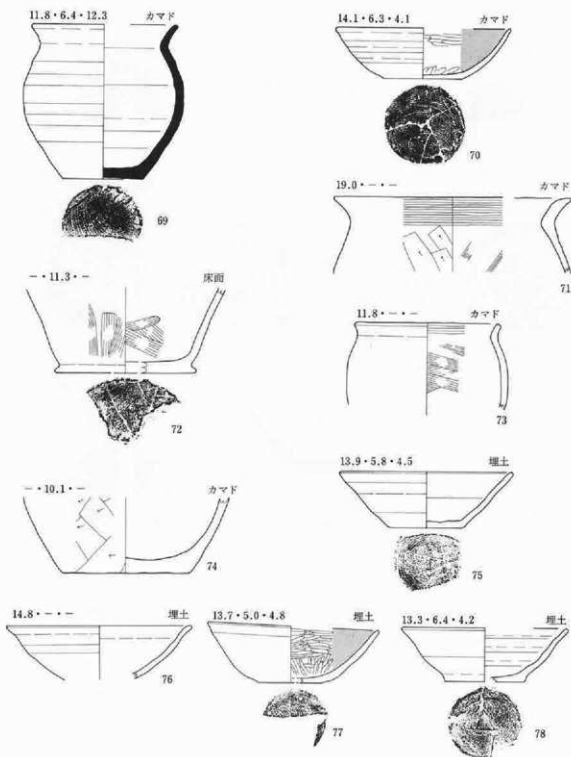
第14図 RA02竪穴住居跡・出土遺物-1



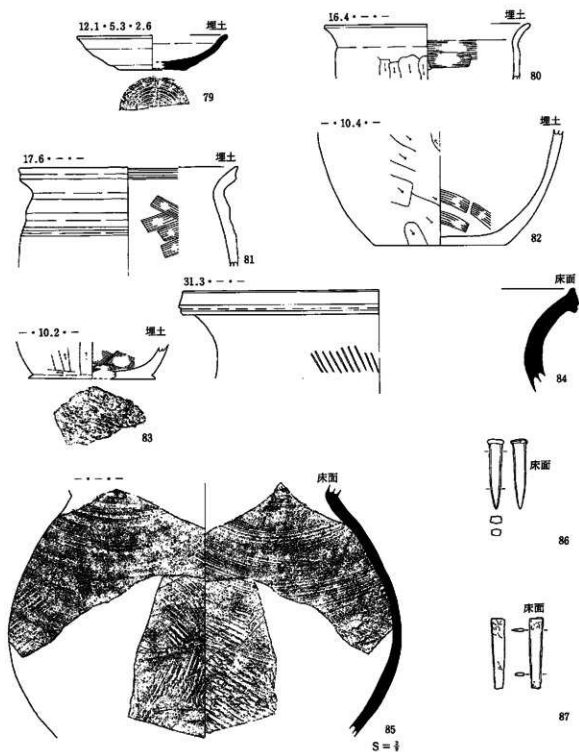
第15図 R A 02竪穴住居跡・出土遺物 - 2



第16图 RA 02竖穴住居跡・出土遺物- 3



第17図 RA02竪穴住居跡・出土遺物-4



第18圖 R A 02 豎穴住居跡・出土遺物 - 5

RA 03 竪穴住居跡

遺構（第18図、写真図版5）

〈位置と残存状況〉7P7p ほか。

〈形状と規模〉平面形は隅丸方形である。規模は北西－南東方向が3.7m、北東－南西方向が3.2mである。

〈埋土〉4層に大別され、黒褐色土主体であるが、細分すると18層になる。

〈壁〉床面からほぼ直立して立ち上がる。北西壁で26cm、南西壁で38cm、南東壁で36cm、北東壁で37cmである。

〈床〉貼り床である。掘り方は凹凸が著しい。

〈柱穴・土坑〉柱穴状土坑多数を検出したが、遺構に伴う主柱穴は不明である。

柱穴状土坑の平面形は円形を基調とするが一様ではなく、深さ26cm～34cmである。

〈カマド〉北西壁のほぼ中央に構築されている。煙道は掘り込み式で、規模は本体が74cm×92cm、煙道部の長さ170cm、深さは最大で19cmである。燃焼部から煙道の上がり口まで焼土が形成されているが、焼成はよくない。

〈遺物の出土〉埋土を中心に床面からも出土している。土器で構成される。

〈時期〉出土遺物から奈良時代である。

遺物（第18、19図、写真図版32）

〈土器〉88は土師器甕形土器の口縁部破片・体部から口縁部にかけて段を持つ。89、90は床面から出土した土師器甕形土器の底部破片。91は土師器甕形土器である。口縁部をナデ調整しており、体部から底部にかけて丹念なミガキを施している。92はカマド袖部から出土した土師器甕形土器の体部上位の破片で、88と同様に体部から口縁部へ移る部分に段を持つ。

RA 04 竪穴住居跡

遺構（第20図、写真図版6）

〈位置と残存状況〉6P23k ほか。遺構の北西側半分は調査範囲外にある。

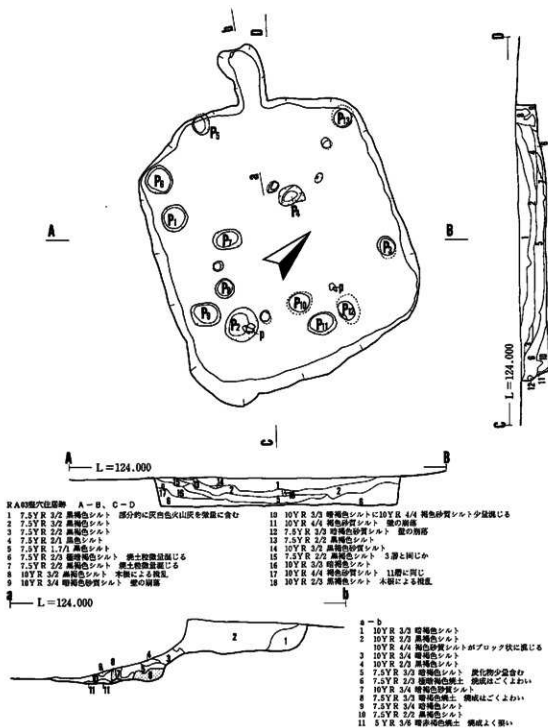
〈形状と規模〉遺構の半分が調査範囲外にあるため、全容は不明であるが、それぞれの辺が張り出す方を呈しているものと推定される。

〈埋土〉8層に細分されるが、3層に大別される。黒褐色土主体である。

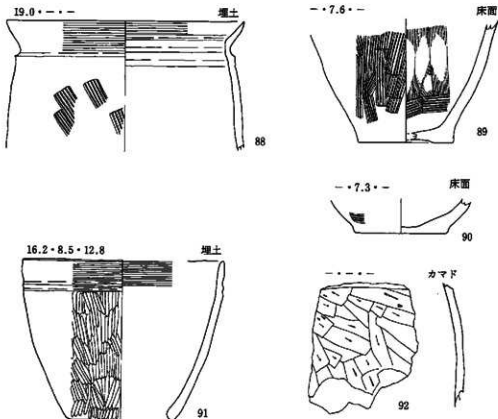
〈壁〉床面からほぼ直立して立ち上がる。壁高は南東壁で22cm、南西壁と北東壁の残存部分で18cmである。

〈床〉貼り床である。比較的浅い掘り方を伴う。

〈柱穴・土坑〉遺構に伴う主柱穴はP₁とP₂である。P₃は貯蔵穴と推定される。



第19図 R A 03 竪穴住居跡



第20図 R A 03竪穴住居跡・出土遺物

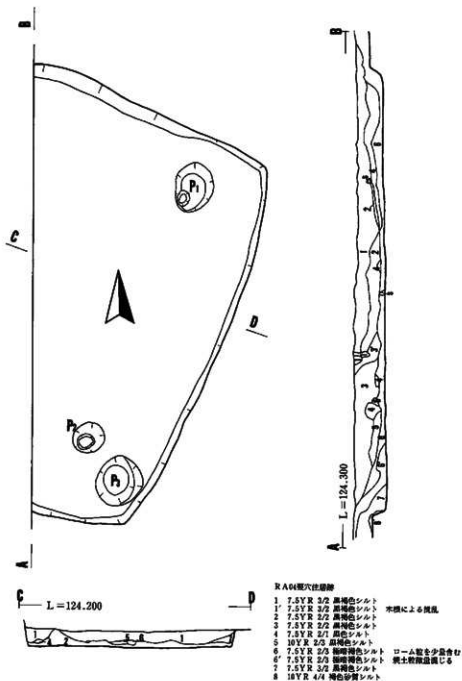
〈カマド〉調査した範囲内には検出されなかった。遺構の北西側半分のうち、北西壁に構築しているものと推定される。

〈遺物の出土〉埋土から出土している。土器のみの出土である。

〈時期〉出土遺物から奈良時代である。

遺物（第20図、写真図版32）

〈土器〉93は土師器坏形土器である。体部下半に段を持ち、丸底である。内面ミガキのち黒色処理を施している。94は土師器壺形土器の底部破片。底部には木炭痕を伴う。



第21図 R A 04 掘穴住居跡



第22図 R A 04 竪穴住居跡・出土遺物

R A 05 竪穴住居跡

遺構 (第22図、写真図版 7)

〈位置と残存状況〉 7 Q 18 d ほか。R C 01 柱穴列と隣接する。

〈形状と規模〉 平面形はほぼ長方形である。規模は4.0cm×3.5cmである。

〈埋土〉 11層に細分される。霜降り状に灰白色火山灰を含む黒褐色土を主体とする。

〈壁〉 床面からほぼ直立して立ち上がる。壁高は南東壁で42cm、北東壁で45cm、北西壁で43cm、南西壁で42cmである。

〈床〉 ほぼ平坦である。貼り床である。掘り方は比較的浅い。

〈柱穴・土坑〉 遺構に伴う主柱穴はP₁～P₄の4個である。平面形はほぼ円形で、深さは34～43cmである。

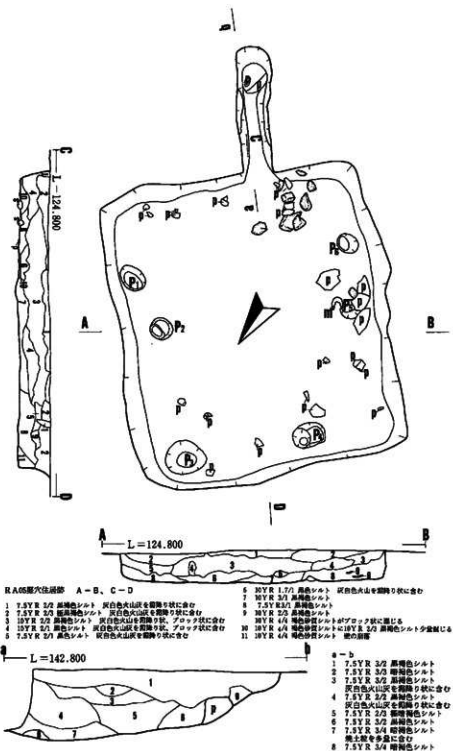
〈カマド〉 南東壁の南隅寄りに構築されている。煙道は掘り込み式で、規模は本体が78cm×72cm、煙道部の長さ175cm、深さは最大で47cmである。袖部は礫および土師器壺形土器の破片で構築されている。燃焼部の焼土の焼成はよくない。煙道部から須恵器大型甕形土器の破片が出土している。

〈遺物の出土〉 床面を中心に埋土からも出土している。土器、鉄製品で構成される。

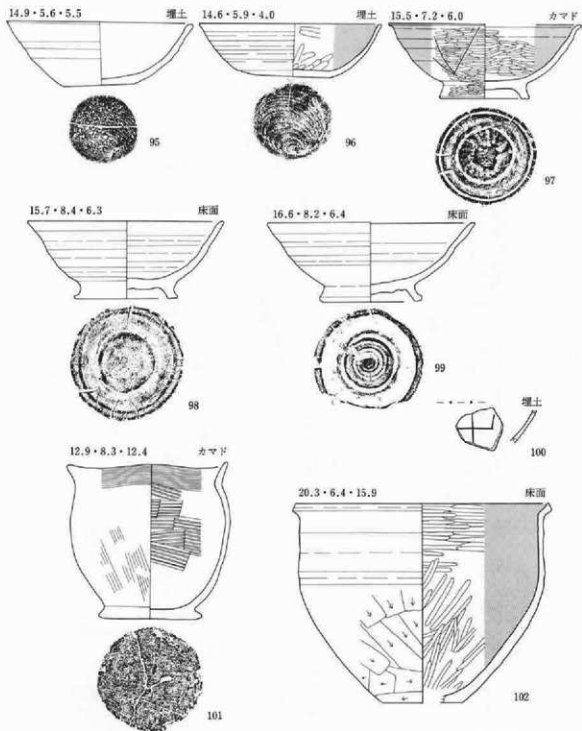
〈時期〉 埋土中の火山灰や出土した遺物から平安時代に属する。

遺物 (第23～25図、写真図版32、33)

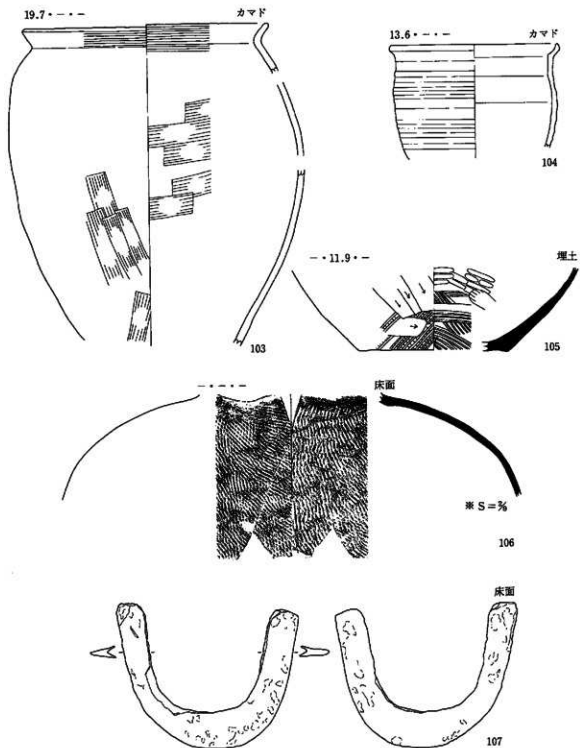
〈土器〉 95、96、108～110は土師器坏形土器である。すべてロクロ成形、底部切り離しは回転糸切りである。95、108～110は内外面とも無調整である。96は内面ミガキのち黒色処理を施している。97～99は高台付き坏形土器である。97は内外面とも丹念なミガキのち、黒色処理を施している。体部外面に3本の線が刻まれており、体部最下位の1点で交叉する。高台部の内面は丁寧になでつけられている。高台底面には沈線をもつ。98、99は内外面とも無調整である。大きめのもので、体部はやや薄手である。100は土師器坏形土器あるいは高台付き坏形土器の体



第23図 RA05竈穴住居跡



第24図 R A 05竪穴住居跡・出土遺物 - I



第25図 RA05竪穴住居跡・出土遺物-2



第26図 R A 05 竪穴住居跡・出土遺物－3

部破片で内外面ともミガキのち黒色処理を施したのち外面に交叉する2本の線が刻まれる。水平方向の線は右端で上方へ直角に曲がる。101、103、104はカマドから出土した土師器甕形土器。101はロクロ未使用で内面および底面に痕が見られる。103はやや薄手で胴の張る器形。ロクロ未使用。104はロクロ使用。102は床面から出土したロクロ使用の土師器鉢形土器で体部外面の下半はヘラケズリ調整、内面はミガキのち黒色処理を施している。105、106は須恵器甕形土器、105は底部破片、106は体部上半の破片。床面および煙道から出土した破片が接合した。

〈鉄製品〉107は床面から出土した鋤先である。

R A 06 竪穴住居跡

遺構（第26図、写真図版8）

〈位置と残存状況〉7 Q 22 o ほか。R A 07 竪穴住居跡に隣接する。壁上部の崩落が著しい。

〈形状と規模〉北東壁を長辺とする隅丸台形である。規模は長辺の北東壁が2.8m、短辺の南西壁が2.3m、北東－南西方向が約2.8mである。

〈埋土〉9層に細分される。自然堆積である。埋土に灰白色火山灰を含まない。

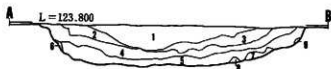
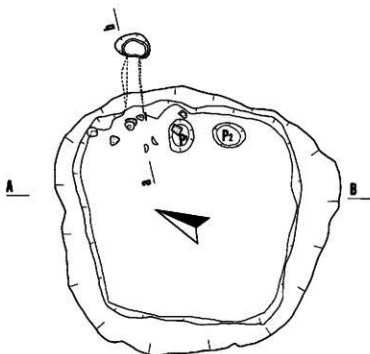
〈壁〉床面から緩やかに立ち上がる。壁の上部は崩落によって失われている。

〈床〉地山IV層を掘り込んで床面としている。

〈柱穴・土坑〉カマドを構築している北東壁沿いに2個検出したが、貯蔵穴と思われる。

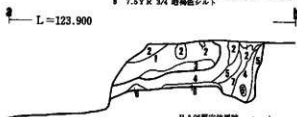
〈カマド〉北東壁の北隅寄りに構築されている。煙道はくりぬき式で、規模は長さ106cm、幅は27cm前後である。北東壁を掘り込んで袖としている。燃焼部の焼土の焼成は不良である。燃焼部の規模は60cm以下と推定される。

〈時期〉出土した遺物から平安時代に属する。



R A 06 掘穴断面 A-B

- 1 7.5Y R 2/1 黒色砂質シルト 小礫を含む
- 2 7.5Y R 2/2 黒褐色砂質シルト 小礫を含む
- 3 7.5Y R 2/3 暗褐色シルト
- 4 7.5Y R 3/2 黒褐色シルト
- 5 10Y R 3/1 黒褐色シルト
- 6 7.5Y R 2/3 暗褐色シルト
- 7 10Y R 3/4 暗褐色シルト 黄褐色粘質シルト较多量に混じる
- 8 7.5Y R 3/4 暗褐色シルト



R A 06 掘穴断面 a-b

- 1 10Y R 4/4 褐色砂質シルト 地山
- 2 7.5Y R 3/3 暗褐色シルト
- 3 10Y R 3/3 暗褐色シルト
- 4 7.5Y R 3/2 黒褐色シルト
- 5 7.5Y R 3/3 暗褐色砂質シルト
- 6 10Y R 4/6 褐色砂質シルト
- 7 10Y R 3/4 暗褐色シルト

第27図 R A 06 掘穴住居跡

12.9・5.0・4.3 床面



111

13.0・5.4・4.2 床面



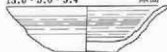
112

13.0・6.0・3.6 床面



113

13.0・5.0・3.4 床面



114

13.5・5.7・4.1 床面



115

13.9・6.2・4.1 床面



116

15.2・5.2・5.0 床面



117

—・6.2・— 床面



118

13.1・4.9・3.7 カマド



119

13.3・4.7・5.0 埋土



120

13.5・5.6・3.8 カマド



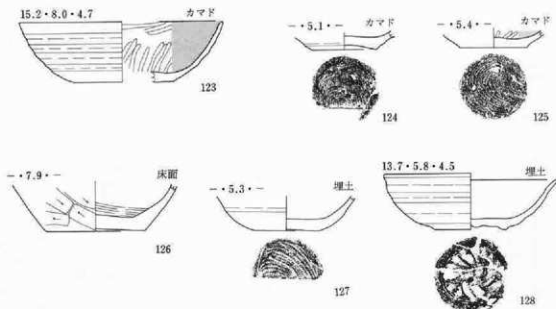
121

13.0・5.0・3.8 床面



122

第28図 R A 06 竪穴住居跡・出土遺物 - I



第29図 RA06竪穴住居跡・出土遺物－2

遺物（第27、28図、写真図版34）

カマド付近の床面を中心に、埋土からも出土している。

〈土器〉111～125、127は土師器環形土器である。すべてロクロ成形、底部切り離し回転糸切りである。112、115、117、118、123、127は内面ミガキのち黒色処理を施している。そのほかは内外面とも無調整である。123はやや大ぶり。126は土師器環形土器の底部破片、底面近くをヘラケズリ調整。128は高台部が剝離した土師器高台付環形土器。底面にはナデツケ痕が残る。

RA 07 竪穴住居跡

遺構（第29図、写真図版9）

〈位置と残存状況〉7 Q24 q ほか。RA06竪穴住居跡に隣接する。壁上部の崩落が著しい。

〈形状と規模〉東南壁を長辺とする隅丸台形である。規模は長辺の南東壁が4.1m、短辺の北西壁が3.4m、北東－南西方向が約3.5mである。

〈埋土〉7層に細分される。自然堆積である。埋土に灰白色火山灰は含まない。

〈壁〉床面からほぼ直立して立ち上がる。壁の上部は崩落によって失われている。

〈床〉地山IV層を掘り込んで床面としている。

13.7・5.3・4.7

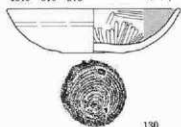
床面



129

13.9・5.0・3.5

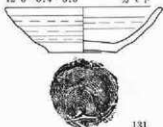
カマド



130

12.6・5.4・3.5

カマド



131

13.4・---

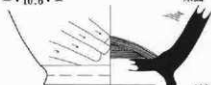
埋土



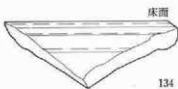
132

---10.6---

床面

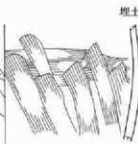
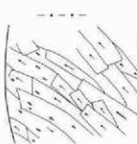


133



床面

134



埋土

135



カマド

136

※ S = 1/2

第31図 R A 07 竪穴住居跡・出土遺物 - 3

〈柱穴・土坑〉検出されなかった。

〈カマド〉北東壁の北隅寄りに構築されている。煙道はくりぬき式で、規模は長さ160cm、幅32cm前後である。煙出し部を亜円礫で構築した痕跡が見られる。北東壁を掘り込んで袖を構築している。燃焼部の焼土の焼成は不良である。燃焼部の規模は40cm前後と推定される。

〈遺物の出土〉床面を中心に埴土からも出土している。土器、土製品で構成される。

〈時期〉出土した遺物から平安時代に属する。

遺物 (第30図、写真図版35)

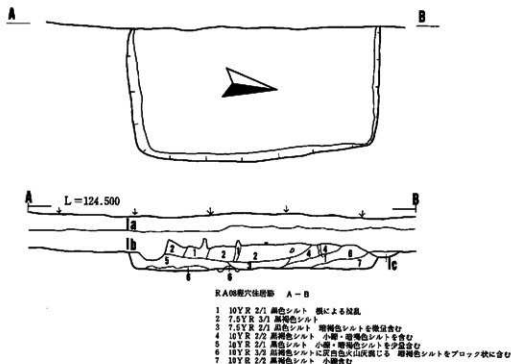
〈土器〉129～132は土師器環形土器である。すべてロクロ成形、底部切り離しは回転糸切りである。130は内面ミガキのち黒色処理を施している。口径・底径に比して器高の小さい器形である。そのほかは無調整である。133は高台をもつ須恵器壺形土器の底部破片。134は須恵器壺形土器の口縁部破片。135は土師器甕形土器の胴部破片である。

〈土製品〉136はカマドから出土した土鏝である。

R A 08 竪穴住居跡

遺構 (第31図、写真図版10)

〈位置と残存状況〉6 N 9 o ほか。遺構の西半分が調査範囲外にある。



第32図 R A 08 竪穴住居跡

〈形状と規模〉遺構の西半分が調査範囲外にあるため全体の形状は不明であるが、調査した東半分は南北方向約3.2mの方形を呈する。

〈埋土〉7層に細分される。

〈壁〉床面からほぼ直立して立ち上がる。

〈床〉基本土層のII層を掘り込んで床としている。掘り方はない。

〈柱穴・土坑〉検出されなかった。

〈カマド〉調査した東半分には検出されなかった。

〈遺物の出土〉本遺構から遺物は出土していない。

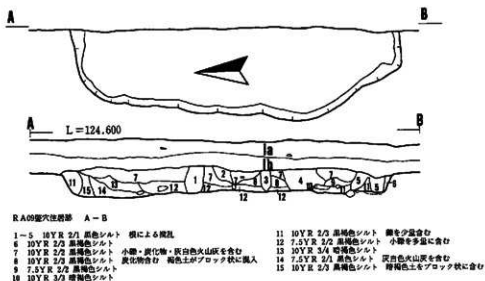
〈時期〉検出面および周辺から出土した遺物から平安時代に属するものと推定される。

RA 09 竪穴住居跡

遺構（第32図、写真図版10）

〈位置と残存状況〉6N6yほか。遺構の東半分が調査範囲外にある。

〈形状と規模〉遺構の東半分が調査範囲外にあるため全体の形状は不明であるが、調査した西半分は南北4.2mの不整な方形を呈する。



第33図 RA 09竪穴住居跡平面・埋土断面

〈埋土〉15層に細分される。耕作による攪乱が著しい。

〈壁〉床面からほぼ直立して立ち上がる。

〈床〉基本土層のII層を掘り込んで床としている。掘り方はない。

〈柱穴・土坑〉検出されなかった。

〈カマド〉調査した西半分には検出されなかった。

〈遺物の出土〉本遺構から遺物は出土していない。

〈時期〉検出面および周辺から出土した遺物から平安時代に属するものと推定される。

2. 掘立柱建物跡

R B 01 掘立柱建物跡

遺構（第33図、写真図版11）

〈位置と残存状況〉7 Q 18 g ほか。R A 05 竪穴住居跡の東に隣接する。

〈形状と規模〉掘り方は9ヶ所検出され、桁行2間（3.1m）×梁行2間（2.6m）の北西-南東棟（N-45°-W）である。柱穴間距離は1.6m～1.2mである。

〈柱穴の掘り方〉平面形はほぼ円形で、規模は35cm×24cm前後、深さは25cm～15cmである。埋土は灰白色火山灰が霜降り状に混じる黒褐色土が主体で、ほぼ単層である。柱痕跡はP₇以外には検出されなかった。P₉は柱穴にはならない可能性もある。

〈出土遺物〉本遺構から遺物は出土していない。

〈時期〉埋土中の火山灰から平安時代に属する。

R B 02 掘立柱建物跡

遺構（第34図、写真図版12）

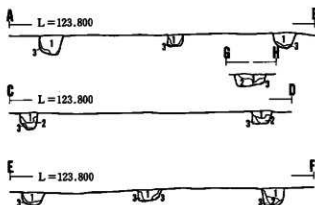
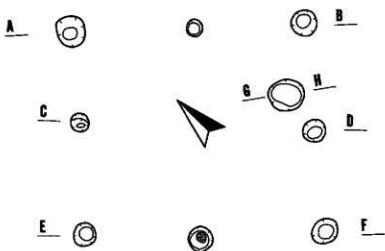
〈位置と残存状況〉7 Q 24 u ほか。R A 07 竪穴住居跡の東に隣接する。柱穴の北東列は調査範囲外にあるものと推定される。R C 03 柱穴列と重複し、これより新しい。

〈形状と規模〉掘り方は7ヶ所検出され、桁行2間（3.8）m×梁行2間（3.4m）の北西-南東棟（N-17°-E）になると推定される。柱穴間距離は1.9m～1.5mである。

〈柱穴の掘り方〉平面形は不整平面形のものが主体で、規模65cm～45cm×55cm～45cm、深さは45cm～28cmである。埋土に灰白色火山灰を含まない。柱痕跡は検出されなかった。

〈出土遺物〉本遺構から遺物は出土していない。

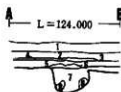
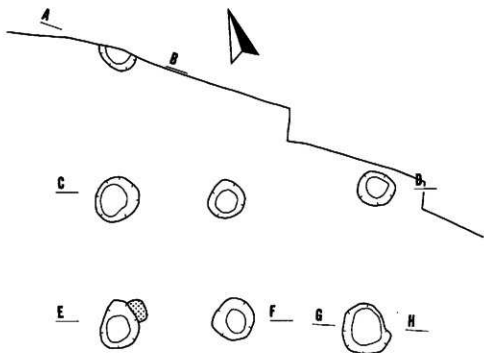
〈時期〉平安時代に属するものと推定される。



RB01掘立柱建物跡 A-B、C-D、E-F、G-H

- 1 7.5Y R 2/2 黒褐色シルト 灰白色火山灰が縦横リ状に混じる
- 2 7.5Y R 2/3 黒褐色シルト
- 3 10Y R 3/4 増褐色砂質シルト

第34図 RB01掘立柱建物跡平面・埋土断面



R B 02 掘立柱建物跡 A-B

- 1 7.5Y R 2/2 黒色シルト 表土
- 2 7.5Y R 2/2 黒褐色シルト
- 3 7.5Y R 3/2 黒褐色シルト 酸化鉄含む
- 4 7.5Y R 3/1 黒褐色シルト
- 5 10Y R 2/2 黒褐色シルト
- 6 10Y R 2/3 黒褐色シルト
- 7 10Y R 2/2 黒褐色シルト 粘性ややあり
- 8 10Y R 3/4 暗褐色砂質シルト



R B 02 掘立柱建物跡 C-D, E-F, G-H

- 1 7.5Y R 2/2 黒褐色シルト
- 2 10Y R 3/3 暗褐色シルト
- 3 10Y R 4/6 褐色砂質シルトがブロック状に入る

第35図 R B 02 掘立柱建物跡平面・埋土断面

3. 柱穴列

R C 01 柱穴列

遺構（第35図、写真図版13）

〈位置と残存状況〉 7 Q 8 x ほか。R A 01竪穴住居跡と重複し、これより新しい。

〈形状と規模〉 2個の柱穴を検出した、列の方向は北西-南東（N-44°-W）で、どちらも石を集めており礎石状になっている。柱穴間の距離は4.6mである。

〈柱穴の掘り方〉 ほぼ黒褐色土の単層である。柱痕跡は検出されなかった。

〈出土遺物〉 本遺構から遺物は出土していない。

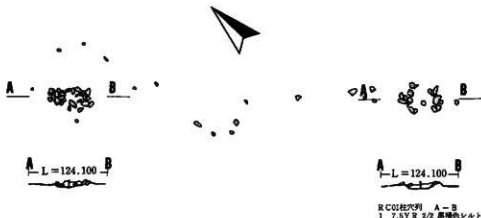
〈時期〉 平安時代より新しいが、時代を断定する資料は出土しておらず不明である。

R C 02 柱穴列

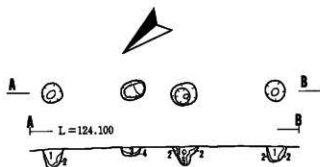
遺構（第36図、写真図版13）

〈位置と残存状況〉 7 Q 20 e ほか。R A 05竪穴住居跡の南東に隣接する。

〈形状と規模〉 4個の柱穴を検出した。列の方向は北東-南西（N-40°-E）で、長さ2.9mである。柱穴間の距離は1.2m~0.7mで、R A 05竪穴住居跡に付属する可能性もある。

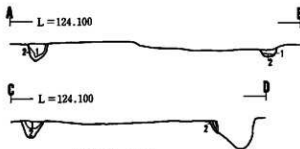
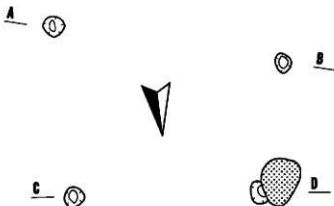


第36図 R C 01柱穴列平面・埋土断面



RC02柱穴列 A-B

- 1 7.5Y R 2/2 黒褐色シルト 灰白色火山灰が霰降り状に混じる
- 2 10Y R 3/4 暗褐色砂質シルト
- 3 7.5Y R 2/2 黒褐色シルト
- 4 10Y R 3/4 暗褐色砂質シルトと7.5Y R 2/2 黒褐色シルトの混合
- 5 灰白色火山灰ブロッケ



RC03柱穴列 A-B

- 1 10Y R 2/2 黒褐色シルト 粘性つよい
- 2 10Y R 3/4 暗褐色シルト

第37図 RC02・03柱穴列平面・埋土断面

〈柱穴の掘り方〉平面径は不整形円で、規模は35cm×32cm×29cm×27cm、深さは25cm～10cmである。埋土は灰白色火山灰が霜降り状に混じる黒褐色土が主体で、それぞれ2層に細分される。柱痕跡は検出されなかった。

〈出土遺物〉本遺構から遺物は出土していない。

〈時期〉埋土の状況から平安時代に属するものと推定される。

RC 03 柱穴列

遺構（第36図、写真図版13）

〈位置と残存状況〉7Q25uほか。RB02掘立柱建物跡と重複し、これよりも古い。

〈形状と規模〉4個の柱穴が台形状に配列される。平行する南側の長い列の方向が北西－南東方向（N-18°-N）で、柱穴間の距離は P_1-P_2 が2.25m、 P_2-P_3 が2.5m、 P_3-P_4 が1.5m、 P_4-P_1 が3.05mである。

〈柱穴の掘り方〉平面形は不整形円で、規模は径29cm×23cm、深さは22cm～7cmである。埋土は黒褐色土が主体で、2層に大別できる。柱痕跡は検出されなかった。

〈出土遺物〉本遺構から遺物は出土していない。

〈時期〉RB02掘立柱建物跡より古いことから平安時代か平安時代以前と推定される。

4. 土 坑

RD 01 土坑

遺構（第37図、写真図版14）

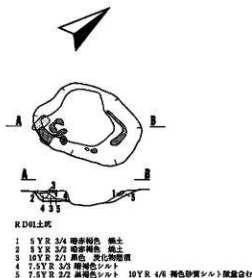
〈位置と残存状況〉7N7i。はじめ焼土遺構として登録したものであるが、精査の進行に伴い土坑に登録変更したものである。

〈形状と規模〉平面形は不整形円形を呈し、断面形はバケツ形である。規模は開口部径144cm×95cm、底部径97cm×71cm、深さは中心部で18cmである。壁は底面より緩やかに立ち上がる。底面はほぼ平坦である。検出面には焼土が形成されている。

〈埋土〉黒褐色土主体で5層に細分される。

〈遺物の出土〉本遺構から遺物は出土していない。

〈時期〉不明である。



第38図 R D 01土坑平面・埋土断面

R D 02 土坑

遺構 (第38図、写真図版14)

〈位置と残存状況〉 7 P 8 v ほか。R A 01竪穴住居跡の西に隣接する。

〈形状と規模〉 平面形は楕円形を呈する。規模は開口部径242cm×151cm、底部径210cm×128cm、深さは中心部で57cmである。壁は底面より緩やかに立ち上がる。底面はほぼ平坦である。

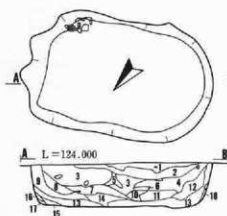
〈埋土〉 黒褐色土主体で18層に細分される。

〈遺物の出土〉 埋土から土師器坏形土器、底面から土師器甕形土器が出土している。

〈時期〉 埋土の状況・出土遺物から平安時代に属する。

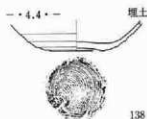
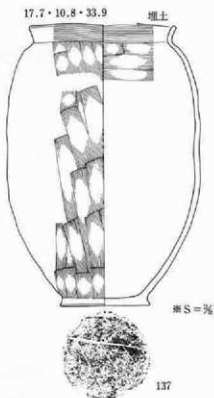
遺物 (第38図、写真図版35)

〈土器〉 137は土師器甕形土器である。ロクロ未使用成形で胴部が膨らむ長胴甕である。底部には木葉痕が見られる。138は土師器坏形土器の底部破片でロクロ成形、底部切り離しは回転糸切り、無調整である。



R D 02土坑 A-B

- 1 7.5Y R 3/3 暗褐色シルト 小礫を含む
- 2 7.5Y R 2/2 黒褐色シルト
- 3 10Y R 4/4 褐色砂質シルト
- 4 10Y R 3/3 暗褐色砂質シルト
- 5 10Y R 2/3 黒褐色シルト
- 6 10Y R 2/2 黒褐色シルト
- 7 7.5Y R 2/2 黒褐色シルト
- 8 10Y R 3/4 暗褐色シルト
- 9 10Y R 3/4 暗褐色シルト 灰白色火山灰を微量含む
- 10 10Y R 3/3 暗褐色シルト 灰白色火山灰を少量に含む
- 11 10Y R 2/3 黒褐色シルト 黄褐色土をブロック状に含む
- 12 7.5Y R 3/3 暗褐色シルト 小礫を含む
- 13 7.5Y R 2/4 暗褐色シルト 黄褐色土をブロック状に含む
- 14 10Y R 3/4 暗褐色シルト
- 15 7.5Y R 3/3 暗褐色シルト
- 16 10Y R 5/6 黄褐色砂質シルト 地山の再堆積
- 17 10Y R 4/4 褐色砂質シルト
- 18 7.5Y R 3/3 暗褐色シルト



第39図 R D 02土坑・平面・埋土断面・出土遺物

R D 03 土坑

遺構（第39図、写真図版14）

〈位置と残存状況〉 7 P 6 t ほか。

〈形状と規模〉 平面形は不整楕円形を呈する。規模は開口部径148cm×96cm、底部径119cm×66cm、深さは中心部で19cmである。壁は底面より緩やかに立ち上がる。底面はほぼ平坦である。

〈埋土〉 黒褐色土主体で2層に細分される。

〈遺物の出土〉 埋土から土師器坏形土器2点が出土している。

〈時期〉 出土遺物から平安時代に属する。

遺物（第39図、写真図版35）

〈土器〉 139、140は土師器坏形土器でロクロ成形、底部切り離しは回転糸切り、無調整である。

R D 04 土坑

遺構（第39図、写真図版15）

〈位置と残存状況〉 7 P 5 t ほか。

〈形状と規模〉 平面形は長方形を呈し、断面形も長方形である。規模は開口部径158cm×104cm、底部径142cm×77cm、深さは中心部で28cmである。壁は底面よりほぼ直立して立ち上がる。底面はほぼ平坦である。

〈埋土〉 黒褐色土主体で2層に分けられる。人為堆積と推定される。

〈遺物の出土〉 底面から土師器坏形土器1点が出土している。

〈時期〉 埋土の状況・出土遺物から平安時代に属する。

遺物（第39図、写真図版35）

〈土器〉 141は土師器坏形土器でロクロ成形、底部切り離しは回転糸切り、内面ミガキのち黒色処理を施している。

R D 05 土坑

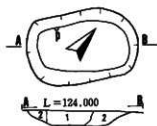
遺構（第40図、写真図版15）

〈位置と残存状況〉 7 P 2 m ほか。

〈形状と規模〉 平面形は不整長方形を呈する。規模は開口部径200cm×97cm、底部径167cm×73cm、深さは中心部で24cmである。壁は底面から緩やかに外傾して立ち上がる。底面はわずかな凹凸がある。

〈埋土〉 黒褐色土主体で3層に分けられる。

〈遺物の出土〉 底面・埋土から土師器坏形土器、土師器甕形土器が出土している。



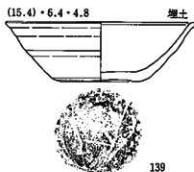
RD03土坑 A-B

- 1 7.5Y R 2/3 暗褐色シルトに褐色シルト少量含む
- 2 7.5Y R 2/3 暗褐色シルト

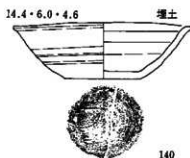


RD04土坑 A-B

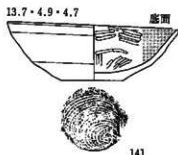
- 1 7.5Y R 2/2 黒褐色シルト 褐色シルト少量含む
- 2 10Y R 3/4 暗褐色シルト



139



140



141

第40図 RD03・04土坑・出土遺物

〈時期〉出土遺物から奈良時代に属する。

遺物（第40図、写真図版35）

〈土器〉142は土師器甕形土器の口縁部から体部にかけての破片、外面には明瞭なハケメが見られる。143は土師器坏形土器の口縁部から体部にかけての破片で非ロクロ成形、体部に段を持ち、丸底である。内面ミガキのち黒色処理を施している。144は土師器甕形土器の底部破片で調整は外面ハケメ、内面ヘラナデである。

R D 06 土坑

遺構（第40図、写真図版15）

〈位置と残存状況〉7 P 4 s ほか。

〈形状と規模〉平面形は不整円形を呈する。規模は開口部径163cm×78cm、底部径135cm×52cm、深さは中心部で18cmである。壁は底面から緩やかに外傾して立ち上がる。底面はわずかな凹凸がある。

〈埋土〉黒褐色土主体で3層に分けられる。

〈遺物の出土〉本遺構から遺物は出土していない。

〈時期〉不明である。

R D 07 土坑

遺構（第41図、写真図版16）

〈位置と残存状況〉7 P 1 p ほか。

〈形状と規模〉平面形は本体が不整楕円形を呈するが、南西壁から同方向に溝状の掘り込みを持つ。断面形は舟形である。規模は開口部径176cm×128cm、底部径125cm×82cm、深さは中心部で40cmである。溝状の掘り込みは長さ122cm、幅32cm、深さ10cm程度である。壁は底面から外傾して立ち上がる。底面はほぼ平坦である。

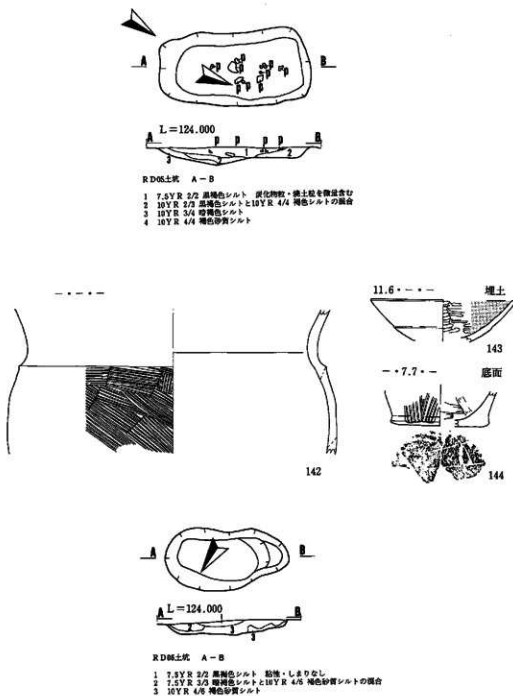
〈埋土〉黒褐色土主体で3層に分けられる。底面には焼土が形成され、炭化物粒がある。

〈遺物の出土〉底面・埋土から土師器甕形土器が5点出土している。

〈時期〉出土遺物から奈良時代である。

遺物（第41図、写真図版36）

〈土器〉145～149はいずれもロクロ非使用の土師器甕形土器、145と147は底部破片。146、148、149は口縁部破片である。147は胴部が大きく膨らむ器形と思われる。内外面ともハケメ、底部には木葉痕が見られる。146は口縁部に最大径を持ち、体部上半から次第にすぼむ器形。頸部に段を持ち、外面はケズリ、内面はヘラナデ調整。148は口縁部が頸部段の位置から外傾して外反



第41図 R D 05・06土坑・平面・埋土断面・出土遺物

し、最大径が口縁部にある器形。調整は内外面ともヘラナデである。149も最大径が口縁部あるいは体部上半にある器形で、調整は外面ハケメ、内面ヘラナデである。

R D 08 土坑

遺構（第42図、写真図版16）

〈位置と残存状況〉 6 O 17 i ほか。

〈形状と規模〉 平面形は不整形を呈する。規模は開口部径163cm×78cm、底部径135cm×52cm、深さは中心部で18cmである。壁は底面から緩やかに外傾して立ち上がる。底面は凹凸がある。

〈埋土〉 黒褐色土主体でほぼ単層である。人為堆積である。

〈遺物の出土〉 本遺構から遺物は出土していない。

〈時期〉 出土遺物がないため不明である。

R D 09 土坑

遺構（第42図、写真図版16）

〈位置と残存状況〉 6 O 18 i ほか。

〈形状と規模〉 平面形は不整形を呈する。規模は開口部径148cm×80cm、底部径134cm×57cm、深さは中心部で27cmである。壁は底面から緩やかに外傾して立ち上がる。底面は凹凸がある。

〈埋土〉 黒褐色土主体で2層に分けられる。

〈遺物の出土〉 本遺構から遺物は出土していない。

〈時期〉 出土遺物がないため不明である。

R D 10 土坑

遺構（第42図、写真図版16）

〈位置と残存状況〉 7 P 1 i ほか。

〈形状と規模〉 平面形は不整形を呈する。底面に一段低い方形の掘り込みと柱穴状のピットがある。規模は開口部径127cm×88cm、底部径114cm×58cm、50cm×58cm、深さは中心部で34cmである。壁は南西壁が底面から急角度をもって、それ以外の壁は緩やかに立ち上がる。底面は凹凸がある。

〈埋土〉 黒褐色土主体で6層に分けられる。埋土下位には炭化物層がある。

〈遺物の出土〉 本遺構から遺物は出土していない。

〈時期〉 出土遺物がないため不明である。



R C07土坑

A - B

- 1 2.5Y R 2/2 黄褐色シルト 炭化物粒微量含む
- 2 10Y R 2/2 黄褐色シルト 10Y R 4/4 褐色シルト微量含む
- 3 2.5Y R 2/2 黄褐色シルト
- 4 2.5Y R 3/4 暗褐色砂質シルト
- 5 2.5Y R 炭土層
- 6 2.5Y R 2/2 黄色 炭化物粒

C - D

- 1 10Y R 3/2 暗褐色シルト 10Y R 4/4 褐色砂質シルト微量含む
- 2 10Y R 2/2 黄褐色シルト 10Y R 4/4 褐色砂質シルト少量含む
- 3 10Y R 4/4 褐色砂質シルト



— 6.6 — 底面



145

14.2 - - -

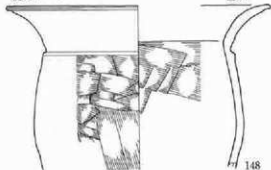
底面



146

21.1 - - -

底面



148

— 9.2 —

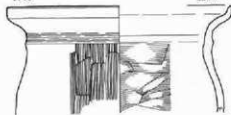
底面



147

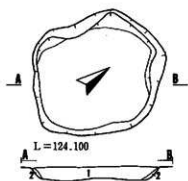
17.9 - - -

底面



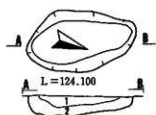
149

第42図 R D07土坑平面・埋土断面・出土遺物



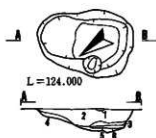
RD08土坑 A-B

- 1 7.5Y R 2/2 黒褐色シルト
- 2 7.5Y R 3/3 暗褐色シルト



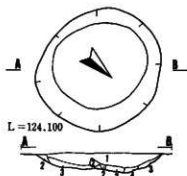
RD08土坑 A-B

- 1 7.5Y R 2/2 黒褐色シルト 炭化物を含む
- 2 10Y R 4/6 黄色砂質シルト



RD10土坑 A-B

- 1 10Y R 3/3 暗褐色シルトと
- 7.5Y R 2/2 黒褐色シルトの混合
- 2 7.5Y R 2/2 黒褐色シルト 炭化物微量含む
- 3 7.5Y R 2/2 黒褐色シルト 炭化物粒少量含む
- 4 10Y R 3/4 暗褐色シルト しまりあり
- 5 7.5Y R 2/1 黒色 炭化物混
- 6 10Y R 3/4 暗褐色シルト しまりなし



RD11号土坑 A-B

- 1 7.5Y R 2/1 黒色シルト
- 2 10Y R 2/1 黒色シルト 板による攪乱
- 3 10Y R 3/3 暗褐色シルト
- 4 10Y R 3/2 黒褐色シルト 小礫を多く含む

第43図 R D 08・09・10・11土坑・平面・埋土断面

RD 11 土坑

遺構（第42図、写真図版17）

〈位置と残存状況〉 6 N 6 w ほか。

〈形状と規模〉 平面形は不整円形を呈する。規模は開口部径162cm×155cm、底部径110cm×116cm、深さは中心部で26cmである。壁は底面から緩やかに立ち上がる。底面は著しい凹凸がある。

〈埋土〉 黒褐色土主体で4層に分けられる。

〈遺物の出土〉 本遺構から遺物は出土していない。

〈時期〉 出土遺物はないが、埋土の状況や遺構周辺の遺物出土状況から平安時代に属する。

RD 12 土坑

遺構（第43図、写真図版17）

〈位置と残存状況〉 6 N 7 u ほか。

〈形状と規模〉 平面形は隅丸方形を呈する。規模は開口部径315cm×215cm、底部径302cm×198cm、深さは中心部で18cmである。遺構の東壁から北壁の北西壁に沿って周溝状の掘り込みが見られる。総延長は434cmで、深さは約6cmである。壁は底面から急角度で立ち上がる。底面は礫層であり、これに起因する凹凸が著しい。

〈埋土〉 黒褐色土主体で2層に分けられる。

〈遺物の出土〉 埋土から土師器環形土器の細片が出土している。

〈時期〉 出土遺物から平安時代に属する。

RD 13 土坑

遺構（第43図、写真図版17）

〈位置と残存状況〉 6 N 5 s ほか。

〈形状と規模〉 平面形は不整方形を呈する。規模は開口部径76cm×95cm、底部径53cm×72cm、深さは中心部で14cmである。壁は底面から外傾して立ち上がる。底面はほぼ平坦である。

〈埋土〉 黒褐色土主体で2層に分けられる。

〈遺物の出土〉 本遺構から遺物は出土していない。

〈時期〉 出土遺物はないが、埋土の状況や遺構周辺の遺物出土状況から平安時代に属する。

RD 14 土坑

遺構（第43図、写真図版17）

〈位置と残存状況〉 6 N 6 t。

〈形状と規模〉平面形はほぼ円形である。規模は開口部径68cm×60cm、底部径38cm×37cm、深さは中心部で22cmである。壁は緩やかに外傾して立ち上がる。底面はほぼ平坦である。

〈埋土〉黒褐色土主体で2層に分けられる。

〈遺物の出土〉本遺構から遺物は出土していない。

〈時期〉出土遺物はないが、埋土の状況や遺構周辺の遺物出土状況から平安時代に属する。

R D 15 土坑

遺構（第43図、写真図版18）

〈位置と残存状況〉6 N 6 t ほか。

〈形状と規模〉平面形はほぼ円形である。規模は開口部径61cm×54cm、底部径33cm×25cm、深さは中心部で22cmである。壁は緩やかに外傾して立ち上がる。底面はわずかな凹凸がある。

〈埋土〉黒褐色土主体で3層に分けられる。

〈遺物の出土〉本遺構から遺物は出土していない。

〈時期〉出土遺物はないが、埋土の状況や遺構周辺の遺物出土状況から平安時代に属する。

R D 16 土坑

遺構（第43図、写真図版18）

〈位置と残存状況〉6 N 6 s ほか。

〈形状と規模〉平面形は不整円形を呈する。規模は開口部径66cm×62cm、底部径42cm×49cm、深さは中心部で32cmである。壁は緩やかに外傾して立ち上がる。底面はわずかな凹凸がある。

〈埋土〉黒褐色土主体で2層に分けられる。

〈遺物の出土〉本遺構から遺物は出土していない。

〈時期〉出土遺物はないが、埋土の状況や遺構周辺の遺物出土状況から平安時代に属する。

R D 17 土坑

遺構（第43図、写真図版18）

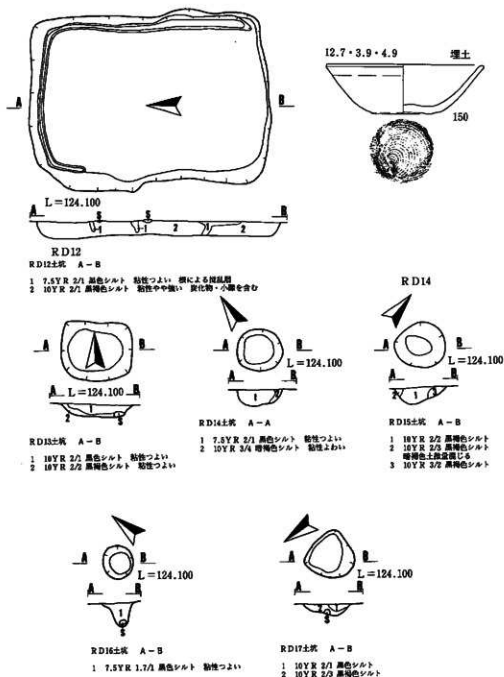
〈位置と残存状況〉6 N 6 s ほか。

〈形状と規模〉平面形は不整円形を呈する。規模は開口部径66cm×62cm、底部径42cm×49cm、深さは中心部で16cmである。壁は緩やかに外傾して立ち上がる。底面はわずかな凹凸がある。

〈埋土〉黒褐色土主体で2層に分けられる。

〈遺物の出土〉本遺構から遺物は出土していない。

〈時期〉出土遺物はないが、埋土の状況や遺構周辺の遺物出土状況から平安時代に属する。



第44図 RD12・13・14・15・16・17土坑

R D 18 土坑

遺構（第44図、写真図版18）

〈位置と残存状況〉 6 N 5 v ほか。

〈形状と規模〉 平面形は不整形円形を呈する。規模は開口部径60cm×67cm、底部径45cm×52cm、深さは中心部で43cmである。壁は緩やかに外傾してのち直立する。底面はわずかな凹凸がある。

〈埋土〉 黒褐色土主体で5層に分けられる。

〈遺物の出土〉 本遺構から遺物は出土していない。

〈時期〉 出土遺物はないが、埋土の状況や遺構周辺の遺物出土状況から平安時代に属する。

R D 19 土坑

遺構（第44図、写真図版19）

〈位置と残存状況〉 6 N 8 u ほか。

〈形状と規模〉 平面形はほぼ楕円形である。規模は開口部径95cm×74cm、底部径88cm×68cm、深さは中心部で7cmである。壁はほとんど失われている。底面は凹凸が著しい。

〈埋土〉 黒色土の単層である。

〈遺物の出土〉 本遺構から遺物は出土していない。

〈時期〉 出土遺物はないが、埋土の状況や遺構周辺の遺物出土状況から平安時代に属する。

R D 20 土坑

遺構（第44図、写真図版19）

〈位置と残存状況〉 6 N 8 t ほか。

〈形状と規模〉 平面形はほぼ楕円形を呈する。規模は開口部径110cm×80cm、底部径96cm×63cm、深さは中心部で20cmである。壁はほぼ直立して立ち上がる。底面はほぼ平坦である。

〈埋土〉 黒褐色土主体で5層に分けられる。

〈遺物の出土〉 埋土から土師器杯形土器の細片が出土している。

〈時期〉 出土遺物から平安時代に属する。

R D 21 土坑

遺構（第44図、写真図版19）

〈位置と残存状況〉 6 N 8 s ほか。

〈形状と規模〉 平面形は楕円形を呈する。規模は開口部径149cm×86cm、底部径138cm×72cm、深さは中心部で27cmである。壁はほぼ直立して立ち上がる。底面は凹凸が著しい。

〈埋土〉黒褐色土主体で6層に分けられる。

〈遺物の出土〉埋土から土師器坏形土器の細片が出土している。

〈時期〉出土遺物から平安時代に属する。

R D 22 土坑

遺構（第44図、写真図版19）

〈位置と残存状況〉6 N 6 u。

〈形状と規模〉平面形は不整円形を呈する。規模は開口部径40cm×38cm、底部径28cm×29cm、深さは中心部で27cmである。壁はほぼ直立して立ち上がる。底面は凹凸が著しい。

〈埋土〉黒褐色土主体で6層に分けられる。

〈遺物の出土〉埋土から土師器坏形土器の細片が出土している。

〈時期〉出土遺物から平安時代に属する。

R D 23 土坑

遺構（第44図、写真図版19）

〈位置と残存状況〉6 N 8 u。

〈形状と規模〉平面形は不整方形を呈する。規模は開口部径36cm×38cm、底部径34cm×28cm、深さは中心部で21cmである。壁はほぼ直立して立ち上がる。底面は凹凸が著しい。

〈埋土〉黒褐色土主体で3層に分けられる。

〈遺物の出土〉本遺構から遺物は出土していない。

〈時期〉出土遺物がないため不明である。

R D 24 土坑

遺構（第45図、写真図版20）

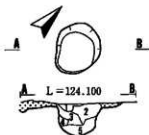
〈位置と残存状況〉6 N10 r ほか。

〈形状と規模〉平面形は不整楕円形を呈する。規模は開口部径198cm×108cm、底部径168cm×95cm、深さは中心部で17cmである。壁はほぼ直立して立ち上がる。底面は凹凸が著しい。

〈埋土〉黒褐色土主体で5層に分けられる。

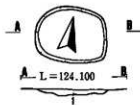
〈遺物の出土〉本遺構から遺物は出土していない。

〈時期〉出土遺物がないため不明である。



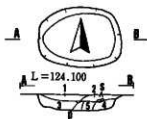
R D18土坑 A-B

- 1 7.5 Y R 2/1 褐色シルト
- 2 10 Y R 2/2 黒褐色シルト
- 3 10 Y R 2/2 黒褐色シルト 褐色土少量含む
- 4 10 Y R 2/2 黒褐色シルト 礫を多量に含む
- 5 10 Y R 2/1 黒色シルト 粘性つよい 礫を多量に含む



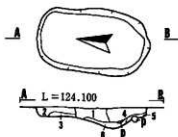
R D19土坑 A-B

- 1 7.5 Y R 2/1 褐色シルト 粘性つよい 炭化物微量混じる



R D20土坑 A-B

- 1 7.5 Y R 2/1 褐色シルト 粘性つよい 炭化物微量混じる
- 2 10 Y R 2/1 黒色シルト
- 3 10 Y R 2/2 黒褐色シルト 炭化物微量混じる
- 4 10 Y R 2/2 黒褐色シルト
- 5 10 Y R 3/4 暗褐色シルト 礫を多量に含む



R D21土坑 A-B

- 1 10 Y R 2/1 褐色シルト 粘性つよい
- 2 7.5 Y R 2/2 褐色シルト 粘性つよい
- 3 10 Y R 4/6 褐色シルト
- 4 10 Y R 2/2 黒褐色シルト 暗褐色土をブロック状に含む
- 5 10 Y R 3/4 暗褐色シルト
- 6 10 Y R 3/2 黒褐色シルト



R D22土坑 A-B

- 1 10 Y R 2/2 黒褐色シルト
- 2 10 Y R 2/1 黒色シルト
- 3 10 Y R 2/3 黒褐色シルト
- 4 10 Y R 3/2 黒褐色シルト
- 5 10 Y R 3/2 黒褐色シルト 小礫を含む
- 6 10 Y R 4/6 褐色砂質シルト 小礫を多数含む



R D23土坑 A-B

- 1 10 Y R 2/2 黒褐色シルト
- 2 10 Y R 3/3 暗褐色シルト
- 3 10 Y R 2/3 黒褐色シルト

第45図 R D18・19・20・21・22・23土坑・平面・埋土断面

R D 25 土坑

遺構（第45図、写真図版20）

〈位置と残存状況〉 6 N 10 r ほか。

〈形状と規模〉 平面形は西半はほぼ円形であるが東半が張り出す不整形である。規模は開口部径164cm×86cm、底部径85cm×80cm、深さは中心部で27cmである。壁はほぼ緩やかに外傾して立ち上がる。底面は凹凸が著しい。

〈埋土〉 黒褐色土主体で4層に分けられる。

〈遺物の出土〉 本遺構から遺物は出土していない。

〈時期〉 出土遺物がないため不明である。

R D 26 土坑

遺構（第45図、写真図版20）

〈位置と残存状況〉 6 N 5 q ほか。

〈形状と規模〉 平面形はほぼ正方形である。規模は開口部径271cm×264cm、底部径252cm×246cm、深さは中心部で32cmである。壁は底面から緩やかに外傾して立ち上がった後、直立する。底面は礫層であり、これに起因する凹凸が著しい。

〈埋土〉 黒褐色土主体で9層に分けられる。

〈遺物の出土〉 本遺構から遺物は出土していない。

〈時期〉 出土遺物はないが、埋土の状況や遺構周辺の遺物出土状況から平安時代に属する。

R D 27 土坑

遺構（第45図、写真図版21）

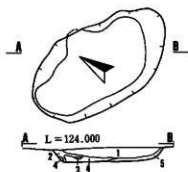
〈位置と残存状況〉 7 Q 12 e ほか。

〈形状と規模〉 平面形は不整形を呈する。規模は開口部径107cm×95cm、底部径84cm×72cm、深さは中心部24cmである。壁は底面からやや外傾して立ち上がる。底面はやや凹凸がある。

〈埋土〉 黒褐色土主体で6層に分けられる。

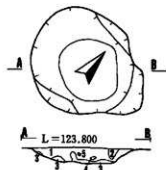
〈遺物の出土〉 本遺構から遺物は出土していない。

〈時期〉 出土遺物がないため不明である。



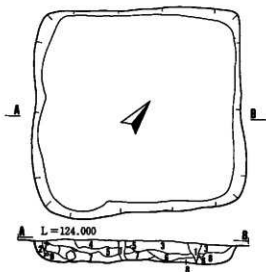
R D24土坑 A-B

- 1 10 Y R 2/3 黒褐色シルト 炭化物少量含む
- 2 10 Y R 3/3 暗褐色シルト 黄褐色土ブロック状に含む
- 3 7.5 Y R 2/2 黒褐色シルト しまりよわい
- 4 7.5 Y R 2/2 黒褐色シルト しまりややよい
- 5 10 Y R 3/4 暗褐色シルト 黄褐色土ブロック状に含む



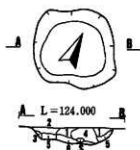
R D25土坑 A-B

- 1 7.5 Y R 2/2 黒褐色シルト 小礫ふくむ
- 2 10 Y R 3/4 黒褐色シルト 黄褐色土ブロック状に含む
- 3 10 Y R 3/2 黒褐色シルト
- 4 10 Y R 3/4 暗褐色シルト



R D26土坑 A-B

- 1 10 Y R 2/1 黒色シルト
- 2 10 Y R 2/3 黒褐色シルト 礫を多く含む
- 3 10 Y R 2/2 黒褐色シルト 小礫、炭化物、灰白色火山灰を含む
- 4 10 Y R 3/2 黒褐色シルト 灰白色火山灰を含み、3層よりも多くの礫を含む
- 5 10 Y R 3/1 黒褐色シルト 灰白色火山灰を微量含む
- 6 7.5 Y R 3/4 暗褐色シルト 灰白色火山灰を微量含む
- 7 7.5 Y R 2/1 黒色シルト 灰白色火山灰を微量含む
- 8 7.5 Y R 2/3 暗褐色シルト 小礫を含む
- 9 10 Y R 2/2 黒褐色シルト 礫を少量含む



R D27土坑 A-B

- 1 10 Y R 1.7/1 黒色シルト
- 2 10 Y R 2/1 黒色シルト
- 3 10 Y R 3/2 黒褐色シルト 礫による攪乱
- 4 10 Y R 2/2 黒褐色シルト 小礫を含む
- 5 10 Y R 3/3 暗褐色シルト
- 6 7.5 Y R 3/2 黒褐色シルト 礫を多量に含む

第46図 R D24・25・26・27土坑・平面・埋土断面

R D 28 土坑

遺構（第46図、写真図版21）

〈位置と残存状況〉 6 N 11 s ほか。R D 29号土坑と重複し、これよりも古い。

〈形状と規模〉平面形は不整楕円形を呈する。規模は開口部径172cm×126cm、底部径114cm×76cm、深さは中心部で28cmである。北壁と南壁が失われているが、残存する東壁と西壁は緩やかに外傾して立ち上がる。底面はやや凹凸がある。

〈埋土〉 黒褐色土主体で11層に分けられる。

〈遺物の出土〉 本遺構から遺物は出土していない。

〈時期〉 出土遺物はないが、埋土の状況や遺構周辺の遺物出土状況から平安時代に属する。

R D 29 土坑

遺構（第46図、写真図版21）

〈位置と残存状況〉 6 N 11 s ほか。R D 28号土坑と重複し、これよりも新しい。

〈形状と規模〉平面形は隅丸方形を呈する。規模は開口部径126cm×108cm、底部径92cm×82cm、深さは中心部で28cmである。壁は緩やかに外傾して立ち上がる。底面はやや凹凸がある。

〈埋土〉 黒褐色土主体で3層に分けられる。

〈遺物の出土〉 本遺構から遺物は出土していない。

〈時期〉 出土遺物はないが、埋土の状況や遺構周辺の遺物出土状況から平安時代に属する。

R D 30 土坑

遺構（第46図、写真図版21）

〈位置と残存状況〉 6 N 5 s ほか。

〈形状と規模〉平面形は不整円形を呈する。規模は開口部径62cm×63cm、底部径42cm×47cm、深さは中心部で38cmである。壁は底面から緩やかに外傾して立ち上がる。底面はやや凹凸がある。

〈埋土〉 黒褐色土主体で4層に分けられる。

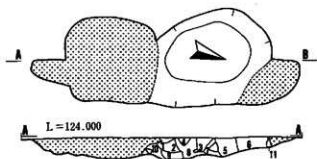
〈遺物の出土〉 本遺構から遺物は出土していない。

〈時期〉 出土遺物がないため不明である。

R D 31 土坑

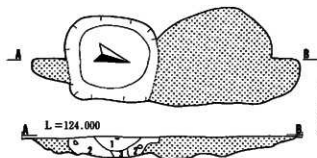
遺構（第47図、写真図版22）

〈位置と残存状況〉 7 P 9 q ほか。



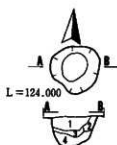
RD28土坑 A-B

- 1 7.5Y R 2/3 黒褐色シルト 耕作による擾乱
- 2 10Y R 2/3 黒褐色シルト 粘性ややつよい
- 3 10Y R 3/1 黒褐色シルト
- 4 10Y R 3/4 暗褐色シルト 炭化物含む
- 5 10Y R 2/3 黒褐色シルト 褐色土層陶片状に入る
- 6 10Y R 3/4 暗褐色シルト 小礫混じる
- 7 10Y R 2/2 黒褐色シルト 褐色土ブロック状に混じる
- 8 7.5Y R 2/3 黒褐色シルト 小礫多量に混じる
- 9 10Y R 2/3 黒褐色シルト
- 10 7.5Y R 2/3 暗褐色シルト 炭化物含む・小礫混じる。
- 11 10Y R 3/3 暗褐色シルト



RD29土坑 A-B

- 1 7.5Y R 2/3 暗褐色シルト 炭化物少量含む 小礫あり
- 2 10Y R 3/3 暗褐色シルト 小礫含む
- 3 10Y R 2/3 黒褐色シルト



RD30土坑 A-B

- 1 10Y R 3/1 黒色シルト
- 2 10Y R 2/2 黒褐色シルト
- 3 10Y R 2/3 黒褐色シルト
- 4 10Y R 3/4 暗褐色シルト

第47図 RD28・29・30土坑・平面・埋土断面

〈形状と規模〉平面形は不整長方形を呈する。規模は開口部径183cm×104cm、底部径172cm×89cm、深さは中心部で16cm、深さは中心部で16cmである。壁は底面から緩やかに外傾して立ち上がったのち直立する。底面はほぼ平坦で、南西半に焼土が形成されている。

〈埋土〉黒褐色土主体で7層に細分される。

〈遺物の出土〉本遺構から遺物は出土していない。

〈時期〉出土遺物がないため不明である。

R D 32 土坑

遺構（第47図、写真図版22）

〈位置と残存状況〉7 Q 13 y ほか。R A 02整穴住居跡に隣接する。

〈形状と規模〉平面形は不整円形を呈する。規模は開口部径63cm×52cm、底部径45cm×38cm、深さは中心部で38cmである。壁は底面から外傾して立ち上がる。

〈埋土〉黒褐色土主体で5層に分けられる。

〈遺物の出土〉本遺構から遺物は出土していない。

〈時期〉出土遺物がないため不明である。

R D 33 土坑

遺構（第47図、写真図版22）

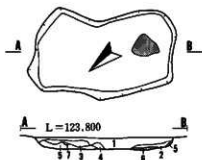
〈位置と残存状況〉7 P 1 m ほか。R G 12溝跡と重複し、これより新しい。

〈形状と規模〉平面形は不整方形を呈する。規模は開口部径127cm×94cm、底部径78cm×43cm、深さは中心部で36cmである。壁は底面からほぼ直立して立ち上がる。底面はやや凹凸がある。

〈埋土〉黒褐色土主体で4層に分けられる。

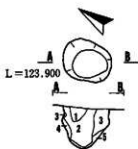
〈遺物の出土〉本遺構から遺物は出土していない。

〈時期〉出土遺物がないため不明である。



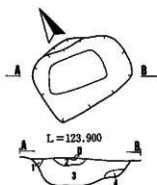
RD31土坑 A-B

- 1 7.5Y R 2/2 黒褐色シルト
- 2 7.5Y R 2/1 黒色シルト
- 3 7.5Y R 3/3 暗褐色シルト
- 4 7.5Y R 3/3 暗褐色シルト 炭化物含む
- 5 10Y R 5/6 黄褐色砂質シルト
- 6 5 Y R 3/4 暗赤褐色粘土
- 7 10Y R 3/4 暗褐色砂質シルト



RD32土坑 A-B

- 1 10Y R 2/1 黒色シルト 粘性つよい
- 2 10Y R 2/2 黒褐色シルト 粘性ややつよい
- 3 10Y R 2/3 黒褐色シルト
- 4 10Y R 4/6 褐色砂質シルト 黒褐色土少量混じる
- 5 10Y R 4/6 褐色砂質シルト



RD33土坑 A-B

- 1 7.5Y R 2/2 黒褐色シルト 耕作による擾乱
- 2 10Y R 2/2 黒褐色シルト
- 3 10Y R 2/3 黒褐色シルト 褐色土を少量含む
- 4 10Y R 2/3 黒褐色シルト

第48図 RD31・32・33土坑・平面・埋土断面

5. 溝 跡

R G 01 溝跡

遺構（第48図、写真図版23）

〈位置と規模〉 6 O25 y ~ 7 O3 w ほか。北東-南西方向に延びる。北東端は調査範囲外に続く。全長約 8 m、幅 50 cm 前後、深さ 4 cm 前後である。掘り込み面は II c 層下面である。

〈埋土〉 黒褐色土主体で 2 層に分けられる。

〈遺物の出土〉 本遺構から遺物は出土していない。

〈時期〉 出土遺物がないため不明である。

R G 02 溝跡

遺構（第48図、写真図版23）

〈位置と規模〉 7 O6 x ~ 7 O8 v ほか。北東-南西方向に延びるが、北東端は調査範囲外に続く。全長 7.5 m、幅 50 cm 前後、深さ 3 cm 前後である。II c 層下面を掘り込んでいる。

〈埋土〉 黒褐色土主体で 2 層に分けられる。

〈遺物の出土〉 本遺構から遺物は出土していない。

〈時期〉 出土遺物がないため不明である。

R G 03 溝跡

遺構（第48図、写真図版23）

〈位置と規模〉 6 P21 j ~ 6 P23 n ほか。南西方向に膨らみながら北西-南東方向に延びるが北西端と南東端はともに調査区外に続く。全長約 12 m、幅 50 cm 前後、深さ 3 cm 前後である。II c 層下面を掘り込んでいる。

〈埋土〉 黒褐色土主体で 3 層に分けられる。

〈遺物の出土〉 本遺構から遺物は出土していない。

〈時期〉 出土遺物がないため不明である。

R G 04 溝跡

遺構（第49図、写真図版23）

〈位置と規模〉 6 N23 j ~ 7 N15 v ほか。北西-南東方向に延びるが、北東端は調査区外に続く。全長 47 m、幅 180 ~ 120 cm 前後、深さ 28 ~ 14 cm 程度である。II c 層下面を掘り込んでいる。

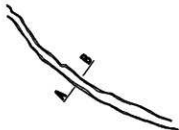
〈埋土〉 黒褐色土主体のほぼ単層であるが、部分的に崩落の土を含む。



RG01溝跡 A-B
 1 10Y R 2/3 黒褐色シルト
 2 10Y R 4/4 褐色砂質シルト

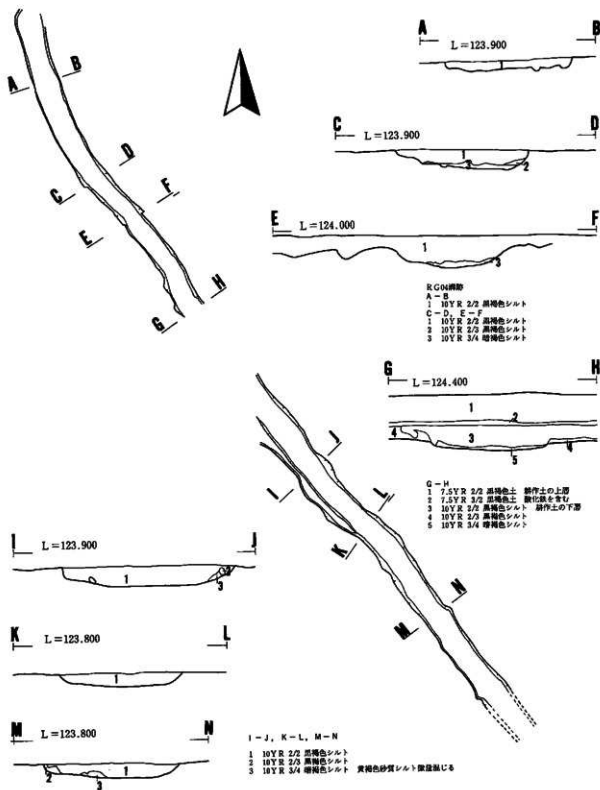


RG02溝跡 A-B
 1 10Y R 2/3 黒褐色シルト
 2 10Y R 4/4 褐色砂質シルト



RG03溝跡 A-B
 1 10Y R 2/3 黒褐色シルト
 2 10Y R 2/3 黒褐色シルトと10Y R 4/4 褐色砂質シルトの混在
 3 10Y R 4/4 褐色砂質シルト

第49図 R G 01・02・03溝跡平面・埋土断面



第50図 R G04溝跡平面・埋土断面

〈遺物の出土〉本遺構から遺物は出土していない。

〈時期〉出土遺物がないため不明である。

RG 05 溝跡

遺構（第50図、写真図版24）

〈位置と規模〉6 O14 t～7 O10 b ほか。RG06溝跡と並行して北東－南西方向に延びるが北東端は調査区外へ続く。全長約45m、幅100cm～60cm、深さ20cm～4 cm程度である。II c 層下面を掘り込んでいる。

〈埋土〉黒褐色土主体で5層に分けられる。

〈遺物の出土〉埋土上位から土師器鉢形土器が出土している。

〈時期〉埋土から土師器鉢形土器が出土しているが流れ込みの可能性が高く、不明である。

遺物（第53図、写真図版36）

151は土師器鉢形土器の口縁部から体部上半にかけての破片である。ロクロ未使用成形で内面はミガキ後黒色処理を施している。外面にもわずかにミガキがみられる。

RG 06 溝跡

遺構（第50図、写真図版24）

〈位置と規模〉6 O15 u～6 O22 r ほか。RG05溝跡と並行して北東－南西方向に延びるが北東端は調査区外へ続く。全長約22m、幅100cm前後、深さ20cm程度である。II c 層下面を掘り込んでいる。

〈埋土〉黒褐色土主体で3層に分けられる。

〈遺物の出土〉本遺構から遺物は出土していない。

〈時期〉出土遺物がないため不明である。

RG 07 溝跡

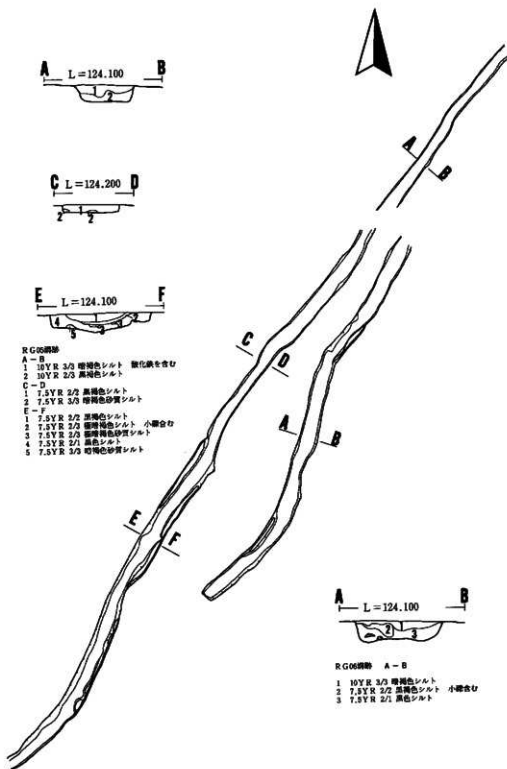
遺構（第51図、写真図版24、25）

〈位置と残存状況〉6 N14 t～6 N13 y。RG08溝跡の南にあり、RG08溝跡、RG09溝跡とほぼ並行して北東－南西方向に延びるが、北東端は調査区外に続く。南西方向は消滅する。全長約13m、幅50cm前後、深さ4 cm程度である。II c 層下面を掘り込んでいる。

〈埋土〉黒褐色土主体で4層に分けられる。

〈遺物の出土〉検出面・埋土から土師器の破片が多数出土している。

〈時期〉出土遺物から平安時代に属する。



第51図 R G 05・06溝跡平面・埋土断面

RG 08 溝跡

遺構（第51図、写真図版24、25）

〈位置と規模〉6 N15 p～6 N12 y ほか。RG07溝跡の北、RG09溝跡の南にあり、RG07溝跡、RG09溝跡とほぼ並行して北東－南西方向に延びるが、北東端と南西端はともに調査区外に続く。全長約20m、幅50cm前後、深さ7cm程度である。III層を掘り込んでいる。

〈埋土〉黒褐色土主体で4層に分けられる。

〈遺物の出土〉検出面、埋土から土師器が多数出土している。

〈時期〉出土遺物から平安時代である。

遺物（第53図、写真図版36）

152、153、155～160は底面から出土した土師器環形土器である。すべてロクロ使用成形である。152、156は内面ミガキ後黒色処理を施している。155は内外面とも丁寧なミガキ後黒色処理を施しており、底面は手持ちヘラケズリで再調整している。154は高台環形土器であるが、高台部は剝離している。161は小型の片口形土器であるが、底部は失われている。内外面にナデ痕がみられる。

RG 09 溝跡

遺構（第51図、写真図版25、26）

〈位置と規模〉6 N13 p～6 N11 y ほか、RG08溝跡の北にあり、RG07溝跡、RG08溝跡とほぼ並行して北東－南西方向に延びるが、6 N13 r～6 N12 tまでの約5mほどは失われており、北東端と南西端はともに調査区外に続く。北東は約12m、南東は約4m、幅50cm前後、深さ6cm程度である。III層を掘り込んでいる。

〈埋土〉黒褐色土主体でほぼ単層である。

〈遺物の出土〉検出面、埋土から土師器が多数出土している。

〈時期〉出土遺物から平安時代に属する。

遺物（第38図、写真図版37）

162～167は土師器甕形土器である。いずれもロクロ未使用成形で、体部内外面には明瞭なハケメがみられる。162、163、165、167は口縁部から体部上半にかけての破片で、167は口縁端を欠く。いずれも最大形を口縁端に持つ長胴甕で、口縁部が外湾気味に外反する。163、165、167は頸部に軽い段を持つ。162、165は底部破片で底面には木葉痕がみられる。

RG 10 溝跡

遺構 (第51図、写真図版25、26)

〈位置と規模〉 6 N11 v～6 N10 y ほか。RG 09溝跡の北にあり、北側に頂部をもつ「く」字形を呈する。長さ8 m、幅は最大で60cm、深さ14cm程度である。III層を掘り込んでいる。

〈埋土〉 黒褐色土主体で3層に分けられる。

〈遺物の出土〉 検出面・埋土から土師器の破片が多数出土している。

〈時期〉 出土遺物、検出状況、埋土などから平安時代に属する。

RG 11 溝跡

遺構 (第52図、写真図版26)

〈位置と規模〉 8 Q 5 p～8 Q 4 w ほか、東西方向に伸びるが、東端と西端は調査区外に続く。全長約12.5m、幅130cm前後、深さ35cm程度である。II c 層下面を掘り込んでいる。

〈埋土〉 黒褐色土主体で6層に分けられる。

〈遺物の出土〉 本遺構から遺物は出土していない。

〈時期〉 出土遺物がないため不明である。

RG 12 溝跡

遺構 (第52図、写真図版26)

〈位置と規模〉 6 P 23 l～7 P 6 m ほか。RA 04竪穴住居跡、RD 32土坑と重複し、これよりも古い。ほぼ南北方向に伸びるが、北端と南端は調査範囲外に続く。全長約20m、幅340～150 cm前後、深さ20cm程度である。III層下面を掘り込んでいる。

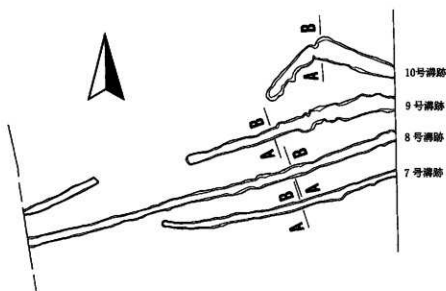
〈埋土〉 黒褐色土主体で5層に分けられる。

〈遺物の出土〉 埋土から土師器変形土器の底部破片1点が出土している。

〈時期〉 出土遺物、RA 04竪穴住居跡の重複関係から奈良時代以前である。

遺物 (第38図、写真図版37)

168は土師器変形土器の底部破片である。外面にハケメ、底面には木葉痕がみられる。



R G 07 溝跡 A-B

- 1 10 Y R 2/1 黒色シルト
- 2 10 Y R 2/2 黒褐色シルト



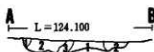
R G 08 溝跡 A-B

- 1 10 Y R 2/1 褐色シルト
- 2 10 Y R 2/3 黒褐色シルト



R G 09 溝跡 A-B

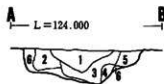
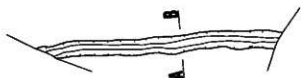
- 1 10 Y R 2/1 黒色シルト



R G 10 溝跡 A-B

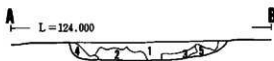
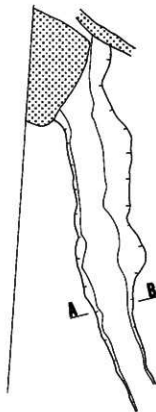
- 1 10 Y R 2/2 黒褐色シルト
- 2 10 Y R 2/1 黒色シルト
- 3 10 Y R 3/4 褐色シルト

第52図 R G 07・08・09・10溝跡平面・埋土断面



RG11溝断

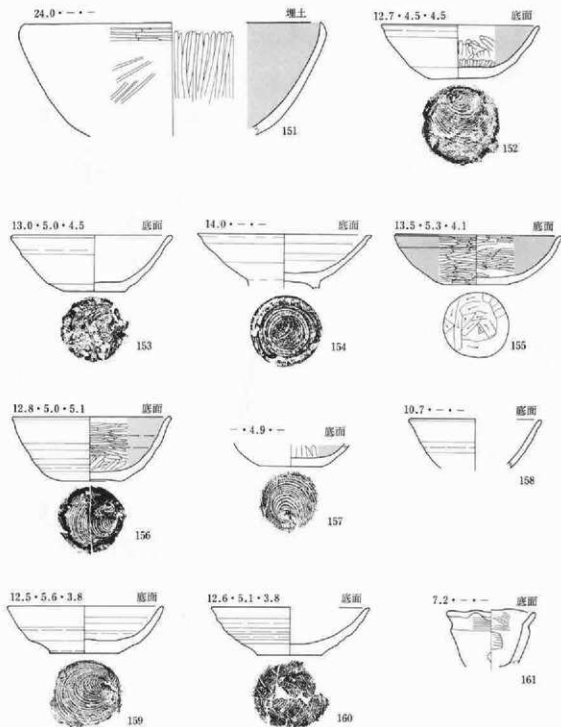
- 1 7.5Y R 2/2 黒褐色シルト 小礫を含む
- 2 7.5Y R 2/3 暗褐色シルト
- 3 10Y R 2/3 黒褐色シルト 炭化物を微量含む
- 4 10Y R 3/3 暗褐色シルト
- 5 10Y R 3/4 暗褐色シルト
- 6 10Y R 4/4 褐色砂質シルト



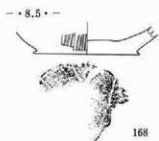
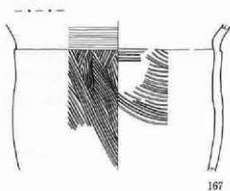
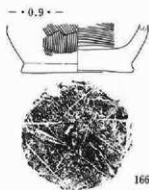
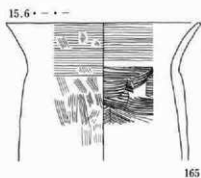
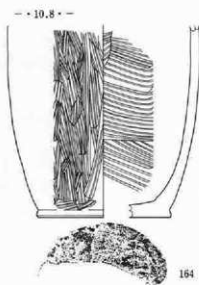
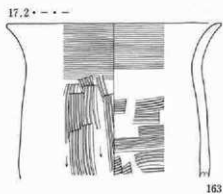
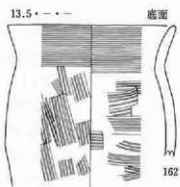
RG12溝断

- 1 10Y R 2/3 黒褐色シルト
- 2 10Y R 2/3 暗褐色シルト
- 3 10Y R 2/3 暗褐色シルト 炭化物を微量含む
- 4 10Y R 4/4 褐色砂質シルト
- 5 10Y R 4/4 褐色砂質シルト 炭化物を微量含む

第53図 RG11・12溝跡平面・埋土断面



第54図 R G 05・08溝跡・出土遺物



第55図 R G 09 · 12溝跡 · 出土遺物

6. 遺構外の出土遺物

奈良時代の土師器・土製品、平安時代の土師器・須恵器・土製品・江戸時代の寛永通寶・瓦などが出土している。遺物の出土した地点は地域的に限られており、グリッド的には遺構の集中する6N区、7P区、7Q区からの出土が多い。6O区からの遺構の検出は溝跡のみであるが、遺物の出土があり、当該の時期の遺構があったが後世の耕作などによる削平によって失われた可能性が大きい。また、層位的にはIc層からの出土が多い。以下、器種ごとに記述する。169～189、182～184は6Nから出土した土師器環形土器である。170、171、173は内面ミガキ後黒色処理を施している。182は内外面ともミガキ後黒色処理を施している。その他は無調整であるが、180は底部がやや高台状を呈している。181は土師器甕形土器の底部破片である。184は土師器環形土器の体部破片であるが表面に線刻（「夙」か？）がみられる。

184～188は6O区のほぼ同地点からの出土である。184～187は土師器環形土器。いずれもロクロ未使用成形で体部下半に段をもち、丸底である。184、185は内面ミガキ後黒色処理、187は内外面ともミガキ後黒色処理を施している。188は土師器甕形土器、底部には木葉痕がみられる。RG06溝跡出土の151もこれらと共伴するものである可能性が高い。

189、190、196は7P区から出土した土師器環形土器。いずれもロクロ成形、切り離しは回転糸切り、189は内面ミガキ後黒色処理、190、196は無調整である。

193～195も7P区から出土している。193、194は体部破片で全体の器形は不明であるが、土師器環形土器あるいは土師器高台付環形土器の体部破片であると推定される。内外面ともミガキ後黒色処理を施しており、表面に線刻を伴う。195は土師器高台付環形土器で、ロクロ成形、内外面ともミガキ後黒色処理を施している。

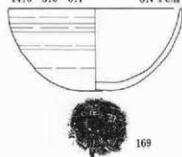
191、192、196は8Q区から出土した土師器環形土器。いずれもロクロ成形、切り離しは回転糸切りである。

197、198は7P区出土の土師器甕形土器。197は口縁部破片、198は底部破片で、198は底部にもハケメがみられる。

199～206は須恵器甕形土器。199～202は口縁部破片、203～205は底部破片、206は体部破片である。須恵器の破片は7P、7Q、8Q区の全域にわたって出土しているが比較的大きな破片のものを提示した。207は7P区出土の土製勾玉、208は6O区の184～188の土器とほぼ同地点から出土した土玉である。

209は7M区から出土した軒丸瓦の破片で瓦当面には双鶴文が描かれている。210～212は7Q区から出土した寛永通寶である。

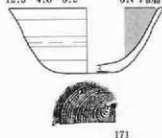
14.0・3.0・6.7 6N 1c層



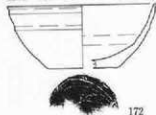
12.8・5.0・3.9 6N 1c層



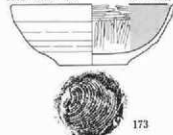
12.3・4.8・5.2 6N 1a層



12.0・5.5・8.1 6N 1層



13.2・5.5・4.9 6N 1a層



—・5.9・— 6N 1a層



14.1・5.4・4.2 6N 1c層



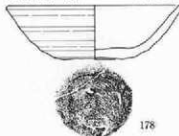
12.4・6.1・4.5 6N 1c層



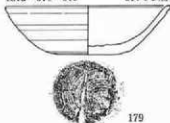
14.7・6.0・4.8 6N 1c層



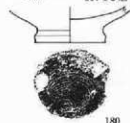
14.2・5.0・4.3 6N 1c層



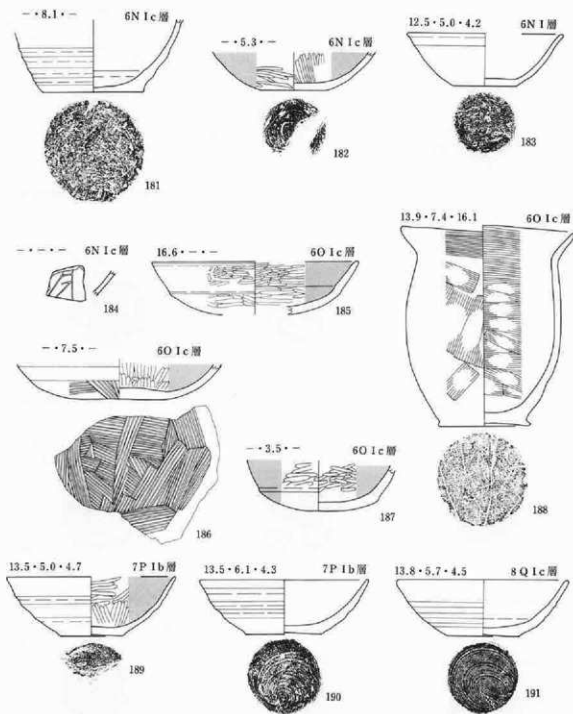
13.2・5.0・3.9 6N 1c層



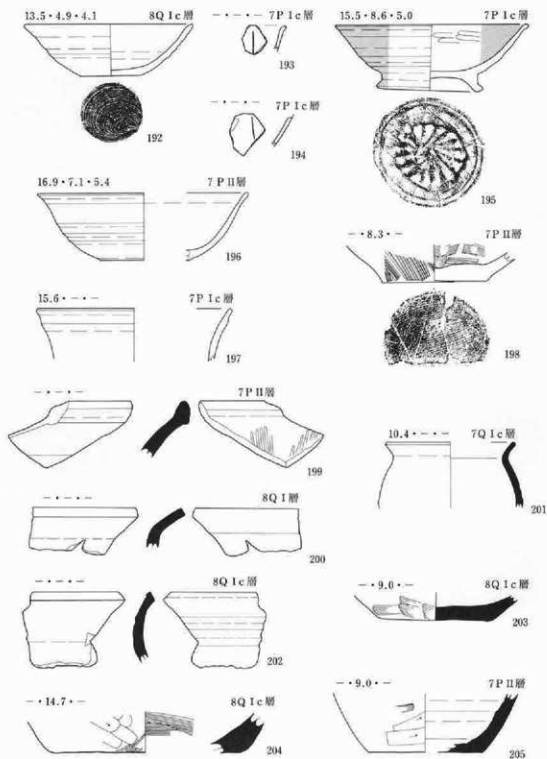
—・5.7・— 6N 1c層



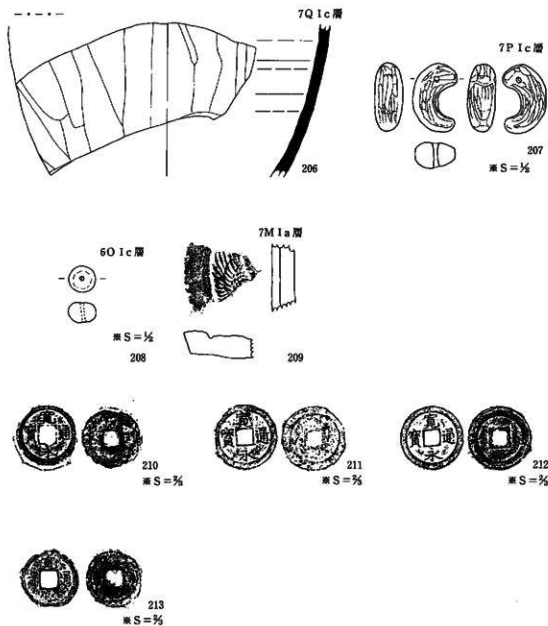
第56図 遺構外出土遺物 - 1



第57図 遺構外出土遺物-2



第58圖 遺構外出土遺物 - 3



第59圖 遺構外出土遺物 - 4

V. ま と め と 考 察

1. 出土した土師器・須恵器について

出土した遺物は総量で大コンテナ15箱である。きわめて細片で実測不能な破片を除き、反転実測可能なものはすべて図化し報告書に掲載した。この大半が奈良・平安時代の土師器・須恵器であり、それ以外のものはきわめて僅少である。したがって、この両時代の出土遺物を中心に述べ、可能なものについては器種・器形・調整技法による分類をおこなう。

① 土師器坏形土器

土師器坏形土器は出土遺物の中で最も個体数が多い。ロクロ不使用土器をⅠ類、ロクロ使用土器をⅡ類として大分類する。また、内外面の調整技法のうち黒色処理の有無によって、内面黒色処理の施されたものをa類、内外面とも黒色処理の施されたものをb類、無調整のものをc類として小分類した。Ⅰ類にはb類・c類のものは伴わない。また、その他の調整技法のうち底面に再調整のあるものに特にR類とした。このようにして分類した類型内での器形的な特徴はほぼ共通している。また、Ⅱ類に属するものの底部切り離しはすべて回転糸切りである。

土師器坏形土器Ⅰ類	ロクロ不使用のもの
土師器坏形土器Ⅱa類	ロクロ使用のうち内面黒色処理されたもの
土師器坏形土器Ⅱa-R類	上記のものうち、底面に再調整のあるもの
土師器坏形土器Ⅱb類	ロクロ使用のうち内外面とも黒色処理されたもの
土師器坏形土器Ⅱb-R類	上記のものうち、底面に再調整のあるもの
土師器坏形土器Ⅱc類	ロクロ使用のうち器面調整の施されていないもの

② 土師器高台付坏形土器

土師器高台付坏形土器は高台の剝離したものを含めて20点掲載している。すべてロクロ成形底部切り離しは回転糸切りによるものであるため、器面調整によって3分類した。

内面黒色処理されているものを1類、内外面とも黒色処理されているものを2類、ロクロ調整痕以外に再調整がなく黒色処理されていないものを3類とする。

土師器高台付坏形土器Ⅱa類	内面黒色処理されているもの
土師器高台付坏形土器Ⅱb類	内外面とも黒色処理されているもの
土師器高台付坏形土器Ⅱc類	器面調整の施されていないもの

③ 土師器変形土器

土師器変形土器もロクロ不使用土器をⅠ類、ロクロ使用土器をⅡ類として大分類する。また、器高もしくは口径によってS（小型）、M（中型）、L（大型）の3段階に区分する。ⅠM類における各土器は器形的な差異が著しい。

土師器壺形土器S類 器高が15cm未満または口径が12cm未満のもの

土師器壺形土器M類 器高が15cm以上30cm未満または口径が12cm以上20cm未満のもの

土師器壺形土器L類 器高が30cm以上または口径が20cm以上のもの

④ 土師器甗

RA03竪穴住居跡から1点(91)が出土している。無底式のものである。

⑤ 土師器鉢形土器

RA05竪穴住居跡から1点(102)が出土している。ロクロ使用成形、内面ミガキのち黒色処理を施している。

⑥ 須恵器杯形土器

RA02竪穴住居跡から1点(79)が出土している。口径に比べ器高が低く、いわゆる皿形を呈する。内面が研磨されており、硯に転用されたものと推定される。

⑦ 須恵器壺形土器

須恵器壺形土器は多数出土しているが、破片が多く、口縁から底部まで残存し、器高その他計測値を明らかにできるものは少ない。

⑧ 須恵器壺形土器

須恵器壺形土器は多数出土しているが、やはり破片が多く、口縁から底部まで残存し、器高その他計測値を明らかにできるものは少ない。

2. 土師器・須恵器の遺構別構成と年代

土師器・須恵器の出土した遺構についてその器種別分類を一覧表に示した。数値は接合・復元し、実測図を掲載した個体数である。このほかにも多数の破片が出土しているが、器形的な特徴はほぼ共通しており差異がなく、同時期のものと考えられる。遺構によって出土点数が少なく共伴関係が不明瞭なものもある。

土師器・須恵器の遺構別構成—I

遺 構	地区	土 師 器											須 恵 器		その他の遺物			時 代		
		平・高台平				壺Ⅰ類			壺Ⅱ類				甗	鉢	杯	壺	土製品		鉄製品	古 銭
		I	Ⅱa	Ⅱb	Ⅱc	S	M	L	S	M	L									
RA 01	7P		7		19		2	2							2	1		2		平 安
RA 02	7P		8	1	24	2	7	1		2				1	4			2		平 安
RA 03	7P						3	1					1							奈良
RA 04	6P	1				1														奈良
RA 05	7Q		1	2	6	1		1		1			1	2				1		平 安

土師器・須恵器の遺構別構成-2

遺 構	地区	土 師 器											須 恵 器				その他の遺物			時 代	
		坏・高台坏				要Ⅰ類			要Ⅱ類			甗	鉢	坏	甕	甕	土製品	鉄製品	古 銭		
		I	IIa	IIb	IIc	S	M	L	S	M	L										
RA 06	7Q		6		11		1														平 安
RA 07	7Q		1		3			1								1	1		1		平 安
RA 08	6N																				平 安
RA 09	6N																				平 安
RD 02	7P				1			1													平 安
RD 03	7P				2																平 安
RD 04	7P		1																		平 安
RD 05	7P	1				1		1													奈 良
RD 07	7P						5														奈 良
RD 12	6N				1																平 安
RG 05	6O													1							不 明
RG 08	6N		3	1	5	1															平 安
RG 09	6N						6														平 安
RG 12	7P						1														奈良以前
総計		2	27	4	72	6	25	8	0	3	0	1	2	1	9	2	1	5	0		

遺構外遺物の地区別出土状況

地 区	土 師 器											須 恵 器			その他の遺物			総 計	
	坏・高台坏				要Ⅰ類			要Ⅱ類			甗	鉢	坏	甕	土製品	鉄製品	古 銭		
	I	IIa	IIb	IIc	S	M	L	S	M	L									
6 N 区		3	2	10					1										16
6 O 区	3					1										1			5
7 M 区																1			1
7 P 区		1	3	2		1			1					1	1	1			11
7 Q 区														2					2
8 Q 区				2										4				4	10
総 計	3	4	5	14	0	2	0	0	2	0	0	0	0	7	1	3	0	4	45

3. 竪穴住居跡について

〈検出棟数と残存状況〉

9棟が検出・精査された。3棟はその大部分が調査範囲外にあり、精査ができたのは一部分である。住居跡の時代比定は遺物からおこなったが、形状・規模・柱穴配置・カマドなどから小区分が可能である。

〈形状・規模と柱穴配置〉

柱穴が検出された竪穴住居跡はRA01、RA02、RA03、RA05、RA08、RA09の6棟である。このうち、柱穴配置が確認できたのはRA01、RA02、RA05の3棟である。このうち、RA01、RA02はカマドの構築された南西壁の壁際に2個、隅から内側に入った位置に2個を掘り込んでおり、ほぼ正方形に近い配置を示す。また、どちらも壁際に掘り込まれた柱穴のうち、1個がカマドの袖と重なっており、隅から内側に入った位置のものは掘り方を伴う。

柱穴と床面積の関係をみると、床面積が20㎡以上の竪穴住居跡では柱穴を持ち、配置も明確である。また、20㎡に近いものは、配置は明確でないものの柱穴を確認できるが、18㎡以下のものは柱穴を伴わない。以上、4本柱を持つ竪穴住居跡と柱穴を持たない竪穴住居跡は、大体20㎡（一辺約4.5m）前後を境にしているとする他遺跡の報告例と矛盾しない。

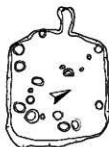
〈カマド〉

痕跡を含め、カマドを検出できた竪穴住居跡はRA01、RA02、RA03、RA05、RA06、RA07の6棟である。このうち、RA01、RA02、RA03、RA05の4棟では掘り込み式、RA06、RA07の2棟はくり抜き式である。カマドをもつ4棟のうちRA01、RA02は多数の石を組んでいる。カマドを構築してる壁はRA01、RA02、RA05が南西壁、RA03が北西壁、RA06、RA07が南西壁である。

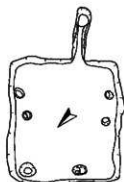
〈埋土と降下火山灰〉

埋土および床面に灰白色火山灰の含まれる竪穴住居跡はRA01、RA02、RA03、RA05、の4棟である。このうち、RA01、RA02竪穴住居跡は床面の全域と壁際に灰白色火山灰の堆積がみられる。堆積の様相はほぼ同様で、埋土上位には灰白色火山灰がふくまれず、床面と床面から壁際の中位にかけてである。RA05竪穴住居跡は床面・壁際のみならず埋土上位にも霜降りブロック状の堆積が見られ、前述の2棟と堆積の様相を異にする。RA03は検出面から埋土最上位に灰白色火山灰の小さいブロックを検出したのみである。他の竪穴住居跡には灰白色火山灰の堆積は見られない。これらは遺構の埋没の時間差を示すものであろう。

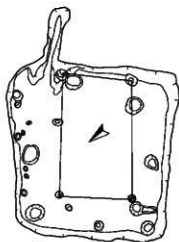
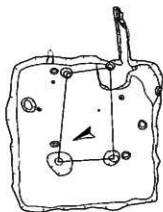
RA06、RA07竪穴住居跡には埋土に火山灰の堆積が見られないが、RA03竪穴住居跡の埋土上部には火山灰の堆積が見られることから類推すると、火山灰降下の時期よりもあとのものと推定される。これらから以下の細分が可能である。



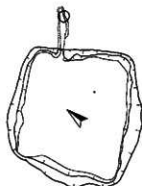
①奈良時代(RA01)



②平安時代Ⅰ-a (RA05)



平安時代Ⅰ-b (RA01、RA02)



平安時代Ⅱ (RA06、RA07)

第60図 竪穴住居跡の分類

① 奈良時代 RA03・RA04竪穴住居跡

埋土最上位に火山灰が入る場合がある。カマドは北東壁あるいは住居跡の北半に構築されている。

② 平安時代

I-a期 RA05竪穴住居跡

南東壁にカマドを構築しており、埋土上位に火山灰の埋積層。柱穴配置は不明である。

I-b期 RA01・RA02竪穴住居跡

南東壁に石で構築した掘り込み式カマドをもち、埋土下位・床面に火山灰の堆積層が見られる。柱穴配置は北側の床に2個、南側壁際に2個（カマド袖に1個）で配置も明確である。

II期 RA06・RA07竪穴住居跡

北東壁にくり抜き式のカマドを構築しており、埋土には火山灰を含まない。柱穴は検出されず、配置も不明である。また壁上部の崩落が著しい。

4. 掘立柱建物跡・柱穴列・土坑について

掘立柱建物跡は2棟が検出・精査された。RB01掘立柱建物跡は埋土に霜降りブロック状態の灰白色火山灰の堆積が見られる。この堆積の様相は先述した平安時代I-a期竪穴住居跡と同様で、埋没時期の同時性を示唆するものであろう。RA02掘立柱建物跡は出土遺物がなく、埋土の堆積状況からも時代を比定できないが、RA05竪穴住居跡とRB01掘立柱建物跡の位置関係から類推すると平安時代II期竪穴住居跡と同時存在の可能性が大きい。

柱穴列は3列が検出・精査されている。RC01柱穴列はRA01竪穴住居跡と重複し、これよりも新しいが時期決定資料に欠け、時代・時期とも不明である。RC02柱穴列は埋土に霜降りブロック状の灰白色火山灰の堆積が見られる。この堆積の様相は先述した平安時代I-a期竪穴住居跡、RB01掘立柱建物跡と同様で、やはり埋没時期の同時性を示唆している。RC03柱穴列はRB02掘立柱建物跡と重複し、これよりも古い出土遺物がなく、埋土の堆積状況からも時期は比定できない。

土坑は33基が検出・精査された。実測された出土遺物があるのは6基である。2基が奈良時代、4基が平安時代に比定される。出土遺物がない土坑については位置関係・埋土の堆積状況からは時期を比定できない。RD04・RD08土坑については埋土堆積の状況は人為的なものと推定され、墓墳の可能性も考えられる。

溝跡は12条が検出・精査された。RG01～RG04、RG06溝跡、RG11溝跡については検出面・埋土の堆積状況からは時代・時期を比定できない。RG07～RG10溝跡は形状・出土遺物から平安時代に属するものと推定されるが、竪穴住居跡の時期区分との比較資料はない。RG

12溝跡は出土遺物・重複関係から奈良時代以前に属する。

5. まとめ

(1) 奈良時代に属する遺構は竪穴住居跡2棟と土坑2基であるが、遺物が出土しておらず、時期不明とした7P区の土坑にもこの時代に属するものもあると思われる。また、遺物が出土している60区付近の調査区外にも遺構は存在するものと考えられる。

遺構から出土した土師器環形土器は内面は無段で、ミガキのち黒色処理を施しているが、外面は段を持ち丸底のものが主体である。土師器甕形土器は体部から口縁部にかけて段を持ち、口縁が外湾気味に外反するものが主体である。これらから8世紀前半のものと考えられる。

(2) 平安時代に属する遺構は竪穴住居跡7棟、掘立柱建物跡2棟、柱穴列1列、土坑3基であるが、やはり6N区、7P区にある遺物が出土しておらず、時期不明とした土坑のうちにも、この時代に属するものが多数あると考えられる。

遺構から出土した遺物は、基本的には須恵器環形土器は伴わず、土師器甕形土器はロクロ不使用のものが過半を占める。土師器環形土器・土師器高台付環形土器はすべてロクロ成形、底部切り離しは回転糸切りによるもので、器面調整の有無に係わらず器形は丸みをおび、口縁がやや外反する。底部再調整のものは僅少である。これらから9世紀後半から10世紀にかけてのものと考えられる。遺構は形状・規模・位置関係などからも3期に細分することが可能であるが、遺物はすべて9世紀後半から10世紀前半にかけての時期におさまる。

(3) 本宮熊堂B遺跡は琴石川によって形成された河岸段丘上に立地している。遺構の集中している今回の調査範囲の北半および東半は旧河道の自然堤防であった微高地上につくられた奈良・平安時代の集落跡であった。特に平安時代の遺構については、当該時期は9世紀初頭に設置された志波城・徳丹城が廃絶されて北上盆地の総括権が胆沢城に集約され、9世紀半ばの律令的な郡制の変容と相前後して在地首長層が台頭してきた時期であるとされており、その性格などは不明なところがある。今回の調査によって集落の存在は明らかになったが、その起源・性格などは再考すべき点が多い。今後、盛南開発事業の進展にともない埋蔵文化財包蔵地約60万㎡の調査が計画されている。土器分類・時期区分を含め遺跡の起源・性格などは比較資料の増加をまって今後の検討課題としたい。

本宮熊堂B遺跡出土土器観察表—1

No	遺 物	遺跡・地点・層位	種類・器名	器 面 調 査			底 部 再調査	計 測 値 : cm			備 考	分 類
				外 面	内 面	黒色処理		口 径	底 径	高 度		
1	RA 01	床 面	土器器・坪	なし	なし	なし	なし	13.1	5.1	4.9		IIc
2	#	#	#	なし	M	O	あり	—	5.5	—	黒 書	IIa
3	#	#	#	なし	なし	なし	なし	—	5.7	—		IIc
4	#	#	#	なし	M	O	なし	13.7	5.1	5.3		IIa
5	#	#	#	なし	なし	なし	—	14.8	—	—		IIc
6	#	#	#	なし	なし	なし	なし	14.1	6.8	4.0		IIa
7	#	#	#	なし	なし	なし	なし	12.7	4.8	5.3	黒 書	IIc
8	#	#	#	なし	なし	なし	なし	12.4	5.1	4.5	#	IIc
9	#	#	#	なし	なし	なし	なし	14.7	—	—		IIc
10	#	#	#	なし	なし	なし	なし	15.2	5.6	4.5		IIc
11	#	カマド	#	なし	なし	なし	なし	15.2	6.3	4.2		IIc
12	#	#	#	なし	なし	なし	なし	12.4	5.3	4.4		IIc
13	#	#	#	なし	M	O	—	15.8	—	—		IIa
14	#	#	#	なし	なし	なし	—	15.7	—	—		IIc
15	#	埋 土	#	なし	M	O	なし	—	4.0	—		IIa
16	#	#	#	なし	なし	なし	なし	13.8	5.4	3.5		IIc
17	#	#	#	なし	なし	なし	なし	13.5	5.5	4.7		IIc
18	#	#	#	なし	なし	なし	なし	13.8	6.0	5.0		IIc
19	#	#	#	なし	なし	なし	なし	13.9	5.6	4.7		IIc
20	#	#	#	なし	なし	なし	—	11.0	—	—		IIc
21	#	#	#	—	なし	なし	なし	—	—	—		IIc
22	#	#	#	—	なし	なし	なし	—	—	—		IIc
23	#	#	#	なし	なし	なし	なし	—	5.6	—		IIc
24	#	#	#	なし	なし	なし	なし	—	5.0	—		IIc
25	#	#	#	なし	M	O	なし	—	5.1	—		IIa
26	#	#	#	なし	M	O	なし	—	7.2	—	黒部へた面付状	IIa
26	RA 02	床	#	なし	なし	なし		14.0	5.3	4.0		IIc
37	#	#	#	なし	なし	なし		14.2	6.8	4.9		IIc
38	#	#	#	なし	なし	なし		13.8	6.0	5.0		IIc
39	#	#	#	なし	M	O		14.0	6.0	4.9		IIa
40	#	#	#	なし	なし	なし		15.2	3.5	4.7		IIc
41	#	#	土器器・高倉付坪	なし	なし	なし		15.2	6.1	6.1		IIc
42	#	#	#	なし	なし	O		12.5	7.0	4.8		IIa
43	#	#	土器器・坪	なし	M	O		14.2	5.8	4.5		IIa
44	#	#	#	なし	M	O		14.7	6.2	6.0		IIa
45	#	#	#	なし	なし	なし		14.7	5.5	5.1		IIc
46	#	カマド	#	なし	なし	なし		14.7	5.7	4.0		IIc
47	#	床	#	なし	なし	なし		14.0	4.7	4.3		IIc
48	#	#	#	なし	なし	なし		14.0	—	—		IIc
49	#	#	#	なし	なし	なし		12.1	—	—		IIc

本宮熊堂B遺跡出土土器観察表-2

No	遺 物	遺物・地点・相位	産 類・西 暦	形 容 調 査			底 部 再調査	計 測 値 : cm			備 考	分 類
				外 面	内 面	黒色処理		口 径	底 径	器 高		
50	RA 02	床 面	土器器・環	なし	なし	なし		—	4.9	—		IIc
51	#	#	#	なし	なし	なし		14.5	—	—	墨 書	IIc
52	#	#	#	なし	M	O		13.0	—	—		IIa
53	#	#	#	なし	なし	なし		—	4.9	—		IIc
54	#	カマド	#	なし	なし	なし		—	5.6	—		IIc
55	#	床 面	#	なし	なし	なし		—	5.4	—		IIc
56	#	#	#	なし	M	O		—	6.6	—		IIa
57	#	#	#	なし	なし	なし		—	6.0	—		IIc
58	#	#	#	なし	なし	なし		—	5.6	—		IIc
59	#	#	#	なし	なし	なし		—	6.0	—		IIc
60	#	#	土器器・高台付環	なし	なし	なし		—	8.6	—		IIc
61	#	#	#	なし	なし	なし		—	7.9	—		IIc
62	#	#	#	なし	なし	なし		—	9.6	—		IIc
63	#	#	#	O	M	O		—	8.0	—		IIb
70	#	カマド	土器器・環	なし	M	O		14.1	6.3	4.1		IIa
75	#	埋 土	#	なし	なし	なし		13.9	5.8	4.5		IIc
76	#	#	#	なし	なし	なし		14.8	—	—		IIc
77	#	#	#	なし	M	O		13.7	5.0	4.8		IIa
78	#	#	#	なし	なし	なし		13.3	6.4	4.2		IIc
79	#	#	土器器・環	なし	なし	なし		12.1	5.3	2.6		—
93	RA 04	#	土器器・環	O	M	O		15.0	5.7	4.2	新 良	I
95	#	埋 土	#	なし	なし	なし		14.9	5.6	5.5		IIc
96	#	#	#	なし	M	O		14.6	5.9	4.0		IIa
97	#	カマド	土器器・高台付環	O	M	O		15.5	7.2	6.0		IIb
98	#	床 面	#	なし	なし	なし		15.7	8.4	6.3		IIc
99	#	#	#	なし	なし	なし		16.6	8.2	6.4		IIc
100	#	埋 土	土器器・環	O	M	O		—	—	—		IIb
106	RA 05	床 面	#	なし	なし	なし		14.0	5.4	4.6		IIc
109	#	#	#	なし	なし	なし		14.4	5.5	5.2		IIc
110	#	カマド	#	なし	なし	なし		14.4	5.4	4.8		IIc
111	RA 06	床 面	#	なし	なし	なし		12.9	5.0	4.3		IIc
112	#	#	#	なし	M	O		13.0	5.4	4.2		IIa
113	#	#	#	なし	M	O		13.0	5.0	3.6		IIc
114	#	#	#	なし	なし	なし		13.0	5.0	3.4		IIc
115	#	#	#	なし	M	O		13.5	5.7	4.1		IIa
116	#	#	#	なし	なし	なし		13.9	6.2	4.1		IIc
117	#	#	#	なし	M	O		15.2	5.2	5.8		IIa
118	#	#	#	なし	M	O		—	6.2	—		IIa
119	#	カマド	#	なし	なし	なし		13.1	4.9	3.7		IIc
120	#	埋 土	#	なし	なし	なし		13.3	4.7	5.0		IIc

本宮熊堂B遺跡出土埴形土器観察表- 3

No.	遺 構	遺構・地点・層位	器 類・器 種	器 面 調 査			底 部 再調査	計 測 値 : cm			備 考	分 類
				外 面	内 面	黒色処理		口 径	底 径	器 高		
121	RA 06	カマド	土師器・平	なし	なし	なし		13.5	5.6	3.8		IIc
122	#	床	#	なし	なし	なし		13.0	5.6	3.8		IIc
123	#	カマド	#	なし	M	O		15.2	8.6	4.7		IIa
124	#	#	#	なし	なし	なし		—	5.1	—		IIc
125	#	#	#	なし	M	O		—	5.4	—		IIa
127	#	埴 土	#	なし	なし	なし		—	5.3	—		IIc
128	#	#	土師器・高台付埴	なし	なし	なし		13.7	5.8	4.5	高台部割断	IIc
129	RA 07	床	土師器・平	なし	なし	なし		13.7	5.3	4.7		IIc
130	#	カマド	#	なし	M	O		13.9	5.0	3.5		IIa
131	#	#	#	なし	なし	なし		12.6	5.4	3.5		IIc
132	#	埴 土	#	なし	なし	なし		13.4	—	—		IIc
138	RD 02	埴 土	#	なし	なし	なし		—	4.4	—		IIc
139	RD 03	埴 土	#	なし	なし	なし		15.4	6.4	4.8		IIc
140	#	#	#	なし	なし	なし		14.4	6.0	4.6		IIc
141	RD 04	蓋 函	#	なし	M	O		13.7	4.9	4.7		IIa
143	RD 05	埴 土	#	なし	M	O		11.6	—	—	奈良	I
150	RD 12	埴 土	#	なし	なし	なし		12.7	3.9	4.9		IIc
152	RG 04	底 面	#	なし	M	O		12.7	4.5	4.5		IIa
153	RG 08	#	#	なし	なし	なし		13.0	5.0	4.5		IIc
154	#	#	土師器・高台付埴	なし	なし	なし		14.0	—	—		IIc
155	#	#	#	O	M	O	O	13.5	5.3	4.1		IIb-R
156	#	#	#	なし	M	O		12.8	5.0	5.1		IIa
157	#	#	#	なし	M	O		—	4.9	—		IIa
158	#	#	#	なし	なし	なし		10.7	—	—		IIc
159	#	#	#	なし	なし	なし		12.5	5.6	3.8		IIc
160	#	#	#	なし	なし	なし		12.6	5.1	3.8		IIc
169	遺構外	6N1c層	#	なし	なし	なし		14.0	3.0	6.7		IIc
170	#	#	#	なし	M	O		12.8	5.0	3.9		IIa
171	#	6N1a層	#	なし	なし	O		12.3	4.8	5.2		IIa
172	#	6N1層	#	なし	なし	なし		12.0	5.5	5.1		IIc
173	#	6N1a層	#	なし	M	O		13.2	5.5	4.9		IIa
174	#	#	#	なし	なし	なし		—	5.9	—		IIc
175	#	6N1c層	#	なし	なし	なし		14.1	5.4	4.2		IIc
176	#	#	#	なし	なし	なし		12.4	6.1	4.5		IIc
177	#	#	#	なし	なし	なし		14.7	6.0	4.8		IIc
178	#	#	#	なし	なし	なし		14.2	5.0	4.3		IIc
179	#	#	#	なし	なし	なし		13.2	5.0	3.9		IIc
180	#	#	#	なし	なし	なし		—	5.7	—		IIc
182	#	6N1層	#	O	M	O		—	5.3	—		IIb
183	#	6N1層	#	なし	なし	なし		12.5	5.0	4.2		IIc

本宮熊堂B遺跡出土土器観察表-4

No.	遺構	遺構・地点・層位	種類・器種	外面調整			底部	計測値:cm			備考	分類
				外面	内面	着色処理		口徑	底徑	器高		
184	遺構外	6N1c層	土師器・高台付杯	O	M	O		—	—	—		IIb
185	#	#	土師器・杯	なし	M	O		16.6	—	—		I
186	#	#	#	なし	M	O		—	7.5	—		I
187	#	#	#	O	M	O		—	3.5	—		I
188	#	7P1b層	#	なし	M	O		13.5	5.0	4.7		IIa
189	#	#	#	なし	なし	なし		13.5	6.1	4.3		IIc
191	#	8Q1c層	#	なし	なし	なし		13.8	5.7	4.5		IIc
192	#	#	#	なし	なし	なし		13.5	4.9	4.1		IIc
193	#	7P1c層	#	O	M	O		—	—	—		IIb
194	#	#	#	O	M	O		—	—	—		IIb
195	#	#	土師器・高台付杯	O	M	O		15.5	8.6	5.0		IIb
196	#	7P1層	土師器・杯	なし	なし	なし		16.9	7.1	5.4		IIc

本宮熊堂B遺跡出土土器観察表-1

No.	遺構	遺構・地点・層位	種類・器種	外面調整			内面調整	底部	計測値:cm			備考	分類
				口縁	体上	体下			口徑	底徑	器高		
27	RA 01	カマド	土師器・甕	ナデ	ハケメ	—	ハケメ	—	21.2	—	—		(1L)
28	#	埋土	#	なし	ケズリ	—	ナデ	—	14.4	—	—		(1M)
29	#	#	#	なし	ケズリ	—	ナデ	—	20.9	—	—		(1L)
30	#	#	#	ナデ	ケズリ	—	ハケメ	—	13.1	—	—		(1M)
31	#	#	須恵器・甕	—	なし	—	なし	—	—	—	—		
32	#	#	#・甕	—	なし	—	なし	—	—	—	—		
33	#	床面	#・甕	なし	タタキ	—	—	—	—	—	—		
64	RA 02	#	#	—	—	ヘラズリ ヘラズリ	ハケメ	なし	—	16.0	—		
65	#	#	土師器・甕	—	—	ヘラズリ	ヘラナデ	木蓋版	—	8.1	—		(1S)
66	#	#	#	—	—	ヘラズリ	ヘラズリ	なし	—	7.9	—		(1M)
67	#	煙道	#	ヨコナデ	ヘラズリ	ヘラズリ	ヨコナデ ヘラナデ	木蓋版	6.6	6.6	6.6		1S
68	#	床面	#	—	—	ヘラズリ ヘラナデ	ヘラナデ	#	—	9.2	—		(1M)
69	#	カマド	須恵器・甕	なし	なし	なし	ヨコナデ ヘラナデ	精緻な体	11.8	6.4	12.3		
71	#	#	土師器・甕	ヨコナデ	ヘラズリ	—	ヨコナデ ヘラナデ	—	19.0	—	—		(1M)
72	#	床面	#	—	—	ヘラナデ	ヘラナデ	木蓋版	—	11.3	—		(1M)
73	#	カマド	#	なし	なし	—	ヨコナデ ヘラナデ	—	11.8	—	—		1S
74	#	#	#	—	—	ヘラズリ	なし	なし	—	10.1	—		(1M)
80	#	埋土	#	なし	ヘラズリ	—	ヘラナデ	—	16.4	—	—		IIb
81	#	#	#	なし	なし	—	ヘラナデ ヨコナデ	—	17.6	—	—		(1M)
82	#	#	#	—	—	ヘラズリ	ヘラナデ	なし	—	10.4	—		(1L)
83	#	#	#	—	—	ヘラズリ	ヘラナデ	木蓋版	—	10.2	—		1M
84	#	床面	須恵器・甕	なし	タタキ	なし	なし	—	—	—	—		
85	#	#	#	—	—	タタキ	タタキ	—	—	—	—		
88	RA 03	埋土	土師器・甕	ヨコナデ	ハケメ	—	ヨコナデ	—	19.0	—	—		1M

本宮熊堂B遺跡出土瓦形土器観察表—2

No	遺 構	遺構・地点・層位	種類・部 位	外 面 調 整			内 面 調 整	底 部	計 測 値 : cm			備考	分 類
				口 縁	体 上	体 下			口 径	底 径	器 高		
89	RA 03	床 面	土師器・甕	—	—	ハケメ	ヘラナデ	—	—	7.6	—		IM
90	#	#	#	なし	—	ハケメ	なし	なし	—	7.3	—		(IM)
91	#	埋 土	土師器・甕	ヨコナデ	ヘラミダキ	ヘラミダキ	ヨコナデ	—	16.2	8.5	12.8		—
92	#	カマド	#・甕	—	ケズリ	—	なし	—	—	—	—		(IL)
94	RA 04	埋 土	#	なし	なし	ハケメ	—	木炭痕	—	6.8	—		(IS)
101	RA 05	カマド	#	ヨコナデ	なし	ヘラナデ	ハケメ	ハケメ	12.9	8.3	12.4		IS
102	#	床面	土師器・鉢	なし	なし	ケズリ	ヘラミダキ	なし	20.3	6.4	15.9	内底	—
103	#	カマド	#・甕	ヨコナデ	なし	ヘラナデ	—	—	19.7	—	—		IL
104	#	#	#	なし	なし	—	—	—	13.6	—	—		(IS)
105	#	埋 土	#	—	—	ヘラナデ	ヘラミダキ	なし	—	11.9	—		(IL)
106	#	床 面	須恵器・甕	—	タタキメ	—	タタキメ	—	—	—	—		—
108	RA 06	#	土師器・甕	—	—	ヘラナデ	ヘラナデ	なし	—	7.9	—		(IM)
133	RA 07	#	須恵器・甕	—	—	ヘラナデ	ヨコナデ	なし	—	10.6	—	高台	—
134	#	#	#・甕	なし	—	—	—	—	—	—	—		—
135	#	埋 土	土師器・甕	—	ヘラナデ	—	ヘラナデ	—	—	—	—		(IL)
137	RD 02	埋 土	土師器・甕	ナデ	ヘラナデ	ヘラナデ	ヘラナデ	木炭痕	17.7	10.8	33.9		IL
142	RD 05	#	#	なし	ハケメ	—	なし	—	—	—	—		(IL)
144	#	底 面	#	—	—	ハケメ	ヘラナデ	木炭痕	—	7.9	—		(IS)
145	RD 07	#	#	—	—	ヘラミダキ	ヘラナデ	#	—	6.6	—		(IM)
146	#	#	#	なし	ヘラナデ	—	ヘラナデ	—	14.2	—	—		(IM)
147	#	#	#	—	—	ハケメ	ハケメ	木炭痕	—	9.2	—		(IM)
148	#	#	#	なし	ヘラナデ	—	ヘラナデ	—	21.1	—	—		(IM)
149	#	#	#	なし	ハケメ	—	ヘラナデ	—	17.9	—	—		(IM)
151	RG 04	埋 土	#	ヘラミダキ	なし	なし	ヘラミダキ	—	24.0	—	—	内底	—
181	RG 08	底 面	#	ヨコナデ	なし	なし	ヘラナデ	—	7.2	—	—	片口	IS
182	RG 09	#	#	ヨコナデ	ハケメ	—	ヨコナデ	—	13.5	—	—		(IM)
183	#	#	#	ヨコナデ	ハケメ	—	ヨコナデ	—	17.2	—	—		(IM)
184	#	#	#	—	ハケメ	ハケメ	ハケメ	木炭痕	—	10.8	—		(IM)
185	#	#	#	ヨコナデ	ナデ	—	ハケメ	—	—	9.0	—		(IM)
186	#	#	#	—	—	ハケメ	ハケメ	木炭痕	—	8.5	—		(IM)
187	#	#	#	ヨコナデ	ハケメ	—	ハケメ	—	—	—	—		(IM)
188	RG 12	#	#	—	—	ハケメ	なし	木炭痕	—	8.5	—		(IM)
189	追跡外	6N1c層	#	—	—	なし	なし	目録未明?	—	8.1	—		(IM)
189	#	6O1c層	#	ヨコナデ	ヘラナデ	ヘラナデ	ヘラナデ	木炭痕	13.9	7.4	16.1		IM
197	#	7P1c層	#	なし	なし	—	なし	—	15.6	—	—		(IM)
198	#	7P11層	#	なし	なし	ハケメ	ヘラナデ	ハケメ	—	8.3	—		(IM)
199	#	#	須恵器・甕	なし	なし	—	ヘラミダキ	—	—	—	—		—
200	#	8Q1c層	#	なし	なし	—	なし	—	—	—	—		—
201	#	7Q1c層	#・甕	なし	なし	—	なし	—	10.4	—	—		—
202	#	8Q1c層	#・甕	なし	なし	—	なし	—	—	—	—		—

本宮熊堂B遺跡出土甕彩土器観察表-3

No	遺構	遺構・地点・層位	種類・器種	外面調整			内面調整	底部	計測値: cm			備考	分類
				口縁	体上	体下			口縁	底径	器高		
233	遺構外	8C1c層	須恵器・甕	—	—	ヘラナデ	なし	—	—	9.0	—		IL
234	#	8Q1c層	#	—	—	ヘラナズリ タテナズリ	ハケメ		—	14.7	—		
235	#	7P1f層	須恵器・甕	—	—	ヘラナズリ ヘラナデ	なし		—	9.0	—		
236	#	7Q1c層	#・甕	—	—	タテナズリ	なし	—	—	—	—		

本宮熊堂B遺跡出土土製品観察表

No	遺構	遺構・地点・層位	種類・器種	計測値: cm			重量: g	備考
				長さ	幅	厚さ		
136	RA 07	床 面	土 師	4.1	1.7	1.7	11.59	S=1/4
207	遺構外	7P1c層	勾 玉	2.5	2.2	1.3	9.41	S=1/4
208	#	6O1c層	土 玉	1.5	1.3	0.9	2.15	S=1/4
209	#	7M1a層	研丸瓦	—	—	1.7	54.2	近 世

本宮熊堂B遺跡出土鉄製品観察表

No	遺構	遺構・地点・層位	種類・器種	計測値: cm			重量: g	備考
				長さ	幅	厚さ		
34	RA 01	床 面	刀 子	10.5	1.9	0.2	8.5	
35	#	#	鉄細車	15.5	4.1	0.4	13.51	
86	RA 02	#	釘	5.5	1.0	0.5	10.88	
87	#	#	刀 子	5.5	1.1	0.3	4.69	
110	RA 05	#	鍔 先	11.4	14.5	1.0	97.74	

本宮熊堂B遺跡出土古銭観察表

No	遺構	遺構・地点・層位	銘	直径: cm	重量: g	備考
210	遺構外	7 IIQ	寛永通寶	2.3	1.56	
211	#	#	#	2.5	2.36	
212	#	#	#	2.4	3.09	
213	#	#	#	2.3	7.37	3枚検出

写 真 图 版



遺跡遠景



調査区全景

写真図版Ⅰ 遺跡全景（空中写真）



基本層序-1

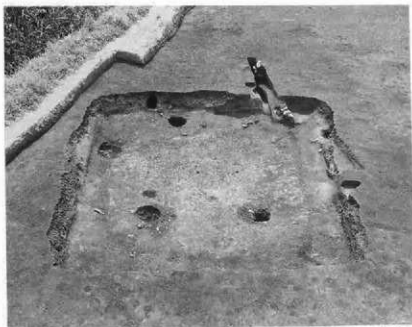


基本層序-2



基本層序-3

写真図版2 基本層序1、2、3



R A 01 竪穴住居跡 完掘平面



断面 A - B



断面 C - D



煙道部断面



カマド検出

写真図版 3 R A 01 竪穴住居跡



R A 02 竪穴住居跡完掘平面



断面 A-B



カマド断面 1



カマド断面 2



遺物出土状況



煙出し

写真図版 4 R A 02 竪穴住居跡



R A 03竪穴住居跡完攝平面



断面C-D



断面A-B



カマド断面



煙道部断面



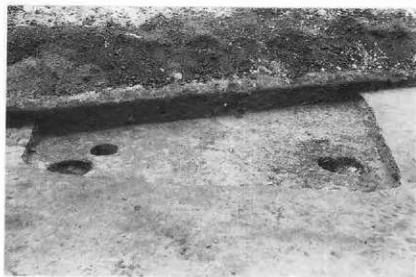
遺物出土状況



遺物出土状況

写真図版 5 R A 03竪穴住居跡

埋土断面 C-D



R A 04 竪穴住居跡 完掘平面



埋土断面 A-B



掘り方

写真図版 6 R A 04 竪穴住居跡

埋土断面C-D



R A 05 竪穴住居跡完掘平面



埋土断面A-B



カマド検出



煙道部断面

写真図版 7 R A 05 竪穴住居跡



R A 06竪穴住居跡完掘平面



埋土断面A-B



煙道部断面



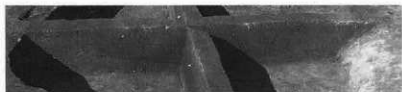
煙出し部断面

写真図版 8 R A 06竪穴住居跡

埋土断面C-D



R A 07 竪穴住居跡 完掘平面



埋土断面A-B



燻出し部断面



燻道部断面



R A 08 竪穴住居跡 完掘平面・断面

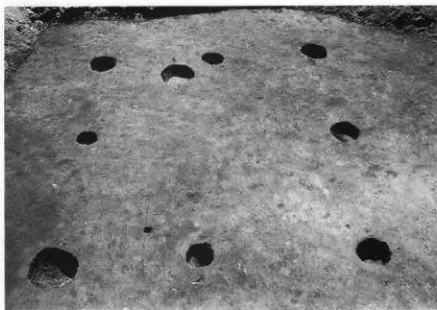


R A 09 竪穴住居跡 完掘平面

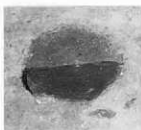


断面

写真図版10 R A 08・09 竪穴住居跡



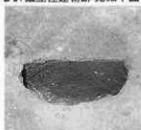
R B 01 掘立柱建物跡 発掘平面



柱穴断面 1



柱穴断面 2



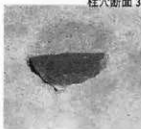
柱穴断面 3



柱穴断面 4



柱穴断面 5



柱穴断面 6



柱穴断面 7



柱穴断面 8



柱穴断面 9

写真図版 11 R B 01 掘立柱建物跡



R B 02掘立柱建物跡完掘



柱穴断面 1



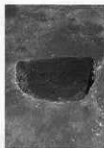
柱穴断面 2



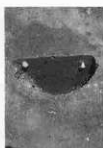
柱穴断面 3



柱穴断面 4



柱穴断面 5



柱穴断面 6



柱穴断面 7

写真図版12 R B 02掘立柱建物跡



R C 01 柱穴列 横出



柱穴断面 1



柱穴断面 2



R C 02 柱穴列 完掘



柱穴断面 1



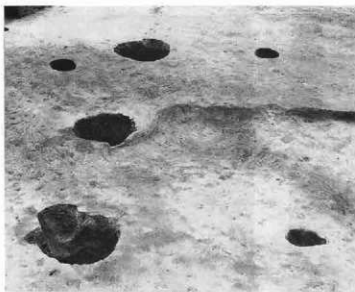
柱穴断面 2



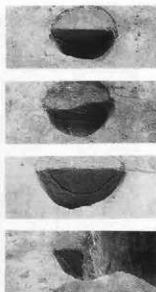
柱穴断面 3



柱穴断面 4



R C 03柱穴列 完攝



柱穴断面



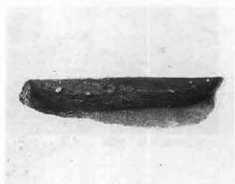
R D 01土坑 検出



完攝



R D 02土坑 完攝



R D 02土坑 断面

写真図版14 R C 03柱穴列, R D 01・02土坑



R D 03土坑 完掘



埋土断面



R D 04土坑 完掘



埋土断面



R D 05土坑 完掘



埋土断面



R D 06土坑 完掘



埋土断面

写真図版15 R D 03・04・05・06土坑



R D07土坑完掘



埋土断面



R D08土坑 完掘



埋土断面



R D09土坑 完掘



埋土断面



R D10土坑 完掘



埋土断面

写真図版16 R D07・08・09・10土坑



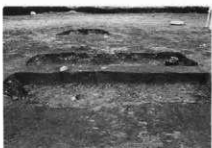
R D11土坑 完掘



埋土断面



R D12土坑 完掘



埋土断面



R D13土坑 完掘



埋土断面



R D14土坑 完掘



埋土断面

写真図版17 R D11・12・13・14土坑



R D 15土坑 完掘



埋土断面



R D 16土坑 完掘



埋土断面



R D 17土坑 完掘



埋土断面

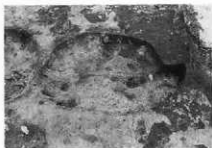


R D 18土坑 完掘



埋土断面

写真図版18 R D 15・16・17・18土坑



R D 19土坑 完掘



埋土断面



R D 20土坑 完掘



埋土断面



R D 21土坑 完掘



埋土断面



R D 22土坑 完掘



埋土断面

写真図版19 R D 19・20・21・22土坑



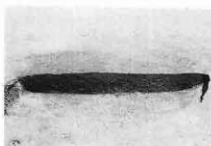
R D 23土坑 完掘



埋土断面



R D 24土坑 完掘



埋土断面



R D 25土坑 完掘



埋土断面



R D 26土坑 完掘



埋土断面

写真図版20 R D 23・24・25・26土坑



R D 27土坑 完掘



埋土断面



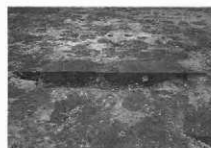
R D 28土坑 完掘



埋土断面



R D 29土坑 完掘



埋土断面



R D 30土坑 完掘



埋土断面

写真図版21 R D 27・28・29・30土坑



R D31土坑 完掘



埋土断面



R D32土坑 完掘



埋土断面



R D33土坑 完掘



埋土断面



R G01溝跡 完撮



R G02溝跡 完撮



R G03溝跡 完撮



R G04溝跡 完撮

写真図版23 R G01・02・03・04溝跡



R G 05溝跡 完掘



R G 06溝跡 完掘



R G 07溝跡 完掘(東半)



R G 08溝跡 完掘(東半)



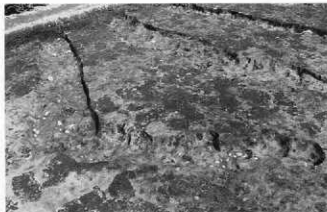
R G 07溝跡 発掘(西半)



R G 08溝跡 発掘(西半)



R G 09溝跡 発掘



R G 10溝跡 発掘



R G08・09 溝跡遺物出土状況



R G08 溝跡遺物出土状況



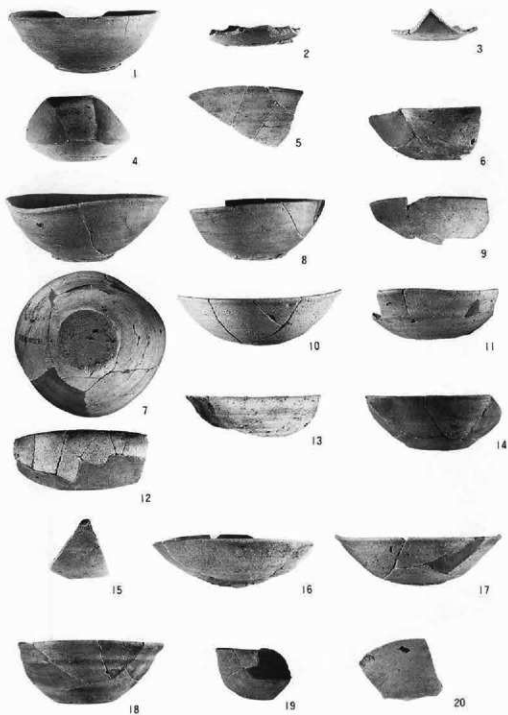
R G09 溝跡遺物出土状況



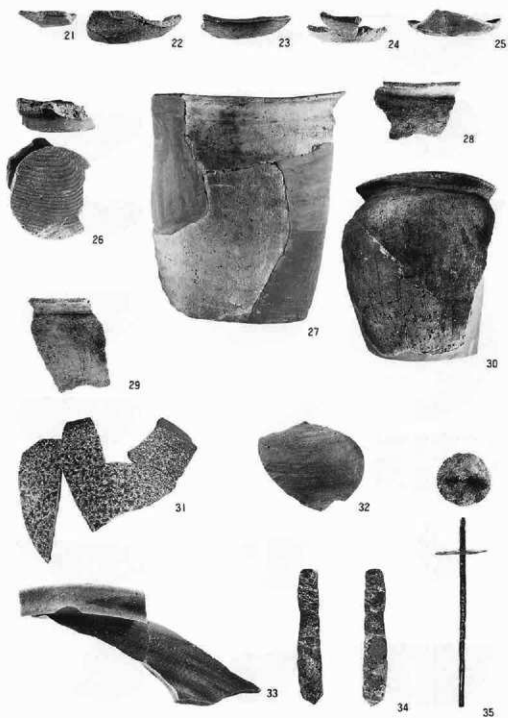
R G11 溝跡 完掘



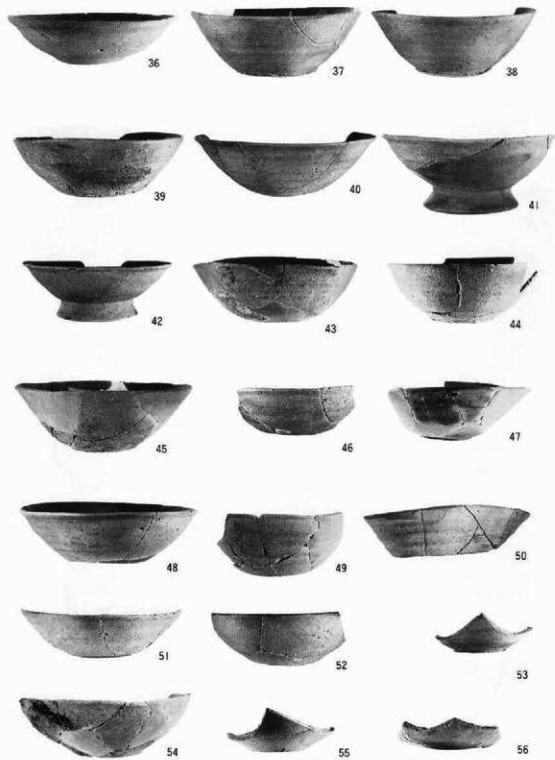
R G12 溝跡 完掘



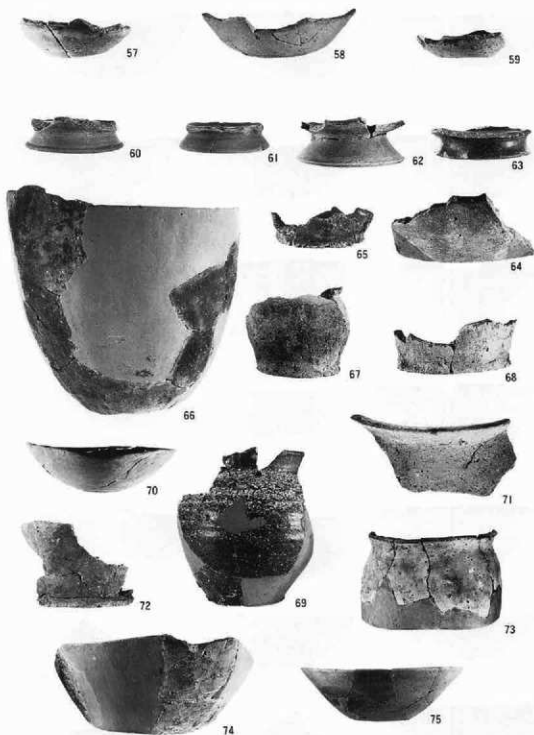
写真図版27 遺構内出土遺物 - 1



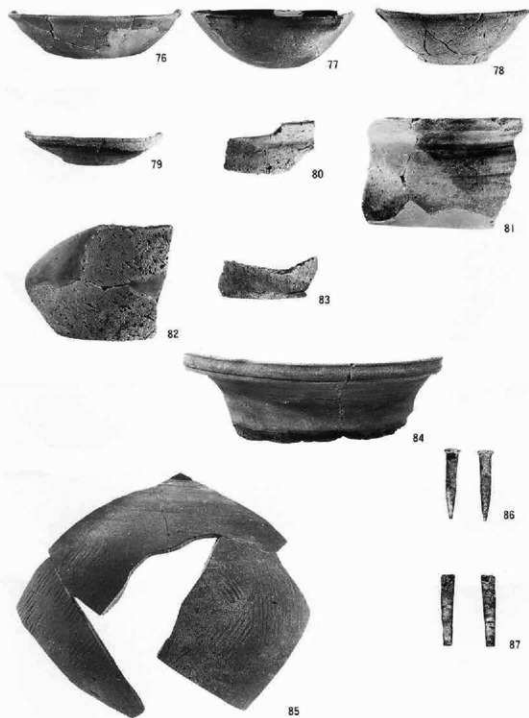
写真図版28 遺構内出土遺物-2



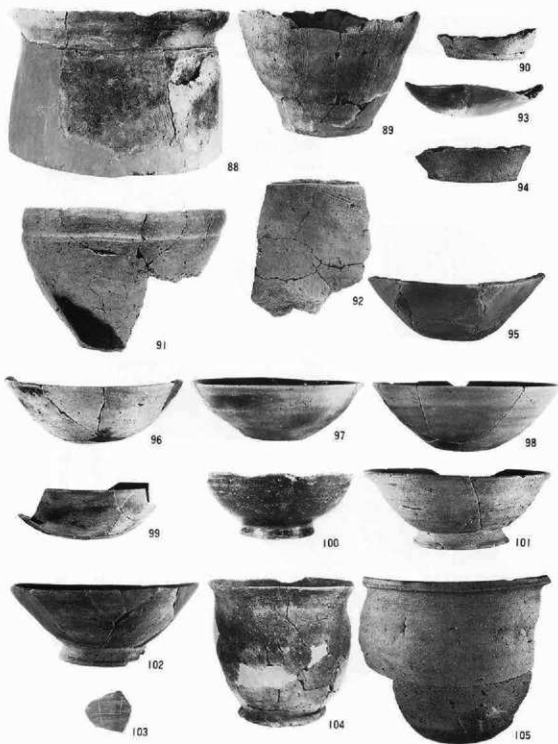
写真図版29 遺構内出土遺物-3



写真図版30 遺構内出土遺物-4



写真図版31 遺構内出土遺物-5



写真図版32 遺構内出土遺物-6



106



107



108

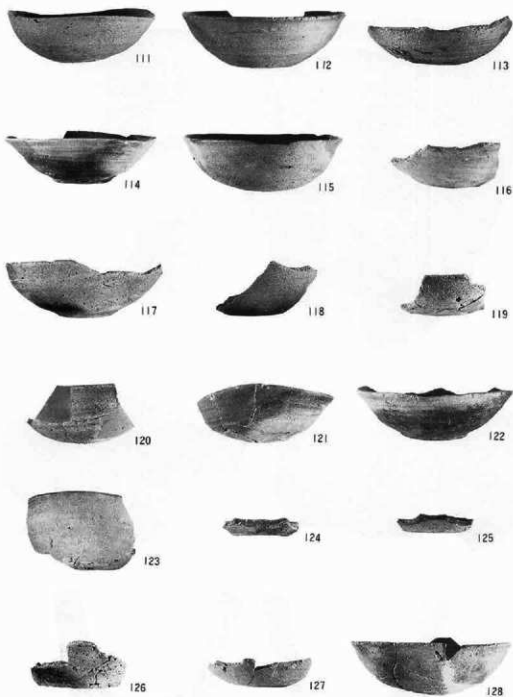


109

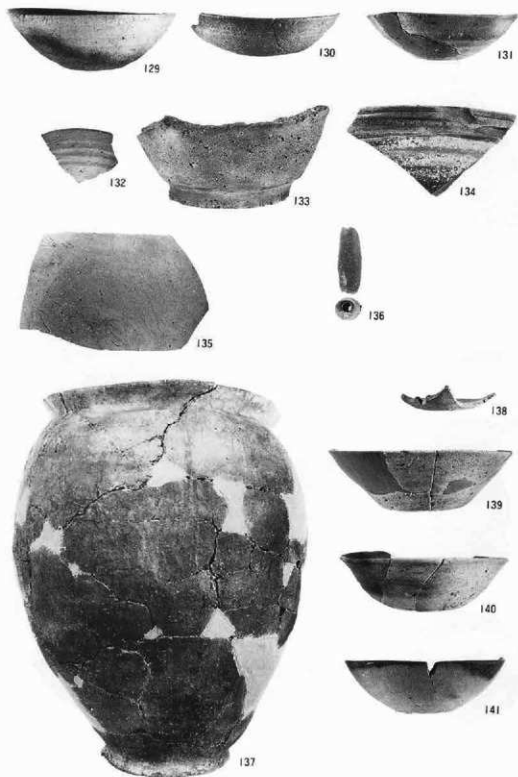


110

写真図版33 遺構内出土遺物-7



写真図版34 遺構内出土遺物—8



写真図版35 遺構内出土遺物-9



142



143



144



145



146



147



148



149



150



151

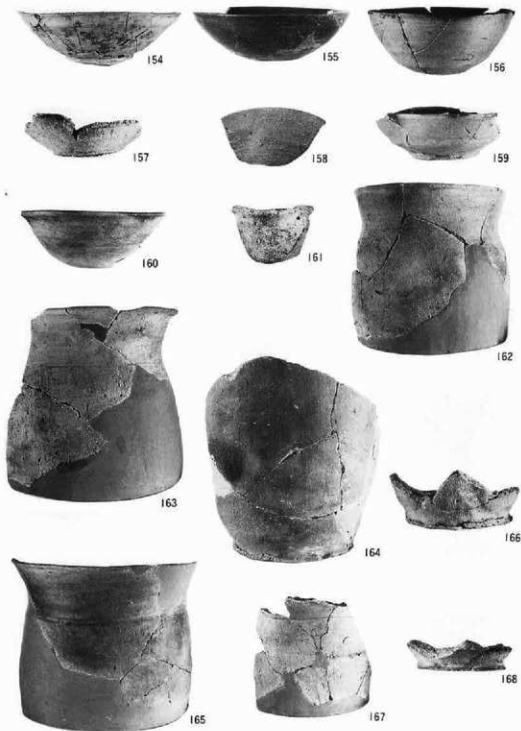


152

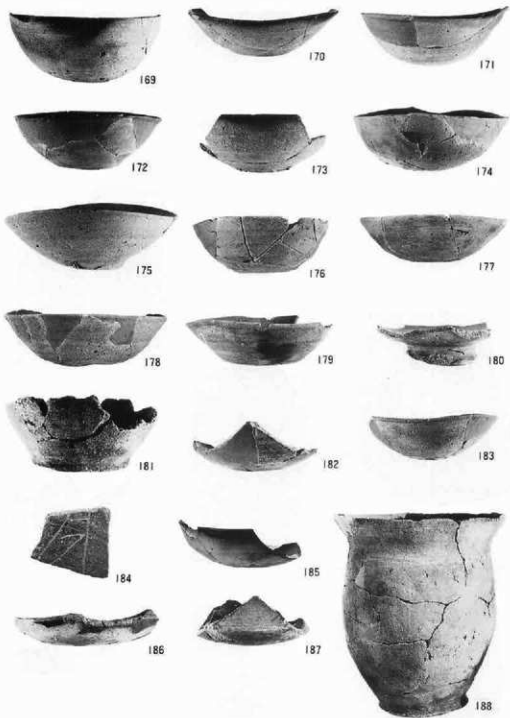


153

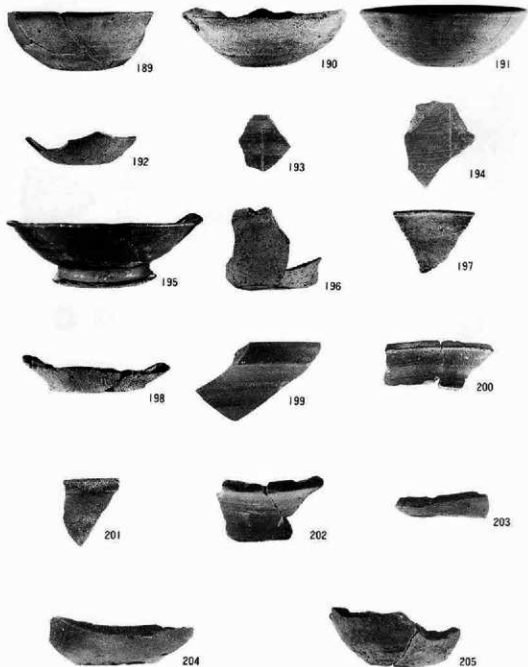
写真図版36 遺構内出土遺物-10



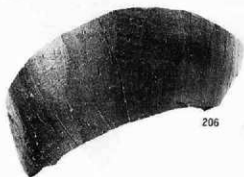
写真図版37 遺構内出土遺物-11



写真図版38 遺構外出土遺物一



写真図版39 遺構外出土遺物-2



206



207



208



209



210



211



212



213

財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター職員

所 長	高 橋 重 實				
副 所 長	千 葉 政 男				
〔管 理 課〕					
管理課長	澤 田 寛	囀 託	吉 田 十 次		
主 事	佐 藤 理	〃	野 崎 他 夫		
〃	久保田 幸 恵				
〔調 査 課〕					
調査課長	鈴 木 恵 治	文 化 財	金 子 昭 彦		
課長補佐	三 浦 謙 一	専門調査員	木 戸 口 俊 子		
〃	高橋 興右衛門	〃	大 道 篤 史		
主任文化財	菊 池 強 一	〃	大 阿 部 勝 則		
専門調査員	渡 辺 洋 一	〃	星 羽 榮 直 之		
〃	工 藤 利 幸	〃	羽 柴 直 人		
〃	中 川 重 紀	〃	高 木 晃 拓		
〃	佐々木 清 文	〃	村 上 橋 知 子		
〃	高 橋 義 俊	〃	高 杉 沢 昭 太 郎		
〃	中 井 英 孝	〃	溜 田 浩 二 郎		
文 化 財	酒 千 葉 孝 雄	期 限 付	鎌 田 精 造		
専門調査員	菊 池 人 見 格	専門職員	柳 高 橋 英 樹		
〃	伊 東 充 格	〃	高 佐 藤 修 一		
〃	吉 田 邦 雄	〃	佐 根 聖 宏		
〃	斎 藤 一 浩	〃	稲 田 烟 博 弘		
〃	高 鎌 田 勉	〃	田 元 吉 谷 明		
〃	小山内 透	〃	熊 佐 々 木 裕 司		
〃	松 本 建 速 子	〃	佐 千 葉 貴 和		
〃	笹 平 克 政	〃	沼 後 藤 子 宏 円		
〃	花 坂 博 務	〃			
〃	佐々木	〃			
〔資 料 課〕					
資料課長	駒 嶺 高 幸				
主任文化財	高 橋 正 之				
専門調査員					

報告書抄録

ふりがな	もとみやくまどうびい いせきだいはいち び けつくつちようき けうこくしよ							
書 名	本宮熊堂B遺跡第1次発掘調査報告書							
副 書 名	盛岡開発事業関連遺跡発掘調査							
巻 次								
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第226集							
編 著 者 名	伊東 格							
編 集 機 関	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター							
所 在 地	岩手県盛岡市下飯岡11-185							
発行年月日	平成7年3月25日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北 緯	東 経	調査期間	調査面積 ㎡	調 査 原 因
		市町村	遺跡番号					
もとみやくまどうびい 本宮熊堂B	いわてけんもりなかし 岩手県盛岡市 もとみやくまどうびい 本宮字稲荷 3-20、4-2	03201	LE16-211	33度 20分 15秒	130度 21分 25秒	19930407 } 19930812	14,400㎡	区画整理（盛 南開発事業） に伴う事前調 査
所収遺跡名	種 別	主な時代	主 な 遺 構		主 な 遺 物			特記事項
本宮熊堂B	集 落 跡	奈 良	竪穴住居跡 2棟 土坑2基		土師器坏・甕・瓶 土製勾玉・土玉			
	集 落 跡	平 安	竪穴住居跡 7棟 土坑12基 溝4条		土師器坏・甕・鉢・須恵器 鉄製（鋤先、紡錘車、釘、刀子）			
	散 布 地	近 世	なし		寛永通寶、軒丸瓦破片			

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第226集

本宮熊堂B遺跡第1次発掘調査報告書

盛南開発事業関連遺跡発掘調査

印刷 平成7年3月10日

発行 平成7年3月20日

発行 勉岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

〒020 盛岡市下飯岡11-185

TEL (0196) 38-9001

印刷 勉 杜 陵 印 刷

〒020-01 盛岡市みたけ二丁目22-50

TEL (0196) 41-8000